轉んでも只起きぬ、といふ遣方で、笑左衞門が、釣り掛けた、陷穽に陷つて來た、年寄が、黑砂糖專賣の建言をした。その尻尾を捉まへて、是れから資金を、吐き出させよう、とするのだから、考へて見れば、隨分狡い遣り方だ。

斯うなつて見ると、年寄衆も、互に顏を見合せて、是れといふ考案を、立てる者はない。薩藩領地の、島々から取上げる、黑砂糖を、一手專賣にしよう、といふに就いて、資金が無いから、何うしたものだちう、といふ相談では、汪溜り、口を利けば、その資金を、脊負ひ込む事にもならう。取引先の資金に貸したのは、順次に引上げて、行く事も出來るし、返さなければ返さぬで、取立てる方法もあるが、相手が、藩主であつて見れば、一度出した金の、取上げに就いても、非常な苦心は要る。從つて、年寄衆が、口を噤んだのも、無理は無かつた。

『どうぢや、斯樣に致したならば、調達は出來やう、と思ふが、抽者の考へを、一應聽いて吳れ。三年若くは五年の年賦償却として、それには相當の利子を附し、一時借上げ、といふ事に致して、其方共が、之れに應じ得るか、何うか、それから先づ、決めやうではないか』

到頭、本音を吹いた、笑左衞門は、此の遁中を土臺に、町人の富豪から、資金を借り出さう、といふのであつた。

七

斯ういふ風にしたならば、藩の勝手元が樂になりませう、といふ建策を、爲せて置いて、それには資金が要るが、どうするか、汝等が先になつて、それだけの金を引受けろ、といつたやうな遣口で、談じ付けられたのだから、豈夫に、厭とは言へない、況して、今まで御用金として、徵發られたのとは違つて、年賦償還の方法で、借上げるのである、といふのみならず、相當の利息も附ける、といふのだから、普通の御用金借上げとは、其の間に相違がある。是れでは、呼び出された、年寄衆も、彼れ是れ故障を、言ふべき筋はないのだ。全然、笑左衞門が、考へて置いた壺へ一同が陷られたやうなものである。

其日の相談は、それで終つて、一同は歸つてしまつたが、更に日を替へて、再度の召集があつた。此時は、年寄衆の覺悟も決つて、それ〴〵分に應じて金は出す、といふ事になつて、黑砂糖專賣に就いて、其準備に要する資金は、調達する事が出來た。そこで、大島、德之島、鬼界ケ島を一つにして、島方役所と、いふのを設けて、その取締りには海老原壯之丞といふものを新に引き擧げて、當らせる事にした。此人は、算數に長けてゐて、事務の才幹もあるので笑左衞門は、疾くから眼をつけてゐたのだ。自分の考へた事が、どれ程の名案であつても、之れを直接に扱ふ、役人の思慮や、手腕が足りなければ、失敗に歸する外はないのであるから、さういふ點については、笑左衞門の注意は、なか〳〵深かつたのである。此の事が、成功を遂げた、といふのも、一方から言へば、海老原の取締が行屆いて、之れに依つて得る收穫が、見込み通りに、達した爲めである。

島方の役人が、取締を嚴重にして、三島から取上げる、黑砂糖を、大阪の藏屋敷へ運搬して、更に時機を見て、之れを賣出す。それについても、今までのやうに、出入の町人を、極めて置いて、指名で拂下げる、といふやうな事はしない。すべて、その本業の者を集めて、一般の入札にしたのだから、他の地方で出來ない、黑砂糖を、必要とする者は、どうしても、此の藏屋敷の手を經なければ、買入れる事が出來ないのだから、入札の上でも、自然と、競上るやうな形があつて、收入は、日に殖えるばかりであつた。何しろ、薩藩の專賣品であるから、入札を、させて見て、相場が安ければ、賣らないまでの事である。其處は、普通の商人と違つて、何時までも藏の戸前を締めて、値段の高くなるのを待つ、といふ遣方をするのだから、思つた通りの、値段には賣れる。場合に依れば、思つた以上の、値段にも賣れるのだから、收入の殖えるのは、當然であつた。小さい事ではあつたが、かういふ遣方をして、笑左衞門が、藩の收入を殖した、といふのは、今の煙草や鹽の專賣局の役人が、遣方の惡い爲めに、思つた程に儲からないで、之れを買ふ一般の人は、品質の良くないものでも、割高の金を出して買はねばならぬ、といふのとは、大分の違ひがある。若し、笑左衞門が、今日に生れたならば、もう少し、專賣局のやり方にも、好い工風が、考へ出されるかも知れ

ない。兎に角、長い間、之れをやつたので、到頭、大い借金だけは、償却が出來てしまつた。其の上に、明治になつても、引續いてやつて居たから、廢藩置縣となつて、今まで藩でやつてゐた仕事は、すべて政府へ引繼ぐ、といふ時に、此の專賣に依つて得た、積金が、殆んど九十六萬圓にも、なつて居た、といふ事だ。尙ほ聞く所に依れば、此の金が、右から左へ、薩軍の費用となつて、明治十年の戰爭が、あれだけにやれたのだ、といふ話もあるが、何れにもせよ、笑左衞門の財政手腕は、確なものであつたには違ひない。

（黑砂糖專賣は、藩として成功したが、島の人々は、之れが爲に、非常な壓迫をうけた。その影響が、明治時代迄續いて、實に慘目な生活をするやうになつた。今でも、那の島々の住民が、特に貧しいといふのも、此時の取締が深い原因を、つくつたのである）

黑砂糖專賣の事が、悉皆極つて、資金の調達も出來、是等の手順は、海老原莊之丞等が引受けてやる、といふ、見極めが付くと、笑左衞門は、危險を冒して三島へ、渡航し、親しく其の實地に就いて取調べをして、更に又、一段の知識も得た。鹿兒島へ歸つてから、海老原等に今後の取締方に就いて、充分の注意を與へ、專賣の方針についても、進んだ研究が出來て、もう安心となつたから、そこで、笑左衞門は、江戸表へ、引返す事になつた。

澁谷の別邸には、例の通り、榮翁が、頑張つて居るのだ。國本へ歸つた、笑左衞門から、時折の報告がある。それを見ては、獨りホク〳〵喜んで居たのは、萬事が、笑左衞門の見込みの通り行く、といふ消息であるから、それが、さういふ事になれば、藩の財政も、幾年ならずして回復が出來る、といふ希望が、手紙の端に、チラ〳〵見えるから、榮翁の喜びは、一通りでなかつた。最後の報告が、愈々黑砂糖專賣の手續も付いて、充分の見込みが立つたから、一度び、江戸表へ上る、といふのであつた。

そこで、榮翁は、首を長くして、笑左衞門が、出て來るのを、待つてゐるのである。所へ、日を重ねて、笑左衞門は、江戸の澁邸へ、到着した。その翌日には、澁谷の別邸へ、やつて來て、榮翁に、拜謁を願ひ出た。

『オー、笑左衞門か、待久しかつたぞ』

『お言葉、恐れ入りまする。思ひましたよりは、日數も要り、何事も、考へました半分にも屆かず、一日遲れに、出府も遲れまして、何とも申譯がありませぬ』

『何の〳〵、その斟酌には及ばぬ。其方の働きは、過分に思ふぞ』

『お言葉では御座りまするが、まだ手をつけましたばかりの事故、今後の經過が如何ありませうか。そればかりが、心配でなりませぬ』

『イヤ、その心配は、無用ぢや。其方の考へた事の、外れやう筈もなく、段々の書面に依つて、委細は、承知して居る。長途の疲れもあらうから、兩三日は、緩り休養ことにいたせ』

『重ね〳〵の有難きお言葉、何とも御禮の申しやうも御座りませぬが、差當りまして、大切の事が御座りまするゆゑ、押して拜謁を、願出まして御座りまする』

『フ、ム、そりや、何ういふ事か』

『矢張り、あの事柄に、附隨いたしました件で御座りまする』

『左樣か』

『恐れながら、お人拂ひを、願ひたう存じまする』

『宜い』

榮翁は、左右を顧みて、

『一同の者は、暫時遠慮いたせ、用事があれば、手を拍す、それまでは、參る事は、ならぬぞ』

『ハ、ツ』

鶴の一聲、一同は立つて、別の座敷へ下つた。後は、笑左衞門と榮翁と、差向ひになつた。

八

流石に、笑左衞門は、才智のあつただけに、一つの仕事が成功しても、それに安んずる、といふやうな事は、なかつた。尤も、初めから、黑砂糖專賣の計畫の外に、密貿易の一條は、考へて居たのであるから、何うしても、之れを遂行げなければ、思つた程に、金の增收を、見ることが出來ない。併し、それをするのに、一つの困難といふのは、矢張り、資金の一條である。一二年經つてからならば、黑砂糖專賣の方から、資金の運轉が、充分について來るから、其の方へも、手が出せるけれど、今の所では、資金を入れただけで、金の回收は、無論、一年の後である故、何うしても、密貿易の方の資金は、別に作らなければならない。藩の町人で、少し資產のある者には、大概今までに、御用金を命じて居る。其の以外の者にも、此事に就ての、資金を、出させて居るから、今更に、密貿易に就いての資金を徵發する事が出來ないのみならず、是れは、黑砂糖專賣とは違つて、國家の禁制を犯してする、密貿易の事であるから、迂濶した、金の借り方をすると、後に累が遺る。それは一大事であるから、笑左衞門の苦心は、一通りでなかつた。實は、江戸へ歸るのも、少し見合せたかつたのだが、それがあるから、兎に角、江戸へ出て、榮翁の耳へ、入れた上で、第二の策に掛かりたいといふ、考へがあつて、歸つて來たのである。

『其方の望みに依つて、人拂ひは致した。而て、用事といふのは、何事か』

『餘の儀でも御座りませぬが、琉球臺灣を首め、對岸の福建省へ、密かに貿易の途を、開き度く、是等は申すまでもなく、我國の禁制として、長く差止められてありますゆゑ、お耳に入れるのも、恐れ入りまするが、併し、我藩に於きましては、前年來、屢々この密貿易の事は、行はれて居りまするし、公儀に於いても、その幾分は、既に御承知の事と、心得まする。第一、公儀に於いて、面倒な事が起りますれば、私一人の罪として、最後の覺悟も御座りますれば、何卒この一事は、御許可を願ひたう存じまする』

榮翁は、年齡こそ、老つて居るが、なか〳〵豪快な人であつたから、そんな事に就いて、幕府を恐れるやうな心は少しも無く、却つて笑左衞門が、大膽な所を喜ぶくらゐであつた。

『それも宜からう。それらの事に就いては、予に、一々申さずとも、其方の一存を以て、取計らうて宜からう』

『それに就きまして、お願ひが御座りまする』

『何ぢや』

『資金の運轉に就いて、差支へ居りまする故、公儀に願出でまして、資金の借り下げを、致し度く存じまするが、此の一事は、私の力にも及びませぬ。偏に大殿樣の、お口添への儀を、願ひたう存じまするが、如何で御座りまするか』

之れには、流石の榮翁も、驚いた。國家の禁制を犯して、密貿易をする。その資金を借りるのに、幕府へ談判つてくれ、といふのであるから、如何に何でも、そんな無茶な事は、出來ない。�笑左衞門の大膽な點は、愛して居たけれど、是れは、大膽を超越して、無鐵砲とでもいはうか。榮翁ほどの、强情な殿樣も、暫くは言葉なく、笑左衞門の顏を、熟と凝視て居たが、

『其方の心配も、然ることながら、此の一事は、予も、引受け兼ねるぞ。如何に、將軍家と、緣者の關係があればとて、豈夫に、左樣な資金を、貸し下げて呉れ、とも、言へぬではないか』

『一應は、御道理ではござりまするが、私の申上げまするのは、表面に於いて、密貿易を致したいからと、それが爲めに、資金貸下げを、願ふのでは御座りませぬ。それには又、別に正しい名儀が、有るので御座りまする』

『ハ、ア、正しい名儀とは、何ういふ名儀であるのか』

『御本國には、金銀を產出しまする山が御座りまする。是れは、公儀に於いても、既に調査濟みで、御承知の事と考へまするが、此の金銀を、產出す鑛山を、開掘いたすに就いて、資金が手廻らぬ故、資金の貸下げを願ふ、といふ

のが、名儀になりましたならば、別段に差支へもなからうか、と、心得まする』

『成る程……』

榮翁は、膝の進むのを忘れた。笑左衞門も、等しく膝を進めて、

『表面は、その名儀を以ちまして願出でまする。資金の幾分は、鑛山開掘に廻しまして、大部分は、密貿易の方に、使用致しましたならば、差支へは御座りますまい。そのうちには、黑砂糖專賣の方の金も、廻つて參ります故、年賦償還の方法さへ立ちまするならば、別に、公儀へ、御迷惑を掛ける次第も、御座りませぬ故、是非共に、お口添への儀を、願ひたう存じまする』

『さういふ、都合に相成るのならば、差支へはなからう』

と言つて、榮翁は、首を傾けて、尙ほ考へて居た。

『此事は、御大切の儀で御座りますれば、今日直に、といふ次第では御座りませぬ。兩三日、御熟考の後、何分の御沙汰、願はしう存じまする』

『ウム、宜し。一應、考へて置かう』

是れから、酒肴を下し賜はつて、笑左衞門は上首尾で、三田の藩邸へ、引揚げて來た。

それから幾度びか、榮翁の御前へ出た後、遂に榮翁も、承知する事になつて、是れから、鑛山開掘を名儀にして、幕府へ、資金貸下げの儀を、願つて出た。內部からは榮翁が、將軍御附の役方を動かす、將軍家も、外ならぬ榮翁からの申込みであるから、遂に此の事は聽屆けになつた。無論のこと、賄賂も、充分に使はれたのであらうが、兎に角、茲まで運び付けたのは、笑左衞門の力であつた。五箇年賦償還といふので、五萬兩の金を借りて、其の中の一萬兩を、鑛山開掘の方へ廻した。殘餘の四萬兩を以て、福建省沿岸の密貿易と、琉球、臺灣の、密貿易の資金に廻した。是れが又大當りで、年々の儲けが一通りでなかつた。黑砂糖專賣の方も、計畫の通りに行つたから、此の二つより、得て

來た金は、實に莫大なもので、さしもに貧乏で、首の廻らなかつた、藩の財政は、餘裕を生ずることになつて、天保年間には、江戸、大阪、鹿兒島の三箇所に亙つて、百萬兩づゝも非常準備金が、庫中に唸つて居る、といふやうな大い事になつてしまつた。

それであるから、笑左衞門の功は、何人も認めるのみならず、榮翁は言ふまでもなく、當主の齊興も、餘り好きな家來ではないが、斯うした大功を、立てた以上は、故障も言へず、笑左衞門の立身は、恰で旭日の昇るやうな、勢ひであつた。天保三年の十月には、家老格御側勤務となり、四年には、家老格班の列に進んで、三千二百五十石の大祿を、拜領するやうになつて、調所といふ家が、薩藩の重役列に、加はつてしまつた。

齊興とお由良の方

一

今の島津家は、正統の血統を、引いた人が、繼いで居るには違ひないが、實は、妾腹に生れた、久光の血統である。一口に、腹は借り物といふから、縱令、妾腹に生れた子でも、殿樣の胤を宿したのであるならば、敢て差支はないのだ。尤も、妾に、よく有り勝の密男でもあつて、生れた子だと、その胤についても、疑ひは起るけれど、殿樣一天張りで、生れた子に、疑ひを容れる筋はない。

正しい理窟から言へば、妾腹の子なぞは、餘り感心は出來ない。痩せても枯れても、一軒の家を繼がせやうといふ子を、賣春婦にも等しい、妾の腹に生へたからとて、別に、それは自慢にもならない事であるが、全て緣も由緣もない、他人の子を育てゝ、家を繼がせる事を思へば、少しでも自分の血が混つて居れば、其の方へ相續させるのが、人情の上から言ふたら、幾分の樂みは、あるかも知れない。

殊に、日本は昔から、其家の主人の子でなければ、家を繼がせるのに、都合が惡い、といふ風に、なつて居るのだから、正妻の腹に、子が宿らなければ、妾を雇つて、その腹を借りる事になる。是れは、上下を通じて、等しく行はれて居る習慣であるから、耶蘇教流儀の理窟から、打壞してしまふのは格別として、惡い習慣ではあるが、據所ないものとして、一般から認められて居る。

從つて、幾分でも、生活に裕な、小遣錢に、不自由をしない者は、妾の一人や二人は、養つて置いて、それとなく、他の前で、鼻を蠢かす事もあり、子孫を生殖ける、といふ考へからでなく、對手の容色に惚れ込んで、蓄妾する人もある。

それは樣々であらうが、兎に角、日本に於ては、妾を蓄へるといふ事を、惡事とはして居ないのである。況して、家の相續は、實子を以てしなければならぬ、といふやうに、限られて居るのであるから、蓄妾の風が、盛んになつて來るのも、止むを得ない譯である。

殊に、舊幕の時代にあつては、實子相續といふ事が、非常に嚴格して、見られて居たので、普通の武士にしても、實子の無い場合には、主人が死ぬと、其家は潰されてしまふ、といふやうに、なつて居たのだ。大名でも、藩主が死ぬ前に、相續屆を出して、それから幕府の方で、許可を與へる。その手續に、缺ける所があれば、いかに大い大名でも、直に取潰されてしまふ、といふ事に、なつて居たのだから、何の諸侯でも、此一事には苦んで、妾を抱へる事になるのだ。多くの中には、それを幸ひにして、子供が、幾人生れても、一向頓着なく、新しいのを擇んで、入れ替へ、詰め替へして、妾を抱へて居た者もある。餘り稼ぎ過ぎて、子供が多くなると、その處分に困つて、別に家を立てさせたり、家來の子供にしたり、色々な方法を講じて、子供の捨場を、搜す事もあつた。

久光は、妾腹の子であつて、正妻の子ではなかつた。父の齊興は、前にも言ふた通り、因州鳥取の領主、池田相摸守の長女彌姫といふ、御方を迎へて、既に邦丸といふ、立派な子供を、有つて居たのだ。既に、實子が、有る以上は、別に相續人を、求むる必要も無いのだから、妾なぞは、抱へなくても宜ささうなものだが、若し、大切な相續人に、間違があつては困るから、といつたやうな事が口實となつて、矢張り、妾を抱へるやうな事になつた。多くの妾の中で、一番に氣に入つて居たのが、お由良の方といふのである。その腹に生れたのが、普之進といふて、後に久光となる人だ。

邦丸は、正室の長子、而も、後の名君、齊彬である。何處の大名にも、よくある御家騷動は、かうした場合に始まるものに、極つて居るのだ。有名なお由良騷動といふ、島津家第二の擾亂は、是れが原因となつたのだ。

三田の四國町に、藤左衞門といふ、大工の棟梁があつた。その妻は、お貞といふて、なか〳〵利かぬ氣の女で、大工の妻などには、持つて來いの傳法肌、口も八丁、手も八丁といふ、女丈夫であつたが、亭主の藤左衞門は、何方かといへば、少し愚圖々々した方で、町内に、何か始まつて、藤左衞門が、出なければならぬ幕にも、女房のお貞が、出て行く、といふやうな調子で、時と場合に依れば、亭主を差置いて、自分が出遮張る事もある。十二三人の下方を使つて居るから、時には、近所の若衆と、間違ひをする事もある。そんな時には、お貞が出て行つて、大槻な爭は、話を定けて來るのであつた。對手の方に、充分の理窟があつても、お貞が行くと、油紙に火の點いたやうに、ペラペラ喋り捲くつて、對手には、一言も言はせないで、どうか斯うか、此方の申分を通して來ると、いふやうな事が、度度重なるから、そこで、鬼の女房に、佛の亭主といふ風評が、パツと立ち、遂には鬼のお貞に、佛の藤左といふやうに、一般の人が、蔭口を利いて、此夫婦の評判は、何時も、井戸端會議と、風呂屋の洗場では、噂に上らぬ事はない位であつた。

長男が、小藤次といふて、もう一人前の大工で、何處の仕事場へ行つたとて、押しも押されもしないだけの技倆は、有つて居た。親父の藤左衞門は、少し鈍物だけれど、仕事の見積りをさせたら、實に立派な棟梁であつて、同業者中でも、評判をされる位に、技倆の利いた方であつたが、その親父を有つて居る小藤次が、大工として、一人前の技倆がある、といふのだから、同業者からも、存外に尊敬されて、若親方と、言はれて居た。其妹が、お由良といふので、是れが、高輪の薩摩邸の、奥女中に上つて居て、年に二度の宿入には、歸つて來る。兩親は、餘り佳い容貌ではなかつたが、どういふ間違ひか、お由良が、非常の美人で、小娘の時分から、評判される程であつた。兩親も自慢で、舞踊の溫習會だとか、祭禮の屋臺が出れば、それへ飛込んで、なけなしの財布を、濡いても出させる、といふ

うな調子で、誰れが、言ひ出したか、三田の小町娘といふ評判が、時折は、兩親の耳にも入るから、それが嬉しさの餘り、習字や、裁縫は敎へずに、三味線だとか、舞踊だとか、又は長唄、清元、常磐津と、あるだけの費は仕込んで、何處の溫習會へ行つても、敗は取らなかつた。

二

一口に、大工の棟梁といふても、一から十まであつて、大いのになれば三十人や五十人の、下方は使ふが極くつまらない棟梁でも、五人や六人の下方は、使つて居る。藤左衞門は、出入場も宜いし、大きな商店の二三軒を、常得意に有つて居たから、十二三人の下方を、繰廻してさへ行けば、立派な棟梁で、通れる格であつた、所が、人間の慾には、限りが無いから、大きな仕事も、引受けて見たくなる。自分の技倆があるだけに、自信の力も強く、他の勸むるに任せて、無理な算段をして、請負仕事をやつた。それが、身分に相應しない程の大仕事で、禍ひの原因となり、二三度損をした穴が、何うしても塞がらない事になつてから、何時か、質屋の暖簾を、女房のお貞が、潛る姿を、近所の人が見る位になつたのだから、家内の苦しいのは、言ふまでもない。搗て加へて、藤左衞門が、同業の散會の餘勢から、品川の土藏相摸へ、上つた時に、相方に出た、女郎の氣象が面白い、といふので、全然、之れに耽溺んで、少しても隙があれば、土藏相摸で、夜を明すやうになつた。さうなると、女丈夫のお貞が、承知しない。明けても、暮れても、藤左衞門の夫婦喧嘩といへば、近所の人も、匙を投げて、又始まつたか、那ア不斷にやられちや、仲裁に行く張合もないと、ドタンバタンの騷動が始まつても、仲裁に、飛込んで來る者も無いやうになつた。親父が、道樂を始めたのを幸ひに、伜の小藤次も、別の女郎屋へ上つて、是れも、親父に負けぬ、放蕩を始め出したから、益々お貞は、氣が氣でない。從つて、夫婦喧嘩の絶える日は、無い位であつた。

二三日續いて、家を明けたので、藤左衞門は、何となく自分の家でも、體裁の悪いものか、途中で飲つた、酒の勢

ひて、蹌踉く足元を、踏み縮めながら、ガラリと格子をあけて、入つて來た。

『オヤ、何方』

『エープ、俺だい』

『誰だい、門口で俺だいなんで、威張つて居るなア、俺なんて人は、ないんだからね。犬や猫でも名前があるんだから、ハツキリ何の何某と、名前を言つたら、宜いぢやないか』

大きな聲で、奥から呶鳴られたので、藤左衞門も、少し怯んで、上りかねて居る所へ、軈て、障子を開いて、ヌツと半身を、現はしたお貞は、フ、ムと、鼻の先で、冷嘲笑つて、其儘障子を、ピタリと閉めて、奥へ入つてしまつた。

如何に溫和なしい、藤左衞門でも、小癪に觸つたものか、ガタ〳〵〳〵と、足で障子を開けて、奥へ入ると、大きな火鉢の前へ、ドツカリ胡坐を組いて、お貞の顏を、ヂロ〳〵と睨みながら、煙草を喫み出した。お貞の方でも、片膝立てゝ、長煙管で、煙草の煙を、輪に吹いて居る。此所、暫時は、睨み合ひの態である。

『オイ、お貞』

『何です』

『何ですぢやアねえぜ、亭主が、歸つて來たんぢやねえか。よくお歸んなすつたとか、お變りがありませんかとか、何とか御挨拶あつたつて、罰も當るめえぜ』

『フム、馬鹿にして居らア、分別盛りを、通り越した、老い年を仕つて、明けても、暮れても、女郎買ばかりして居て、家の中ア、火の車で、熟つて居る位だ。少たア子供の手前もあるんだから、お前さんだつて、考へるが宜いぢやないか』

『是ア驚いたな。歸宅早々劍突たア呆れの虫が治まつて……グーツプ、嗚呼々々詰らねえなア。矢つ張り、彼女の所に居た方が、餘程氣樂だ』

お貞は、眼の色を變へて、膝を立て直した。

『何んだつて、もう一遍、言つて見やアがれ、普通ア置かねえぞ』

『何だ、普通ア置かねえ。太平樂を吐くのも、程にしろい。亭主關白の位といつてな、汝なんざア、要が嬶ぢやねえか、俺が、養つて置いてやるから、三度の飯を食付けるんだ。普通ア置かねえとは、何てエ言草だい』

『オヤ〳〵、お前さん、可怪なことを言ふね。嬶は、養つて置いてやるんだと。笑かしやアがらア、今でこそ、そんな太平樂も吐くだらうが、十年前にや何んなだつたか、考へて見ろい。私が、御飯を食べないで、お前さんの、お辨當の中へ、お腹が空くだらう、と思つて、一ぱい御飯を詰めてやつたら、汝に、そんな苦勞をさせちや濟まねえが、もう少しの、辛抱だから我慢しろ、と言つて、拜んだぢやないか。それが、何うか斯うか、人間らしい大工になつて、棟梁とか、親方とか、言はれるやうになつたからツて、養つて置いてやるたア、何といふ言語だい』

『何だ、此女ア、生意氣な事を吐しやがるな、俺が、養つて置いてやる、といつたのが、癪に觸つたかも知れねえが、汝の言つた、普通ア置かねえ、と言つたのは、何ういふ言葉だい。賣言に、買言葉といふ事を知らねえか。汝の言ひやうが、氣に入らねえから、俺の方でも、勝手な熟を吹くんだ。それが何うしたつて言ふんだ』

『お前さん、口から年貢が出ない、と思つて、勝手な熟を吹くね。吉原の何の何某といふ、大きな樓へでも登つて、入山形に、二星の花魁でも、買つて居る事かい。要が、宿場女郎の手練手管に、引つ掛りやがつて、老い年を仕つて、心神を拔かして居て、何處に、棟梁の估券があるんだ。そんなこツて、何うして下方の教誨が付くと、思つて居るんだい。それだから、汝の餓鬼迄が、親父に、負けねえ氣になつて、詰らねえ女郎に、引つ掛つて、家を外に、遊び廻つて居たつて、叱言の功能も無えぢやねえか。喉元過ぎりや、熟さを忘れる、といふ通り、此頃になつて、何うか斯うか、小遣錢の融通が、付くからといつて、そんな勝手な事をして居るが、もう來月は、お盆ぢやないか、田舍のこたア知らないが、江戸の町ぢや、盆と歳暮は、一年に二度の仕切時だよ。そんな暢氣な顏をして、酒なん

ぞを飲つて、腐れ女郎に、引つ掛り、のらりくらりと、遊んで歩いて、來月のお盆の始末は、何うする所存だい。この助平野郎がッ』

『何んだ。此女、亭主に向つて、助平野郎と、吐しやがつたな』

『言つたのが、何うしたんだい』

『此畜生』

と言ひながら、平生は、好人物の藤左衞門だが、酒の加減と、女郎に騙されて居るので、幾分か調子づいても居たんだらう。お貞の横面を一つ、ピシヤツと張つた。左なきだに、負けて居ない、お貞は躍起となつた。

『オヤ、此畜生、打ちやアがつたな』

と言つて、立上る途端に、火鉢の上に、載つて居た、土瓶を取つて、投付けた。同時に、藤左衞門も、立上つた。犬も食はない、夫婦喧嘩は始まつたのだ。

三

藤左衞門は、丈も低くければ、痩形の見たばかりでも、弱々しい體格だ。それに反して、女房のお貞は、頑丈した骨格で、少し肥肉の方であつた。平生から、腕力自慢の女として、組討になつたら迚も物にはならない。疾くも、藤左衞門は押倒されて、打たれたり、引掻れたり、大亂痴氣の所へ、歸つて來たのが伴の小藤次だ。之れを見るより、驚いて間へ割つて入りながら、

『何だなア。お母止しねえよ。他に見られると、不體裁やな。父だつてさうだ。男の癖に、意氣地の無え、お母に組伏せられて、動かれねえなんて、そんなに弱けりや、初めから喧嘩をしねえが、宜いぢやねえか』

『何だ、此餓鬼やア、生意氣な事を、吐しやがつて』

と、亭主の藤左衞門を、押へて居た手を放すと、今度は、伴の方へ、喰つて掛かつた。小藤次が、呆氣に、取られて居る、胸倉を取つて、二つ三つ、小突き廻して、向ふへドンと突いた。力が餘つて、小藤次は、臀餅を搗く。そのうちに、藤左衞門が、起き上つた。

『此女ツ、俺を、組伏せやがつたな』

と言ひながら、打つて掛かる。喧嘩は、益々大きくなるばかりで、手の着けやうが無い。近所の人は、又始まつたといふ位なもので、誰一人として、仲裁に來る者は無かつた。

燈を點ける時分であつたから、諸方の得意場へ、行つて居た下方が、段々歸つて來て、此有樣を見ると、中へ割つて這入つた。けれども、お貞の勢ひが強いので、迚も、手の着け樣がない。お貞は、メソ〳〵泣きながら、金切聲を、振絞つて叫く。藤左衞門は、顏の色を蒼くして、怒つて居る。あんまり喧嘩が長くなつたので、差配の甚兵衞が、聽き兼ねて、裏口からノソリと、入つて來た。

『戯談ぢやないよ。明けても、暮れても、老い年齡をして、お前さん達は、夫婦喧嘩ばかりして居て、何うするんだい。第一、私が持つて居る、長屋も澤山あるが、お前さんの家位、喧嘩をする所は無いよ。マア〳〵、私に任せなさい。どうせ、碌でもねえ喧嘩だらう』

夫婦の間に坐つて、パク〳〵煙草を、吹し出した。

無論、家賃も溜つて居るのだから、この差配さんだけには、お貞も、頭が上らないのだ。

『宜い所へ、來て呉れたのね。マア聽いて下さい。此馬鹿野郎が……』

『何だ、此畜生、俺を、馬鹿と吐かしやがつたな。痩せても枯れても、亭主だぞ』

『何が亭主だい。荔枝の腐つたやうな、面をしやがつて』

『何だと』

また、藤左衞門が、立上らうとするから、甚兵衞は中腰になつて、藤左衞門の手を、確り押へた。

『マア、お待ちなさい。棟梁ツ、お前さんだつて、老い年齡をして、何てことだい。近所の人が聞いたつて、感心する者は、一人もありやしないやね。お貞さんだつて、さうだよ。二人差向ひの喧嘩なら、格別のこと、私が、斯うして仲裁に、來て居るのに、それを押退けて、亭主に惡口を吐くといふことがあるかい』

『だつて、差配さん、此野郎が、餘り馬鹿々々しいから、私や、腹が立つて、ならないんですよ』

『假令、どんな事があらうと、御亭主にや違ひはないぢやないか。憎くつてなつた、夫婦でもなからうから、腹を立つて喧嘩をする時には、婚禮の晩の事を、思ひ出せ、といふ諺もある。相互に餘り遠慮が、なさ過ぎるから、斯んな事にもなるんだ。全體、何だつて、喧嘩なんぞ始めたんですね』

お貞は、玆ぞと乘出して、

『マア、聽いて下さい。斯ういふ理由なんですよ。丁度、去年の暮の散會に、此野郎が……』

『お待ちなさい。野郎呼ばりは宜くないよ、お前さんの御亭主だから、藤左衞門とか、棟梁とか言ひなさい。何の中にも禮儀がある、といふぢやないか』

『禮儀も、へちまもありませんよ。斯んな奴は、此野郎で澤山でさア』

『サア、それが惡いといふのだ。だが、それから何うしたといふのかね』

『品川の土藏相撲へ行きやアがつて、腐つたやうな女郎に騙されて、それからといふものは、血道を上げて一生懸命、明けても、暮れても、其處へばつかり、通つて居るんぢやありませんか。それも、年齡の若いうちの話なら、格別のことだといふ、理窟も付くでせうが、分別盛りを通り越した、この老年になつて、そんな事をされちや、小藤次の教誨も出來なきや、下方の叱言も、利かないぢやありませんか』

『ウム、そりや道理だ。藤左衞門さんが、宜くない。それから何うした、といふのかね』

『それを私が、愚圖々々言ふから、といつて、此野郎が、直き女だと思つて馬鹿にして、直ぐ打毆るんでせう。私だつて、我慢が出來ないぢやありませんか』

『成程。こりや藤左衞門さん、お前さんが善くない。よく夫婦喧嘩はするが、何ういふ理由か、そんな事は聽かずに居たのだが、矢張り職人氣質で、氣が短いからの事とばかり、思つて居たが、お前さんが、今此の年配になつてから、女郎買でもないぢやないか。小藤次さんが、女郎買に行くことは、聞いて居たが、何かい、棟梁も、矢つ張りやつて居るのかい』

斯ういふ風に眞面目になられては、流石の藤左衞門も、體裁が惡いから、窮屈さうに恐縮まつて、頭を掻きながら、

『そりや、差配さんの前で、ごぜえますけど、私だつて人間ですから、何も年齡を老つたから、人情が無くなる、といふ理由は無えんです。面白い事は面白いし、詰らねえ事は詰らねえんだ。前後の思慮もなく、ウカ〳〵遊んで居る譯ぢやねえが、二つ三つ、大きな仕事を失敗つて、家の中も苦しいし、此女の面を、見て居たつて始まらねえから、白粉臭い女でも、抱いて見たら、少たア氣苦勞も取れるだらうと、一遍か二度、女郎買に行つたからつて、此女は、無暗に叫きやがるから、そこで、喧嘩にもなつたんです。洵にお世話を、掛けて濟みませんが、どうか引取つて、お吳んなせえ』

四

『双方の話を聽いて見ると、餘り違ひ過ぎるから、口の出しやうもないが、女郎買をするのは、男の技倆だ。此間も講釋場へ行つたら、男の女郎買は、浩然の氣を養ふんだ、と言つて居た。私なんぞにや、そんな氣の、持合せはないから女郎買に行くにも及ばないぶ、お前さん達や、マア稼業柄の事で仲間の交際もあるから、散會の餘勢で行つた、といふ事もあるんだらう』

藤左衛門は、百萬の味方を、得たやうな心持になつて、

『そりや、さうですとも、差配さんの言ふ通りでさア、それを、此女が、愚圖々々いふから、私も、腹が立つぢやありませんか』

お貞は、堪らず乘出した。

『イ、エ、差配さん、そりや大變、話が違ふんですよ。一遍や二度、女郎買に行つたつて、私が、それを愚圖々々いふやうな、開けない女ぢやア、ないんですよ。今月に入つて、もう二十遍も行つてるんですからね』

『エツ、そりや驚いたね。今月になつて、二十遍行つてる……お貞さん、戯談ぢやないよ、まだ今日が、十二日ぢやないか、十二日しか、日が經つて居ないのに、二十遍行ける譯が無いぢやないか、そんな事を言ふから、喧嘩になるんだよ』

『それでも、差配さん、出たり入つたりしたのを勘定したら、二十遍位に、なるでせう』

『アツハツハ、、、、、面白い事を言ふね。そんな他愛もない事を、言ふてるのなら喧嘩にもならないが、何方にしても棟梁、お前さんも善くない。少しや慎んだら宜からうぜ、といふて、お貞さんも、餘りよくはなからう。御覽なさい。棟梁の顏中、爪の痕だらけになつちやつた。見榮を張る、稼業をして居る、棟梁が、此顏ぢや、仕事場へも、行けないぢやないか』

『そりや、構ひませんよ。仕事場へ、行けないやうな面になつたら、女郎買にも行けまいから、差引勘定して見りや、こんな結構な事はありやしませんや』

『成程、こりや面白いな。畢竟、チン〳〵筋の喧嘩なんだから、棟梁、お前さんも、三日に一度位は宜いとして、殘餘の二日位は、家に寢るやうにして可愛がつてやりやア、お貞さんだつて、喜んで居らアね』

差配さんは、ニヤ〳〵笑ひながら、お貞の方を振向いて、

『さうだらう、お貞さん。三日に一度位は宜いとして、殘餘の二日を、可愛がつてお貰ひよ。さうすりや、仲が好くなるのだから、ハツハ、、、、、』

お貞は、益々〳〵面を膨らかして、

『馬鹿にして居るね。差配さんは、仲裁に來たのか、人を茶化しに來たのか、判りやしないや。こんな奴には、可愛がつて貰はなくても、私や、宜いんだよ』

『オツト、そりやいけねえ。そんな事は負惜みで、感心出來ないね。矢張り可愛がつて、貰ひたいが山々で、喧嘩が始まるんだから、宜いつて事さ。私も、今でこそ、こんな藥罐頭の、ヨボ〳〵爺に、なつて居るが、昔は、やつぱりやつたものでね。今の嬶が、町内で、評判の娘盛り、常磐津の溫習會に行つた時、私が、矢張り今でも、時々は唄つても見たくなるが、少しや咽喉が鳴るんで、お師匠さんの溫習會に、行つた時に、あの婆さんと、出來合つてしまつて、大分その間にや紛紜もあつたが、到頭、友達が、仲へ入つて、夫婦になつて、もう、彼れ是れ四十幾年、お互に梅干になつてしまつたから、治りも付いて居るが、お前さん達だつて、直に然うなるんだから、マア惡い事は言はないから、私に、任せて置きなさい』

仲裁上手の差配さんが、面白可笑しく、自分の惚氣談なぞを入れて、口を利くのだから、もう此上に、喧嘩の仕樣は無い。時間が經つて、癇癪も治まつたから、兩人は靜肅になる。差配さんは、ニコ〳〵笑ひながら、煙草を吹かして居る。

心が落付いて見れば、藤左衛門も、洗石に、體裁が惡くなつて、

『オイ、お貞、正齋河豚のやうに、妙に膨れて居ねえで、差配さんも、來て下すつたんだ。一ぱい燗けたら、何んともんだい』

『そんなこたア言はなくつたつて、氣が付いて居るんだよ』

お貞は、減らず口を叩きながら、立つて臺所へ行つた。見習ひに來て居る、弟子を呼んで、何か頻りに言ひ含めて居る。差配さんは、見て見ぬ顏で、

『棟梁、そんな心配を、しちやいけないよ。差配といへば親も同樣、店子といへば子供も同樣、何方にしたつて、親子の仲だ、お前さん達が、チン〳〵喧嘩をして居る度に御馳走なんぞになつちや、差配さんの、估券に觸るぢやないか、ハツハ、、、、、』

『差配さん、なか〳〵巧い事を言ふね。そんな事を言つたつて、酒の香を嗅いだら、咽喉がグイ〳〵するんでせう』

彼是する中に、近所の料理屋から、吸物と刺身が來る。酒の燗が出來て、一ぱい飲み始めた。お貞の顏が、ホンノリ櫻色になる時分には、もう今までの喧嘩は、何處へ行つたか、忘れたやうな顏で、面白さうに話して居る。それでも時々、妙な眼をしては、喧嘩になりさうだから、其處は、差配さんが、老年の功で、巧く調子を合はせる。

『ネー棟梁、是れから先は、喧嘩は廢すことだね』

『どうも、差配さん、何とも濟みません。何ね、此女が、愚圖々々、言ひさへしなきや、私だつて、我慢して居るんですが、あんまり執拗く言はれるもんですから、それで、ツイ打毆つたり、何かしたんでさア』

『マア、そりや判つたから宜いさ。時に、お貞さん、お前さんも、餘り御亭主に、逆はない方が、宜いよ』

『さう、差配さんのやうに、眞面目になつて言はれると、私も、體裁が悪いけれど、此人が、妙に搦んで來るんだから、到頭喧嘩にもなつて、飛んだ亂痴氣騷ぎを、やつてしまつたんです。後になれば、どんなに體裁が悪いか、知れやしません』

『ウム、そりや、さうなくちやならない筈だ。先刻も言ふ通り、惡くて夫婦になつたのぢやないからね。お前さん達、二人の仲も、媒酌人があつた譯でない似のことたア、私も、聞いて居るんだ』

『厭な差配さんだね。そんな詰らない事を言つて、お前さん、體裁が悪いぢやないか』

『ナニ、體裁の悪い事があるもんか、こりや、差配さんの言ふ通りだ。夫婦になれなけりや死んでしまふと、お前か、あの時言つたから、俺だつて本氣に、なつちやつたんぢやねえか』

『何だね、お前さん、そんな馬鹿な事を言つて、お止しよ』

差配さんは、大滿足の態で、

『ハツハ、、、、、、マアさうなれば、もう大丈夫だ。私も、家に用があるんだから、是れで御免を蒙りますが、どうか後は、美しくやつて下さいよ』

と、言ひながら立上つた。藤左衞門夫婦は、

『マア、宜いでせう。もう少し飲んでお居でなさい、差配さん……』

『イヤ、さうしても居られないんだ。餘り騷動が大いから、やつて來たんで、家の婆さんが、氣を揉んで居るといけねえ、一遍歸る事にしよう』

『そりや、濟みませんね』

お貞も、共に立上つて、

『差配さん、何時も、御厄介になつてばかり居て濟みません。何れ後刻で、御挨拶に行きますよ』

『ナニ、そんな事は、して貰はなくつても宜い。喧嘩さへして呉れなきや、これに越した事はないのだ』

差配さんは、出て行つた。

後は、夫婦の差向ひ、何となく、、、、、、、、

が、

『許せ』

と、言ひながら、入つて來た。

五

夫婦喧嘩は治つて、差配人も歸り、下方や、伴の小藤次は、別の座敷に、ゴチヤ〳〵と集まつて、小さくなつて居る。夫婦喧嘩といふた所が、仇敵同士の末といふてはなし、藤左衞門が、女郎屋遊びの、てれ隠しと、女房のお貞がちん〳〵筋から、起つた喧嘩であるから、双方で、呶鳴るだけ呶鳴つて、氣が鎭まれば、仲の惡い犬が、集まつて居るのとは違つて、今までの風は、何處を吹いたか、といつたやうな顏付で、夫婦が、呆然として居る所へ、立派な武士が、入つて來たのだから、夫婦は、急に姿勢を直して、こんな時には、何時も、先に飛出す、役廻りのお貞が、緣端へ出て來て、叮嚀に、手は突いたが、流石に、言葉は出ない。輕く頭を下げて、武士の顏を、熟と凝視めた。

『其方は、藤左衞門の妻であるか』

『ハイ』

『拙者は、三田の御藩邸から、參つた者であるが、藤左衞門に、面會いたしたき筋があつて、まゐつたもの……、宜しく取次いで呉れ』

『ハイ、藤左衞門に、何か御用でございますか』

『ウム、藤左衞門は、在宅か』

『宅に居りますから、どうぞお上りなすつて……』

と言ひながら、後を顧いて、

『モシお前さん、薩摩樣から、お出でになつた、と仰しやるんだから、早く御出迎へを、なさいよ』

澁々立上つた、藤左衞門は、何となく面目わるさうに、是れも兩手を突いて、

『ヘイ、私が藤左衞門でござえやすが、な、何か、御用でござえやすか』

『其方が、藤左衞門か』

『ヘイ』

『許せ』

『ヘイ』

夫婦が、狼狽して居るうちに、彼の武士は遠慮もなく、ヅカ〳〵と、上がつて來るから、お貞は、薄ツぺらな座蒲團を出して、

『サア、どうぞ、旦那……』

武士は、それへ坐つた。そのうちに、お貞が、澁茶を注いで出す。藤左衞門は、窮屈さうに畏まつて、膝の上に、兩手を突いて、謹愼くして居る。その樣子が可笑かつたか、武士は、嫣然と笑つて、

『今、改めて面會いたすが、其方が、お由良殿の實父、藤左衞門か』

『ヘイ、左樣でござえやす』

『此度、お由良殿は、殿樣の御手が着いて、目出度い事に、なつたのぢや』

『ヘ、ー、何が着いたんで、ごぜえやすか』

『否さ、殿樣の御手が着いた、と申すのぢや』

藤左衞門には、何だか解らなかつた。

『手が着いたと、申しやすと、何んな事になつたんで、ごぜえやすか』

『殿樣の御手が着いて、お由良殿には、目出度い事になつた、といふのぢや。それが、其方には解らぬか』

『ヘ、ー、どうも、それが解らねえのでごぜえやして、ヘイ』

眼を圓くして、之れを聽いて居た、お貞は、其處へ乘出した。
『何ですね、その位な事が解らないで、お前さん、不面目ぢやありませんか』
『そんな事を言つたつて、解らねえ事は解らねえんだ。お前には解つたのか』
『ハー、私にや、悉皆解つてらアね』
『そいつア、豪氣だ。俺にや、些も解らねえんだから、お前が出て、何とか挨拶をして吳んねえ』
『それぢや、私が代つて、御挨拶をしませうよ』
『ウム、さうして吳んねえ』
お貞は、藤左衞門に代つて、
『あのなんでござりますか、お由良に、御手が着いた、と申しますと、矢張り殿樣と、好い情交になつたんで、ござんすね』
『コレツ、何を申すか、如何に下賤の育ちとは言ひながら、少と言葉を謹んだら、何うぢや』
『ハイ』
『唯今、拙者が、申した事が、解つて居るのか』
『よく解つて居ります』
『解つて居つたら、それで、宜いのぢや』
『ハイ』
『それに就いて、殿樣の御沙汰を蒙り、拙者が、御使者として參つたのぢやから、よく氣を鎭めて、うけたまはれ』
『ハイ』
『殿樣の御手が着いて、御由良殿が、目出度い事になつたのぢやから、親共に對面して、其旨を申し傳へうと、新藤

に有難い、御沙汰が下つたのぢや。宜いか、解つたか』
『お目出度い事になつた、と申しますと、あの娘のお腹でも、大きくなつたんでござんすか』
『如何にも、其通りぢや』
『オヤ〳〵、マア、それは驚きましたね。小娘と小袋とは、油斷がならないと言つた通り、まだ、小兒のやうに思つて居ましたが、もうそんな事が出來るやうに、なつたんでござんすか。それにしても、殿樣は、なか〳〵好色なお方で、ござんすね』
藤左衞門の方を顧いて、
『ネー、お前さん』
『何でえ』
『あの娘がね』
『ウム』
『お腹が、大きくなつたんだとさア』
『フ、ム、そいつア驚いたな。何だつて腹なんぞ、大きくなつたんだ』
『お前さん、判らない人だね。私と、此旦那樣と、此のくらゐ話をして居たら、大概察しさうなもんぢやないか、あの娘はね、殿樣の御手が着いたので、お腹が大きぐなつたんだとさ』
『フ、ム、それぢや、彼娘が、殿樣と私通いたんで……』
『吐ツ。何を言ふんだね、私通いたなんて……』
『それだつて、私通かなきやア腹だつて、突り出さねえちやねえか』
『それは、さうだけれど、物も言ひやうがあるてえぢやないか……旦那樣、口の利きやうも知らない、職人の事でご

ざいますから、どうか御勘辨をなすつて下さい』

夫婦の問答を、聽いて居る武士は、可笑しさがこみ上げて來るが、ゲラ〳〵笑ふ譯にも行かず、熟と夫婦の樣子を、見て居ると、お貞は、

『そんな事に、なつてしまつたんで、お暇でも、出るんでござんすか』

『否、左樣な次第ではない。殿樣の御寵愛一方ならず、殊には御胤を宿した、といふ以上、末長く御邸に、お置き遊ばすの御所存で、改めて藤左衞門に罷出ろ、との御沙汰でござつた』

『へー、それぢや、亭主が、御邸へ行くんですか』

『左樣ぢや』

『さうすると、何ういふ事に、なるんでござんせうか』

『別に何ういふ事になる、といふて、難しい事ではないが、殿樣の御手が、着いた上は、お由良殿は、何れお部屋樣と、崇められる事になる。從つて、其實父に當る、藤左衞門には、殿樣に於かせられても、一應は對面して置かうの御思召から、斯樣な御沙汰が下つたのぢやらうと、拙者は推測いたすが、何れ有難い御沙汰が、下る事ぢやらう』

『さうでござんすか。本當に、あの娘も、巧い事を、したんですね』

『コレツ、又しても、左樣な不謹愼な事を申す。唯今、拙者が、申した事が解つたか』

『ハイ、よく解りましてござんす』

『然らば、明朝は、御邸へ罷出るやう、確と申渡したぞ』

『ハイ、よく私から亭主には、言つて聞かせます』

『どうか、さうして呉れ。就いては、仕度金の料として、之れを遣はす』

武士は、懷から取出した、金封一齣、扇子を半開きにして、其上に載せて、お貞の前へ差出した。

『こんなに、澤山の御金を戴いても、宜しいのでござんすか』

『殿樣よりの御沙汰に依つて、藤左衞門の罷出るに付いて、仕度料として遣はすのぢや。有難く頂戴いたせ』

『有難う存じます、……モシお前さん、何とか仰言いなね』

『俺にや、何だか半分しきや解らねえんだから、お前が、萬事宜いやうに、談判つて置いて呉れ』

『何だね、談判へなんて……』

『然らば、拙者は、これにて立歸る』

『ハイ、御苦勞樣でございました』

使者に來た、武士は、直に歸つてしまふたが、その後は、大騷動になつた。

六

三田の藩邸に、仕へて居た、奥女中に、島野といふ婦人があつた。その御附の女中として入つた、お由良は、大工の娘ではあつたが、容貌の佳い所から、奥女中のうちでも、評判されて居た位で、何時しか、齊興の眼に着いて、人知れず、お由良に注意して居る。そのうちに、年を越えて、お由良も、十七歳の娘盛り、何時か、齊興の手が着いて、度々御用を勤めて居るうちに、腹が膨脹して來て、もう隱す事の出來ぬ程の大きさに、なつて來たのだ。そこで、齊興は、改めてお由良を、公然の妾にする、と言ひ出した。其時分の、大名の奥には、斯ういふ事は常事で、少しも怪しむべき事ではないのであるから、早速に、親元へ、その相談を爲る事になつた。

殊に、夫人の彌姫は、立派な育ちの御方であつたから、決して悋氣を爲るやうな、事もなく、此事をお聞きになると、却て、自分から進んで、齊興に、賀辭を言ふ、といつた樣な譯で、齊興も、今更に、夫人の手前、體裁は惡かつたが、可愛いと思ふて、手を着けた、お由良の憎い筈はなく、そこで改めて、妾とするに就いても、一應は、實父の

藤左衛門に、會ふて置かなければならないのであるから、その使者を、送る事になつたのである。

藤左衛門の家では、使者の武士が、歸つた後の、騷動が大い。

『ネー、お前さん、人間の運と、いふものは判らないね。あの娘が、殿樣を、手に入れて、お腹が大きくなるなんて、何といふお目出度い事だらう。斯うなつて見ると、お前さんや、私なんざ、つまらない大工夫婦ぢやないよ。今に、御邸の方へ入つて、大した生活が、出來るやうになるんだから、私は、どんなに嬉しいか判らない。お前さんは、何を呆然して居るんだい』

『ウム、嬉しいやうな、恐ろしいやうな、俺にや、少も樣子が、判らなくなつちやつた』

『何だね、男の癖に、意氣地がない。お大名の中でも、屈指の薩摩樣の、お手が着いたと云やア、どうせ、御本家の後繼にならないでも、五萬石や十萬石の、お大名にはなれるんだから、私達アさうなると、お大名の祖父母ぢやないか。近所の奴が、蔭口を利いて、私達のことを、色々に言つて居る、彼奴等には、今に土下座を爲せてやるんだから、こんな嬉しい事はないぢやないか。それを、お前さんが、呆然して居るから、私や、癪に觸つて、ならないんだよ』

『そんな事を、言はなくつたつて宜いぢやねえか。俺だつて、嬉しくねえ譯ぢやねえが、何だか恐ろしいやうな氣がして、それに一番、胸に閊へるのは、明日の朝、御邸へ出て來い、と云ふなア、何んな事になるか、それを思ふと、氣が遠くなるやうだぜ』

『だつて、殿樣が嬉しいから、お前さんを、迎へに寄來したんだね』

『ウム、それが、俺にや解らねえんだ。いくら彼娘が可愛いからつて、この薄汚ねえ爺が、可愛い理由アねえんだから、若し出掛けて行つて、汝のやうな汚ねえ爺があつちや、みつともねえから、其處へ出ろ、手は見せねえなんぞと、やられた日にや、俺の首が、飛んでしまふんだから、何となく俺や、心細くなつちやつた』

『そんな、馬鹿な事があるもんかね。娘を、自由にした上に、親父を殺すなんて、そんな事をしたら、薩摩樣の御家が、潰れてしまふんだよ。あゝして、立派な御武家が、迎へに來て、こんなにお金を、置いて行く位だから、直にも引取つて、お父さんとか、お母さんとか、言つてくれるんだらうから、もうお前、大工なんぞをして、釣の頭を、打いて居るにや、及ばないよ』

『さうなりや、俺も有難えが、俺や、どうもあんな所へ出つけねえから、何んな事を、言つて宜いか、それが判らねえ。どうだらう、汝明日は、一緒に行つて呉れねえか』

『戯談ぢやないよ。私達が、あんな所へ行けるもんかね。行つて宜いのなら、私にも、一緒に來い、と言ふだらうが、お前さんばかりに來いといふのだから、マア、お前さん、行つてお出で……』

『ウム、そりや、行かにやアならねえんなら、行つても來やうが、マア、行つてから、何んな事を、言つたら宜いか、俺にや、挨拶も出來ねえぢやねえか』

『それだからさ、そんな事になると、私にも判らないから、あの甚兵衛差配人が、平生から、理窟ツぽい事を言つて、難しい本の事なんぞを、時々言ふから、マア、甚兵衛差配人の所へ行つて、斯ういふ事になつたんだが、明日御邸へ行つたら、何と言つて、挨拶したら宜いかつて、お前さん、是れから行つて、稽古をしてお出でよ』

藤左衛門は、思はず膝を打つて、

『ウム、さうだ。宜え所へ、氣がつきやがつた。あの甚兵衛の、デコボコ差配人なら、それ位えな事は、別つて居るだらうから、それぢや、俺は、是れから直に、挨拶の稽古に、行つて來らア』

『さうおしよ。それからね、明日行くにしても、袴や紋付の羽織が、なけりや仕方がないんだから、それも序に、借りるやうに話をしておいで』

『そいつア、いけねえ。此前、葬式の時に、借りて行つて鉤裂をしたら、恐ろしく差配人が怒つちやつて、もう お前

には貸さない、と言つて居やがつたから、あんな卑吝な奴は、慾り〳〵しちやつて、貸しつこねえぜ』
『其處を、押强く言ふんだよ。お金を貰つたつて、急に拵へる事は、出來ないぢやないか』
『そんなら、仕方がねえから、古着屋へ行つて、買つて來りや、宜いぢやねえか』
『それだつて、今時分になつて、何處の古着屋へ、行くにしたつて仕樣がないぢやないか、マア明日一日だけは、差配人さんの家ので、間に合はしてお置きなさいよ』
『さうしやうか』
『さうなさいよ、あの差配人は、慾張つて居るから、あの娘に、島津樣の手が着いた、と聞いたら、どんなに私達が、出世をするかも判らない。さうなつたら、滯つた家賃は貰へるし、羽織や袴の損料も、取れると思ふから、一番良いのを、貸して呉れるに違ひないよ』
『それでも、俺や、體裁が悪くつて、言ひ難いから、切めてのことに、袴や羽織を借りる丈は、汝から直接に、差配人へ、話して呉んねえ』
『本當に、お前さんは、氣が弱いから仕樣がないねえ。ぢやア私が、一緒に行くよ』
『さうして呉んねえ、持つべきものは、嬶だな』
『戯談言つてるね。こんな時ばかり、持つべきものは嬶だなんて、そんなに、私が大切なら品川なんぞへ通はなきや、宜いんだよ』
『是ア驚いた。又始まつたな』
『又ぢやないよ。之れに懲りて、もうあんな所へ、行つちやいけないよ』
『島津樣の舅になつちや、豈夫、品川通ひでもあるめえ、ハツハ、、、、、』
是れから、夫婦は連立つて、甚兵衛差配人の所へ、やつて來た。

七

差配人の甚兵衛は、藤左衛門夫婦の、喧嘩を仲裁して、一ぱい飲んで、微醉機嫌のニコ〳〵顔で、家へ歸つて來ると、女房のお勝が、
『オヤ、お前さん、大層手間が取れたね』
『イヤ、もう相變らずの、チン〳〵喧嘩で、大閉口だつたよ』
『さうですか、あの夫婦にも、困つたもんですね』
『本當に困つちまふ。夫婦喧嘩も、時々は愛嬌があつて好いもんだが、那ア不斷にやられちや、仲裁するのも厭になる。と云つて、始められた日にや、外聞が悪いから、差配人の役目で、仲裁もしなきやならない、と思つて、厭々ながら仲裁はするやうなものゝ、今夜のは少し念入りたつだから、手間が取れたのだ』
『そりや、御苦勞だつたね』
『他の夫婦喧嘩の、仲裁に行つて、自分の嬶に禮を言はれりや、世話はねえ。浮世つてえものは、面白いな。ハツハ、、、、、』
是れから、甚兵衛は、毎晩、極つて飲む酒と、肴まで買つて、仕度がしてあるのを幸ひに、また、女房を對手に、チビリ〳〵飲み出した。
全體が、華麗な事の好きな、面白い氣性の甚兵衛であるから、似た者夫婦で、女房のお勝も、世話好きな女で、極く氣輕に、他の用を達してやる。其處が、妙に愛嬌になつて、甚兵衛が、頑固な事を言ふて、他に彼れ是れ、言はれるやうな事があつても、お勝が、出て行けば、怒つて居た者の、癇癪が治まるといふ、舊幕時代の差配人さんとしては、まことによく、揃ふた夫婦であつた。

『時にねえ、お前さん』
『何だ』
『あの藤左衞門さんの娘が、薩摩樣の御邸へ、上つて居るんだが、この間の宿下りに、歸つて來た時に見て、私は、驚いちまつたよ』
『何を、驚いたんだ』
『何をつて、ツイこの間まで、鼻液を垂して、飴ン棒を、背つて居た娘が、全然、生れ更つたやうになつて、美しい着物を、着飾つて來た時の容子つたら、迚も大工の娘とは、思へない位で、それに、誰に似たのか知らないが、容貌も、あの通り佳いし、あれが本當に、鳶が鷹を生んだ、とでも言ふんだらうかね』
『ウム、そりやさうだとも、兄の小藤次が、あの通りに、仕樣のねえ奴で、其妹のお由良が、あの容貌で、御殿勤めといふのだから、全く汝の言ふ通り、鳶鷹に違ひねえ』
『同じ女の子を有つても、那アいふ容貌の娘が出來れば、親が安心なものだね』
『そりや、さうだとも』
『斯んな事は當にはならないが、あれだけの容貌で、御殿勤めをして居たら、どうせ殿樣の御手が着くか、さうでなけりや、若侍の、顏の生白い、柔弱た奴と、ツイ妙な仲になつて、常磐津の出語か、何かで駈落をするのが、最後だらうと思ふが、お前さんは、何う思ふね』
『汝も、餘計な事を心配したもんだな。そんなことたアどうなつたつて、宜いぢやないか』
『そりや惡い、といふ事はないけれど、考へて見ると、可笑いから話して見たんだね。けれども、私やア、確とさうなると、思ふよ』
『成る程、結局は、そんな事だらうな』

と、話し込んで居る所へ、
『差配人さん、先刻ア飛んだお世話になつちやつて、何とも濟まねえ』
大きな聲で、外から斯う言つて、這入つて來たのは、藤左衞門であつた。その後から續いて、女房のお貞が、ニコニコ笑ひながら、
『今晩は……』
甚兵衞夫婦は、坐つた儘で、
『オヤツ、棟梁だね』
『ヘイ』
『マア、此方へお上りなさい』
『御免なせえ』
藤左衞門夫婦は、揃つて上つて來た。之れを見ると、お勝は、
『可笑いやうだね。今まで喧嘩をして居た夫婦が、お揃ひで、仲好くやつて來るなんて……』
藤左衞門は、頭を搔きながら、
『是ア驚いたな。幾ら喧嘩をしたつて、仇敵の子孫ぢやねえんだから、仲が直りや、以前の夫婦でさア、ヘツヘ、、、、』
甚兵衞は、藤左衞門に、盃を差しながら、
『時に棟梁、何で、やつて來たんだね』
『何でつて、大層な事になつちやつて、困つて居るんでさア』
『フ、ム、大層な事になつたつて、そりや、何ういふ事かね』

『それが、恐ろしい程、大層な事なんで、何うにも斯うにも、始末が付かねえんでさ。此妻の指圖で、何でもこりやア、差配人のデコボコに……』

『何だい、其のデコボコてえなア』

『マア、差配人さん、怒つちやいけねえ。陰で言ひ慣けて居るもんだから、ツイお前さんの顏を見たので、やつちやつたんだ。デコボコてえな、お前さんの事でさア』

『こりや酷いな、俺が、何時デコボコと、名を變へたい』

『名を變へたか、何うだか、そんなこたア知らねえが、近所の湯屋や髮結床ぢや、お前さんの事を、誰でも、デコボコ差配人と、言つてるんだから、何も私が惡い、といふ譯ぢやねえんだ。どうか、怒らねえやうにして、お吳んなせえ』

『お前さんの言つた事で、怒つた日にや、毎日怒つて居なきやならないんだから、氣に留めても居ないけれど、何だつて皆が、私の事を、デコボコ差配人と、いふんだい』

『そりや、何ういふ理由か、私も、よく知らねえが、お前さんの頭が、凸凹して居るから、それで、デコボコ差配人と、いふのだらうよ。ハツハ、、、、、』

『そんな事は、マア何うでも宜いとして、今來た用といふなア、何んな事かね』

『サア、それが大層な事なんだ』

『同じ事は、何時まで言つても、同じ事なんだから、その大層な事といふなア、何んな事か、その事情を聽かうぢやないか』

『その事情てえな、私共のお由良の一件でさア』

『エツ、お由良さんの事だつて……』

『さうでさア』

『フ、ム、何か始まつかね』

『すつかり、始まつちやつたんだ』

『何んな事が、始まつたのだい』

『殿樣のお手が、着いたんだとよ』

『フ、ム、そりや大層な事に、なつちまつたもんだが、本當に、さうなのかい』

『本當か嘘か、其處の所ア、私にも、よくは判らねえが、薩摩樣から、さう言つて來たんだから、さうだと思ふ外はねえんでさ』

『不思議な話もあるもんだ。今、勝と二人で、大方そんな事に、なりやしないか、と話して居る所へ、お前さんが、やつて來て、さういふ話をされると、何だか知らないが、夢を見るやうな事で、本當のやうにも思へるが、又嘘のやうにも思へる。全體、何ういふ話の徑路なのかね』

『そんなに、改まつて聽かれちや、私にや、よく話は出來ねえが、マア殿樣が、やつちやつたんだね』

『何だい、やつちやつたとア』

『だつて、それに違へねえんだ。木魚講の先達に、なつてしまつた、といふんだから、殿樣が、何うかしなけりや、幾らお由良の腹だつて、突出す筈がねえんだ』

『それぢや、殿樣の御胤を宿した、といふのか』

『マア、さうなんだらう』

『どうも、お前さんの話は危づかしくつて、乘氣になつて、聽く事も出來ない。大切な娘に、御殿樣のお手が着いて、お胤を宿したか、どうか、それがハツキリ判らないで、狼狽して居るなんて、何といふ薄野呂な事だ。マア宜いさ、

お前さんよりや、お貞さんに相談した方が、早分りがするだらう』
藤左衛門は、額を押へながら、
『是ア驚いたな。何處へ行つても、嬶の方が、信用が好いんだから、不思議なもんだ』

八

話は、途切れ〳〵で、少しも筋は立つて居ないが、兎に角、殿樣のお手が着いて、お由良が、姙娠になつた、といふ事だけは、想像が出來るのだ。けれども、藤左衛門の話だけでは、雲を摑むやうな事だから、甚兵衛は、お貞に向つて、
『今、棟梁の話だと、お由良さんに、御殿樣のお手が着いて、御胤を宿した、といふやうに聞えるが、全體、何ういふ徑路なのか、お前さんから、話を聽きたいものだ』
お貞は、膝を進めて、
『そりや、其通りなんですよ。私にも、よくは判らないけれど、先刻、差配人さんが、歸つてしまつたら、御邸から、御使者の方が、やつて來て、あの娘に、殿樣の御手が着いて、御目出度い事になつたから、喜べと言つて來たので一時は、私も赫として、上氣せるほどに嬉しかつたが、親の眼から見れば、幾ら美しくつても、あゝいふ大きな、御邸の奥女中には、幾らも美い女が居るんだから、お由良なんぞに、御手が着かうとは、思へないので、恰で夢の中を、歩いて居るやうな氣持で、やつて來たんです』
『そりや、さうだらう、さう思ふのが本當だ。けれども、戀に上下の區別なし、といつて、此道ばかりは別ものだから、縱令、大工の娘でも、そんな事にや頓着アねえ。加之に、殿樣の御胤を、宿したとすりや占めたものだ。お前さん達、夫婦の運が、向いて來たんだ。一ぱい奢つても宜いぜ、ハツハヽヽヽヽ』

『差配人さんの話は、直にお酒の事になつちまふから、仕樣がないね』
『ナニ、別に仕樣がない事はないさ。俺の錢で、俺が飲んで居るのに、お前さん達夫婦が、心配するこたアねえや。それは、何うでも宜いとして、何だつて私の所へ、やつて來たのかね』
『それに就いて、差配人さんに、少しお願ひの事が、あつて來たんです』
『フヽム、そりや、何ういふ事かね』
『外でもないんですが、その御使者に來た、御武家の仰しやるには、何でも、明日の朝、亭主に、御邸までやつて來い、殿樣が、會つてやるからと、斯う言ふんですが、何うしたもんでせうね』
『何うするも、斯うするも、あるもんか。御邸から、迎ひに來ねえでも、此方から、押掛けて行くのが、當世だ。明日の朝、早く出掛けたら、宜からう』
『サア、それで、相談に來たんですよ』
『だから、行つたら宜いと、言つてるぢやねえか』
『それが、行くにしても、豈夫御店の印袢纏を着て、行く譯にも行かないし、まことに濟みませんが、羽織と袴を、貸して下さいな』
『ハハー、それで、やつて來たのかね』
『さうなんです』
『外の事なら、斷つてもしまふんだが、さういふ事では、豈夫に、斷る譯にも行くめえ。それや宜いとも、承知したから安心しなさい。どうせ紋付だらう』
『マア、私も、さうでなけりやアいけまい、と思つてるんです』
『無論、それに極つて居る。序だから、着物も貸してやるから、悉皆、着て行くが、宜いぜ』

『まことに、濟みません』
『濟むも濟まないもないさ。親子も同樣な、差配人と、店子の間だ。けれども、お貞さん』
『ハー』
『斯ういふ時には、御邸の方から、御仕度料といふ名で、幾らかお金が下るものだが、そんな話はなかつたかい』
と言はれて、藤左衞門夫婦は、顏を見合はせた。
お貞は、ニコ〳〵笑ひながら、
『差配人さんは、何でも知つてるんですね』
『何でもツて程の事はないけれど、その位の事を知らなきや、差配人は勤まらないさ』
『實はね』
『ウム』
『お金を、持つて來て、下すつたのです』
『さうか、さうだらうね、さうなけりやならない譯だ。お金の事を、少も言はないで、羽織と袴の話をしてしまふなア、お前さん達も、隨分狡いな』
『イエ、別に狡い考へで、願つたのぢやないんですよ。斯んなに遲くなつちやア、古着屋といつても、間に合はないし、何うしても仕樣がないから、差配人さんに、賴む外はならうと、夫婦で相談して、やつて來たんです。どうせ損料で借りたつて、幾らか取られるんですから、そのお禮にや、一ばい奢りますよ』
『よし〳〵。どうせお目出度いのだから、一杯でも二杯でも、奢るが宜いさ。ハツハ、、、、、』
甚兵衞は、一人で、笑壺に入つて居る。女は女同士、といふ諺の通り、何時か、話は外れて、お勝と、お貞の談合ひになつた。

『マア、お貞さん、お前さんは、本當に、幸福な人だね。毎日のやうに、夫婦喧嘩ばかりして居たが、到頭、お由良さんが、鼠を捕つた猫で、大手柄をしちやつたんだから、是れからは左團扇で、樂に暮せる、といふもんだね』
『私も、さうなれば結構だ、と思つてるんですが、對手が、餘り大き過ぎるんで、それも、何うなるか判らない、と思やア、餘り嬉しくも、ないんですよ』
『幾ら對手が大きいたつて、お前さんの娘を孕して、知らない顏も出來まいから、何處までも親子の緣で、喰込んで行きやア、結局は、左團扇で、一生は安樂なものだよ』
『さうなりや、私も嬉しいから、今までの恩返しに、御世話になつただけの事は、屹度、私の方でも、御禮をしますから、どうか末長く、面倒を見て下さいまし』
『今、お前さんが、そんな事を言つても、結局は、私の方から、さう言つて賴む事になるのさ。女は女同士、といふから、亭主などは、どうでも宜い。私だけは、忘れずに居て下さいよ』
藤左衞門と、盃の献酬をして居た、甚兵衞は振返つて、
『オイ〳〵、戯談ぢやねえぜ。お前達や、何んな相談をするか判らない。亭主は、どうでも宜いから、私だけを、どうか捨てずに居て呉れろなんざ、餘り現金な話ぢやないか。亭主があつての女房なんだから、此の甚兵衞を忘れたら、お貞さん、罰が當るぜ』
『本當に、さうでしたね、オ、、、、、』
甚兵衞は、お勝に向つて、
『それぢや、羽織と袴と、序に着物を、出してやんなさい』
『ハー、良い方にしませうね』
『そんなこたア、聞かないでも別つてる。一番良いのを出してやんなさい』

是れから、お勝が、箪笥の抽斗から取出した、一揃への衣裳を、夫婦の前に置いた。

『サア、持つて行つたら、宜いだらう』

『ヘイ、有難うごぜえやす。飛んだ世話になつちやつて、何とも濟まねえ』

『そりやア宜いけれど、此前のやうに鈎裂をして來ちや、いけないぜ』

『豈夫、島津樣の御邸へ行くのに、鈎裂でもあるめえ』

と言ひながら、前の着物に、手を掛けて、

『成る程、是ア立派なもんだ。此前に借りたのよりや、餘ッ程上等だ』

『オイ〳〵、お前は、遠慮の無い人だな。他に物を借りるのに、此前よりは立派だの、此前よりは惡いのと、そんな勝手な熟を吹くもんぢやねえ。マア其處で、一遍着て見なさい』

『ウム、さうだ。一遍、稽古に着て見なきや……』

と言ひながら、すぐに着て見たが、平生から三尺帶で、通押して居る、藤左衞門には、長い角帶は、一寸締め難い。

お貞と、お勝が、左右から締めてやる。藤左衞門は、體裁が惡いやうな顏をして、

『お貞』

『何だい』

『序だから、その窮屈袋を、穿かして吳んねえ』

『何だね、窮屈袋だなんて、こりやア袴といふんですよ』

『そりや知つてるけれど、俺達の方ぢやア、窮屈袋と名が付けてあるんだ。アツハツハツハ、、、、、』

九

今では、どんな者でも、袴を穿くやうになつて、普通の商人でさへ、小理窟の一つでも言はう、といふ者は、例の行燈袴を、穿いて居る、といふやうな、時世になつて來たから、袴の穿き方を、知らない者もなからうけれど、舊慕の昔には、普通の町人や職人が、袴を穿く機會などは、減多にない事であつて、先づ十人寄れば、九人までは、どうして穿いたらよいものか、紐の結び方も別らなかつたのが、普通である。他の穿いて居る所を見れば、何でもないやうであるが、偖て自分が、穿いて見ると、一向に工合が判らない。殊に、大工なぞをして居る者が、袴の穿き方を、知つて居る筈もなく、藤左衞門は、甚兵衞に、袴を穿かせて、貰つて居るのだ。

『オイ〳〵、棟梁、そりや、反對だよ』

『へー、反對かね』

『さうぢやないか、腰板が、前の方になつてるぢやないか』

『ウム、さうか。腰板が、うしろの方へ行くのか』

『そんな事は、言はなくつたつて、判つて居るぢやないか』

『それだつて、私達や、こんなものを、穿いた事は無えんだから、此板の上へ、紙入か何か載けるんだらう、と思つて居たんだ。アツハツハ、、、、、』

『サア、そんなことア、何うでも宜いから、穿き替へなきやいけない……オイ〳〵、棟梁、何をして居るんだな、穿いた儘ぢや、後へは廻らないぢやないか』

『アゝさうか、それだから不便なもので、俺達の仲間でも、窮屈袋と命けちやつたんだ』

是れから、藤左衞門は、一遍穿いた、袴を脱いで、又穿き直す。それを、甚兵衞が、子供の世話をするやうにして、紐まで結んでやつた。

『サア、其羽織を着て御覽……宜し〳〵、その工合なら大丈夫、どう見たつて、大家の旦那樣だ』

藤左衞門は、體裁の悪いやうな、嬉しいやうな顏をして、自分の體を、ジロ〳〵見て居る。女房のお貞は、クスクス笑ひながら、藤左衞門を見て居たが、

『チョイと、お前さん』

『何でえ』

『何でえぢやないよ。紋付の羽織で、袴を穿いた旦那樣が、拳固を極めて居ちやいけないぢやないか』

『ウム、さうだつたな。是つア、いけねえんだな』

『極つてるぢやないか』

胸の所へ、入れて居た、拳固を出して、手をブラリと下げたが、斯うなると、手の持つて行き所が無くて、何となく姿勢が付かない。見て居ても、その半間さが、思はれる位だ。甚兵衞は笑ひながら、

『マア、大概な所で宜からう。それにしても、袴を穿いた時は、その起居が面倒なのだから、序に、その稽古もしたら、宜からう』

『へ、ー、何だつてえ、起つたり、坐つたりするのが、面倒だつて……』

『そりや、さうとも』

『何う面倒になるんだね』

『坐る時に、よく捌いて坐らないと、立つ時に、足の尖へ、袴の裾が引掛つて、倒れる事があるから、それを氣を付けないと、いけないよ。殿樣の前で、尻餅なんぞを搗いちや、失禮になるからな』

『成程、さう聽いて見りや、難しいもんだ』

『それから、坐る時にも、端然と行儀好く、坐らなきやいけない』

『そいつア、弱つちやつたな。マア宜いや、やつ付けて見よう』

『何だい、やつ付けて見ようとは』

『だつて、やつ付けて見るんぢやねえか』

『マア、宜しい。言葉咎めをしちや、際限が無い。サア、坐つて御覽なさい』

藤左衞門は、窮屈さうに端坐つた。何となく調子が悪い、と見えて、ムズ〳〵して居る。側から見て居ると、後へ倒れさうでならないから、

『棟梁、もう少し確り坐る事は出來ないのかい』

『何だか知らねえが、コウ體が、グラ〳〵して居るやうな氣持で、是ア弱つちやつたな。寸時なら宜いけれど、長え間、坐らせられて居たら、後へ引繰返る事は受合だ』

『そんな、つまらない事を、受合つちや困る』

『困つたつて、引繰返えるものは、仕樣がねえぢやねえか』

『殿樣の前で引繰返つて、脚なんぞを出しちや、失禮になるぜ』

『こいつア弱つたな。差配人さん、明日、俺の代りに、行つて呉れる事は、出來ねえか』

『戲談言つちやいけないよ。そんな代人が出來るものかね。第一お前さんと、私とは、齡も違ふし、迎もそんな事は出來ない。それは宜いとしても、御殿へ、上つた時は、言葉を謹まないと、いけないぜ』

『何んな事を言ふんだな』

『何んな事といつて、言ふことに變りはないけれど、一通りの御挨拶を申上げるにしても、、いけ粗來に、口を利いちやいけない。もつと叮嚀に、言はなけりやいけないんだから、それを餘程、氣を付けないと、失禮になるぜ』

『フ、ム、段々難かしくなつちまふんだな』

『先づ、殿樣の前へ出たら、何とか御言葉が下る。そこで、お前さんが、斯う言ふのだ』

『フム』

『私は、お由良の父、藤左衞門と申しまする。不束な者ではございまするが、何分お願ひ申しますると、斯うお取次に言ふと、お取次が然るべく、殿樣へ、取次で呉れる。何でも、殿樣と、お前と、對座になつて居ても、直接に話しては、いけないのだ。どんな事でも、取次いで貰はなければ、いけないやうになつて居るのだから、其處の呼吸は、よく呑込んで居ないと、いけないぜ』

『さうすると、殿樣と、私の居る所とは、餘程離れて居るのかい』

『ナニ、其麼に離れちや居ないけれど、身分が違ふから、直接に、お答は出來ないのだ』

『成程、聽いて見る程、難かしくなつて來るな。それぢや、お由良の女なんざ……』

『何だい、女とは』

『だつて、女に違えねえぢやねえか。彼女なんぞが、殿樣に、何か言ふのは、矢張り一々、取次いで貰ふのかね』

『そんな事はない。これは直接に何事も申上げるやうに、なつて居るのだ』

『だつて、そりや可怪いぢやねえか、親父の俺でさへ、直接に話が出來ねえのに、娘の癖に、直接に話をするなんて、矢張り何處へ行つても、女は德なもんだな』

『そんな、變な事を言はないで、マア、御挨拶をする、禮儀作法の事を、稽古するが宜い』

『それだつて、變な事は、變に違えねえもんだから、言つたつて宜いぢやねえか』

是れから、お勝とお貞が、前に廻り、後に廻りして、段々行儀作法を敎へる。御挨拶の稽古も、怪しげながら一通りは出來るやうになつた。夜も段々、更けて來るから、といふので、其晩は、甚兵衞の家から、歸つて來たが、翌朝のことが心配で、夫婦共に、到頭徹夜をしてしまふ、といふやうな譯で、愈々朝になつたから支度をして、是れから三田の藤邸へ、出掛けやうといふのだ。

一〇

出掛ける時に、甚兵衞の所へ寄つて、夫婦共々に、色々頼んだから、甚兵衞が附添ひとして、藤屋邸まで、送つて呉れる事になつたので、藤左衞門も、安心の胸を撫下して、是れから兩人は揃つて、三田の藤邸へ、やつて來た。先づ表門へ掛かり、門番小屋の前に、兩人が揃つて、

『一寸御願ひいたします』

『何ぢや』

『奥女中に上つて居りまする、お由良の實父藤左衞門、御召を受けまして、唯今同道いたしました。手前は、同人が住居いたします、長屋の差配、甚兵衞と申しまする者でござります』

門番は、考へて居たが、

『ハ、ー、お由良殿實父、藤左衞門殿と言はつしやるか』

『左樣でございます』

『暫時待たつしやい。唯今、お取次をするから』

何となく拮屈ない、クヤ〳〵辯てはあるけれど、普通の町人の來たのとは、幾分の取扱ひも違ふ。もう門番にも。お由良の身上が、判つて居たものと、見える。暫時、待つて居る所へ、門番は、引返して來て、

『此方へ』

と言つて、案内して呉れた。御側御用の役をして居る、山田といふ人が、出て來て、先づ一室の中へ、兩人を通した。

『俺どんは、殿樣、御側の御用を達して居る、山田といふ者でごわす、、、、、が、貴殿が、お由良殿實父、藤左衞門殿と言はつしやるか』

『へイ』

と言つた切り、藤左衞門は、答へが出ない。そこで、甚兵衞は、恐る〳〵頭を擡げて、

『手前の家作内に居りまするのが、この藤左衞門でございまして、行儀作法に慣れませぬから、本日は附添ひとして參りましたのでございますが、手前の名は、甚兵衞と申します。宜しくお願ひ申上げまする』

妙に硬過ぎた、切口上で言ふ。その辭令が可笑しかつたか、山田といふ武士は、莞爾と笑つて、

『附添は、御苦勞でごわしたが、此處に、お待受けなさい。藤左衞門殿は、俺どんが、案内いたす』

『へ、ー、私は、差配人さんと一緒に、殿樣の前へ行けねえんですか』

抽いことを言ふ、とは思つたけれど、甚兵衞は、口の出しやうも無いから、澁い顏をして、下を向いてしまつた。

山田は、怪訝な顏をして、

『それは、唯今も申した通り、殿樣御前へ、左樣な者を伴れて參る譯には相成らぬ。貴殿一人參れば、よろしいのぢや』

『そいつア、困つちまつたな。私には、何にも判らねえんでごぜえやすから、どうか其處の所を、大讓歩に讓歩して、差配人さんを、一緒に伴れて行くやうにして、お奥んなせえな。そいつア、お前さんの執成で、どうでもなるんでせう』

『イヤ、左樣な事には相成らぬ。兎に角、俺どんと、同道なさい』

斯う言はれては、仕樣が無いから、藤左衞門は、據所なく、一人で山田に伴れられて、是れから恐る〳〵、奥御殿の方へ、伴れて行かれた。

今迄、狹い座敷の中に、行儀作法も構はず、ワイ〳〵騒いで、暮して居た、藤左衞門が、急に大名の邸に來て、左なきだに、羽織袴で窮屈な思ひをして居る上に、斯ういふ取扱ひを受けるのだから、胸は、動悸々々するし、頭は熱

くなつて、何となく眼が眩暈くやうに、なつて來た。それでも、ぢつと我慢して、山田の後から附いて、奥御殿へやつて來ると、大きな座敷の中には、澤山の家來が、控へて居る。其次の部屋へ、一時控へさせられて、結構な御茶を御馳走になつたが、番茶の澁いのばかり、喫んで居た藤左衞門には、玉露の御茶なぞは、甘くも何ともない。藥を服むやうな思ひをして、喫まなければ叱られるだらう、と思ふ恐さから、がぶツと、一息に喫んでしまつた。

暫時すると案内されて、廣間の眞中の所へ、坐らせられた時は、ブル〳〵慄つて來た。軈て、正面の所へ、殿樣の齊興侯は、出て來た。その後から、附いて來て、少し下つて坐つたのは、娘のお由良であるが、藤左衞門の眼には、娘の顏さへ、瞭然見えなかつた。

『恐れ乍ら申上げまする。お由良殿實父、藤左衞門殿、只今罷出てましてござりまする』

『ウム、左樣か、苦しうない、藤左衞門とやら、頭を擧げい』

と、言葉は下つたが、藤左衞門は、矢張り手を突いて、頭を下げて居る。取次の武士は、側へ寄つて、後の方から、臀をつツ突きながら、

『藤左衞門殿、殿樣の御沙汰でござる。頭を擧げなさい』

と、言つたが、何の答へもない。

『コラツ、藤左衞門殿、殿樣の御沙汰でござる。頭を擧げさつしやい』

『オイ、戯談ぢやねえぜ、さう尻をつツ突いちや、仕樣がねえぢやねえか』

『コレ〳〵、左樣な事を、申しては相成らぬ。殿樣の御前ぢや、頭を擧げろ、といふのぢや』

『へイ、頭てえと、矢ツ張り面を擧げろツてんですかい』

『マア、さうぢや』

藤左衞門は、何と思つたか、疊に突いて居た手を、グツと擧げると、體を反すやうにして、齊興の顏を、熟と見た。

その後に、娘のお由良が、控へて居たのが、初めて判つたから、思はず伸び上つて、

『其處に居るなア、お由良ぢやねえか』

と、叫んだので、取次は驚いて、袂を曳いた。

『コレツ……』

と、叱られて氣が付いたが、後は口の中で、モグ〳〵言つて居る。お由良は、顔を眞赤にして、下を向いてしまつた。

齊興は、ニコ〳〵笑つて、其容子を見ながら、

『宜い〳〵、下々の者ぢやから、言葉咎めは致すな。行儀作法も、左までに言ふに及ばぬ』

『ハツ』

『コレ、其方は、由良の父藤左衞門と申すか』、

取次は、小聲になつて、

『何とか、御挨拶を申上げないか』

『ヘイ、何とか言つても宜いんですか』

『そりや、何とか申上げなきやいかぬ』

『汪澗り何か言つて、叱言を食やしねえか、と思つて、控へて居たんだが、それぢや、何か言つても宜いのかね』

『そりや、宜い』

『それぢや言ふとも、エー、お前樣が、殿樣かね』

取次は驚いた。

『コレ〳〵』

と、叱らうとすると、齊興が、

『咎め立てを致すな。自由に致して置け』

『ハツ』

『其方が、藤左衞門か、予は、齊興ぢや。見知り置け』

『ヘイ、有難うごぜえやす。お由良の奴が、大層御世話になつたさうで、ごぜえやすが、どうか、十分可愛がつてやつとくんなせえまし』

左右に、居流れた、家來や奥女中は、失笑したくなる程、可笑しかつたが、笑ふ譯にもいかないので、ぢつと怺へて居る。齊興は、興に入つて、却て斯うした、無作法い挨拶を、面白く思つたらしい。お由良は、流石に、穴へも入りたい心地で、眞赤になつて、下を向いてしまつた切り、何とも口の出しやうがなかつた。

一一

七十七萬石の大諸侯の前へ、見る影もない、身分の低い、大工が出たのだから、その調子の惡い事は、一通りでなかつた。差配人の甚兵衞に敎へられて、一通りの挨拶は、出來る筈であつたのだが、さて御殿へ、出て見ると、さうもならず、矢張り、大工の藤さんになつて、話し込んでしまつた。所が、齊興の機嫌は、非常に好く、却て無作法い江戸子の職人肌が、氣に入つて、色々なものを頂戴して、其日は、上首尾で歸つた。

薩邸の表門を出ると、藤左衞門は、ホツと一息吐く。甚兵衞は、心配さうにして、

『どうだつたい、棟梁、巧く行つたかね』

『エー、差配人さんの前ですが、巧く行つたか、拙く行つたか、少も見當が付かねえ。何だか知らねえが、厭にびかびかした、廣い座敷へ、引張り込まれて、殿樣が、嚴しい顏をして、坐つて居た時にや、恐ろしいもんだね、ツイ頭が、下つちやつた』

『そりや、さうだらうとも、何しろ七十七萬石の殿樣だ。加之、島津樣と來ちや、なか〳〵大した御見識だからな。それでも、お前は幸福だ。俺なんぞは願つても、そんな事には、一生あり付けまいが、容貌の佳い娘を、有つたお蔭で、親父は、つまらない馬鹿野郎だが、そんな大い殿樣と、話が出來るなんて、本當に棟梁、お前は、もう死んでも、思ひ殘す事は無からう』

『オイ〳〵、甚兵衞さん、戲談ぢやねえぜ、幾ら羨ましいたつて、俺の事を、悪く言はなくつても、宜いぢやねえか』

『悪く言ふ譯ぢやないが、島津の殿樣に比べりや、その位の違ひはあらアね』

『マア何にしろ、お前さんのお蔭で、何うか斯うか、用も濟んだんだから、喜んでお呉んなせえ』

『時に、棟梁』

『何でえ』

『お由良さんは、何うしたい』

『ウム、それが、可笑しな譯で、殿樣の後に、お由良の女ア、平然して坐つて居るぢやねえか。最初、見た時にや、何處のお姫樣か、と思つたんだが、よく〳〵見りや、あの娘ぢやねえか。思はず俺が伸上つて、手前はお由良ぢやねえか、と言つたら、側に居る武士が、愚圖々々言つたので、驚いて叩頭をしたよ。ヘン笑かしやがらア、自分の娘に叩頭をするなんて、俺も、餘程燒が廻つたな、と思つたが、何となく頭が、下つちやつたのよ』

『それぢや、棟梁、俺は、是れで御免蒙る』

『マア、甚兵衞さん、忙しくもあらうけれど、一ぱい燗けるから、寄つてお居でなせえな』

『イヤ、どうせ奢つて貰ふのだが、そりやお預けとして置いて、また閑な時に、緩り飲むとしよう』

『さうかね、そんなら無理に、引止めても悪いから、今日は、別れる事にしよう』

『ウム、さうしよう』

甚兵衞は、藤左衞門に別れて、自分の家へはいつた。

藤左衞門が、ギラリと、格子を開けて、入つて來る姿を見ると、女房のお貞が、飛出して來た。

『オヤ〳〵、お前さん、もうお歸りかい』

『ウム、今歸つた』

『何うだつたい、御邸の模樣は』

『マア、待つて呉んねえ、今家の中へ入つたばかりで、氣息も吐かねえうちから、さう責め付けられちや、俺だつて詳しい話は出來ねえや』

『だつてさ、早く聽きたいからね』

『そりや、さうだらうけれど、マア、落付いて緩くりしねえ』

行く時の樣子とは違つて、藤左衞門は、なか〳〵に落付いてしまつた。是れから、座敷へ上つて、殿樣に會つた樣子を、詳しく話したから、お貞も、珍らしい話に興がつて、餘念も無く、聽いて居た。

『それで、話の概略は解つたけれど、お由良が、嘸威張つて居たらうね』

『ウム、あの娘や、段樣の蔭で、叩頭もしねえで平然て居た』

『情夫の殿樣が、前に居るから、矢張り氣が強くなるんだらうね。さうでなきや、そんな、馬鹿なことアありはしまいが、それでも、大層な身分になつて、どんなに幸福か判らない。同じ女でも、私なんざアお前さんのやうな、つまらない男を、亭主に持つちやつて、一生地位が上りやしない。本當に考へて見ると、馬鹿々々しいやうだね』

『フン、馬鹿にして居やがらア、俺のやうな、亭主を持つたればこそ、あんな娘も出來たんだ。娘の出世は、親の自慢になる事だ。そんな變な事を、言ふない』

惡口は利くやうなものゝ、それは嬉しい所から、出て來る惡口だから、別に喧嘩の因ともならず、是れから一ぱい燗けて、夫婦差向ひで、飲んで居る所へ、小藤次も、歸つて來て、其日は、それで過してしまつたが、更に四五日經つと、薩邸から、又迎へが來た。今度は、お由良の使者で、母のお貞に、是非會ひたいから、といふのであつた。サア又、差配人さんの厄介で、お貞は、三田の薩邸へ、やつて來て、娘のお由良に對面する、といふやうな譯で、藤左衞門の家は、一生の樂みが、一度に重なつたやうな騷動で、毎日斯んな事で、日を送つて居た。

彼れ是れする中に、月日の經つのは早いもので、お由良の方は十箇の月が滿ちて、安々と産落したのが、幸ひにして男の子であつた。時に、文化十四年の十月二十四日であつたが、この産落した男子が、卽ち普之進であつて、後の從一位前左大臣、島津久光となる人である。

お由良の陰謀

一

何處の大名にも、よくあつたお家騷動、その裏面には、必ず女の關係がある。島津家の相續人としては、邦丸といふ、立派なお方があつた。曾祖父の榮翁が、一番に可愛がつて居たのは、此邦丸である。されば、榮翁が、白金の別邸へ移つてからも、邦丸だけは、連れて行つた位で、殆ど榮翁が、自らてしほに掛けて、育てた位であつた。栫櫃は、嫩葉より馨し、といふて、後に、三百諸侯中に於て、隨一の名君と、謳はれた程の齊彬は、その幼い時分から、並外れて、悧巧な若殿であつた、といふのも、無理はない。

或日、榮翁の前に出て、扈從者を對手に、面白さうに遊んで居た。其狀態を、熟々と、眺めて居た、榮翁は、邦丸に向つて、

『面白さうに遊んで居るのう、何が樂しいか』

大概な家來は、榮翁に、聲を掛けられると、一縮みに、縮み上る位に、恐がつて居るのだが、邦丸は、幼い時から、榮翁の氣象を、よく呑込んで、榮翁が、可愛がる程、矢張り邦丸の方でも、榮翁を慕つて居たのだ。儼しい顏をして、家來に叱言を、言ふ時の榮翁は、恐ろしいかも知れないが、可愛い孫の邦丸に、向つた時は、榮翁の顏の、相好から崩れてしまつて、如何にも嬉しさうに、優しい事を言ふのだから、邦丸の、懷くのも無理はなかつた。

『其方は、幾歳になつたか、覺えて居るか』
『ハイ、曾祖父樣、私は七つでございます』
『オー、よう覺えたのう。來年は、幾歳になるか』
『八歳でございます』
『エライ〳〵、さう何事も、よう覺えなければならぬぞ』
斯んな、他愛もない事を言ふて、榮翁は、喜んで居るのだ。
『何んぞ、望みのものがあれば遣はさう。言ふて見たら、どうぢや』
『ハイ、私に、何か下さるので、ございますか』
『さうぢや。何が欲しいか』
『私は、別に欲しいものは無いのですが、曾祖父樣が、下さると仰しやるなら、一つ欲しいものが、ありまする』
『フヽム、そりや、何が欲しいのか』
『それでも、曾祖父樣が、下さらぬとつまらないから、申しませぬ』
『イヤ、さうでないぞ。其方の希望とあれば、爺樣は、この大切な鬚髯を、剃つて遣はすわ、ハツハヽヽヽヽ』
『お鬚髯などは、要りませぬ』
『それでは、何が欲しいか』
『屹度、曾祖父樣が下さる、と仰しやるなら申しませう。若し欲しい、と言ふて、下さいませぬとつまりませぬから、寧そ申さぬ方が宜い、と思ひます』
『マア、言ふて見たら、何うぢや』
『屹度、下さいますか』

『ウム、其方の希望なら、どんなものでも遣はすぞ。言ふて見なされ』
邦丸は、暫時考へて居たが、
『あの、曾祖父樣が、大事にしてお居で遊ばす、硝子の水盤が、欲しうございます』
『エツ、水盤が欲しい、と申すのか』
『ハイ』
『そりや、いかぬ』
『何故で、ございますか』
『あれは、爺樣の大切なものぢやから、遣はす譯にはならぬよ』
『それでは、曾祖父樣は、何なりと望みのものを遣はす、と仰せになつたでは、ありませぬか』
『そりや、言ふたに違ひはないが、水盤はいかぬから、外のものを言ふたら、どうぢや』
『外のものは、欲しうありませぬ』
『其方は、爺樣の弱味につけ込んで、難題を申すのか』
『イエ、さうではありませぬ』
『それならば、外のもので我慢いたせ』
『外のものなら要らないと、最前から申して居ります。私は、同じ頂戴の出來ますものなら、水盤が欲しうございます』
榮翁は、困つたといふ顏色で、
『さう、無理を言ふてはならぬ。あれは、異國から渡つて來たもので、日本に、二箇と無い、珍物ぢや。どうか、あれだけは許して吳れ』

『それでは、頂戴いたしませぬ』
『ウム、エライぞ、よく物の理解があるのう。何か外に欲しいものは、無いか』
『外にはござりませぬ』
『マア、さう遊らずと、申して見たら、どうぢや』
『何と仰せになりましても、外には欲しいものはありませぬ。若し厭ぢやと、仰しやると困る、と思ひましたから、前以て、念を突いて置いたのですが、矢張り、曾祖父様は、私に、嘘を仰しやるのでございますから、此上の希望を申すも、效の無いことでありますから、もう私は、曾祖父様には、何も強請りませぬ』
『、、、そちは、御不興の體ぢやな、ハツハ、、、、、』
邦丸は、つまらないと、いはぬばかりの態度で、其不平は、顔色にも、現はれて居た。眼の中へ入れても痛くない、と思ふ程に可愛い、曾孫の事であるから、榮翁も、その不平顔を見ては、我慢が出來なかつた。
『何故、其方は、あの水盤に限つて欲しい、と申すのか。其方のやうな、子供が、あのやうなものを持つたとて、何の效も無いぢやらう。外に面白い玩具を、買ふて遣はす。それで、我慢いたせ』
『イエ、外のものなら要りませぬ。私は、あの水盤を、頂戴いたしたいので、ございます』
『何故、それ程に執拗く、水盤を欲しいと申すのか、其方に、水盤を遣はしたら、どういふ事に致して遊ぶ、といふのか、それを、聽かせて見い』
『御爺様が、下さるのならば申上げます』
『よし、其方の話に依つたら、遣はしても宜い』
『それでは、申上げませう』
『ウム、何か』

『曾祖父様が、あの水盤を、大切に遊ばすので、毎朝、それを扱ひます、扈姓共が心配しながら、お掃除を致す、それが、可憐しく思ひますから、私に、頂戴が出來ますなら、あの水盤は、打壞してしまふ所存で、ございます』
『ヤツ、何と申す。水盤を、爺に貰ふたら、打壞してしまふと・・・、そ、そりや、どういふ理由か』
『幾ち珍しい、と申しましても、元來が、品物の事でございます。それを、取扱ふ扈姓が、粗忽いたしますれば、生命に關はるのであります。恐ろしさの餘り、扈姓が、水盤に、手を掛けまする時は、顔色が、變つて居りまする。それを見るのが厭でございますから、寧そ、あの水盤は、無いものにした方が、宜からう、と思ふて、お強請申したので、ございます』
此の一言には、流石の榮翁も驚いた。まだ十歳未滿の小兒が、斯ういふ悧しい事を、言ふとは、驚くの外は無い。それにしても、島津家の相續人に、斯ういふ悧巧な、子供が出來たのは、何といふ目出度い事かと、大切な水盤を、強請られたのは苦しいが、邦丸の、穎脫けて悧發な事を思へば、水盤一つ位には換へられない。榮翁は、莞爾笑ふて、
『よし。然らば、その水盤は、其方に遣はす』
『有難う存じまする』
そこで、榮翁は、水盤を取寄せて、邦丸に與へた。毎朝、此水盤の拭き掃除をする、扈姓の喜悅は、一と通りでなかつた。齊彬が、子供の時分には、斯うした立派な、逸話も遺つて居る。

二

其事が、あつてから後、榮翁の、邦丸に對する愛は、一層深くなつて來た。親は、子供の可愛いものであるが、その子供が、生んだ孫は、尙ほ可愛いものだ。子供の可愛いのと、孫の可愛いのとは、その可愛さが違ふ、といふ事を、よく老人が言ふけれど、それは全く、それに違ひない。殊に、眼から鼻へ拔けるやうな、悧巧な孫を有つた、お爺さ

んは、尙更に、其孫が、可愛くなるに、極つて居る。苟も七十七萬石の當主と、なるべき者が、十歳未滿の年配から、家來の迷惑を思ふて、之を救はうの考へがあつた、といふに至つては、實に人事とは、思へない位である。

父の齊興が、氣の勝つた、負けず嫌ひで、而も、大名離れのした、立派な御方ではあつたが、實は、邦丸が、生れた時から、自分の懷を放さず、乳母の手にも掛けずして、これまでに育て上げた、母の彌姫の、教育の法が、良かつた事は、今改めて、言ふまでもない事だ。是れが、此儘に平穩と、何事も無く通つてしまへば、話の種も無いのだが、齊興の、好色が、果をなして、大工の娘といふやうな、卑い者の血を享けた、お由良に、手を着けて、子供を生せた、といふのが、島津家に、容易ならぬ騷動を、惹起す原因と、なつたのである。その子供が、女子であつたら、それ程の事は、なかつたのであらうが、不幸にして、男の子であつた、といふ爲に、相續爭ひが起つて、齊宣の時代にあつた事件よりは、尙一層ひどい、お家騷動が起つたのである。

齊興の夫人、彌姫は、前にも言ふた通り、非常に、悧巧な御方であつて、大名の奧方としては、申分の無い程に、氣質も、優しい上に、文字の才もあつて、何處に一點、批難すべき所も、無かつた位であるが、不圖した病氣が原因となつて、段々枕が重くなり、醫藥、鍼灸、さては、加持祈禱の末に至るまで、苟も病氣の爲になると、聞いた事は、一つとして殘さず、出來るだけの、手當はしたが、人間の壽命は、生れた時からの數で、どうも致方が無い。彌姫の病氣は、日に益々重くなるばかりで、主任の醫者も、匙を投げて、

『お見込は、立ちませぬ』

と、言ひ出したのが、文政七年の八月上旬であつた。

それから、藩中の騷ぎは、一層甚くなつて、賢夫人の譽が、高かつた御方だけに、藩士の中には、食を絶ち、寢を廢して、神佛に、祈願を籠めた者もあつたが、遂に其月の十六日になつて、此世を逝つたのである。時に齡、僅かに三十三歳、齊興の落膽は、言ふまでもないが、邦丸の悲歎は、他人の見る眼も、憐れな程で、一時は、食事も進まず、

頰の痩が、眼に着く程であつた。

凡そ、人が、此世に於いて、最も不幸な事は、親に早く別れる事である。縱令、身分に貴賤の別はあつても、此情に、變りは無い。藩士の中にも、心ある者は、邦丸の前途に就いて、早くも杞憂を懷く者が、出て來た。妾腹の出ではあるが、普之進といふ、男子が在る爲に、何事か起きはせぬか、といふ心配を起したのは、愛妾のお由良が、微賤の出身で、而も、慣みの惡い、自我の念の、勝つた女である、といふので、萬一にも、普之進を、御本家へ直さう、といふやうな、野心でも有たれた日には、それこそ、一大事である、と、それに就いて、一部の人の心配は、流石に、急所に當つて居た。

是れより先、榮翁は、邦丸が、可愛い一念から、頻に、邦丸の、一日も早く、島津家の當主となつて、藩の政治に携はるやうに、と、そればかりを、待つて居たのだ。然るに、母の彌姫の病氣が、漸く重くなつて、最早や、醫者の手當も屆かぬ、といふ報告を得たので、そこで、榮翁は、隱居の身の上ではあつたが、それ〴〵の役向へ、人を送つて、邦丸の、將軍拜謁の事を計つた。所が、將軍家齊の御臺所は、榮翁の娘であるから、邦丸の爲には、大叔母に當るのだ。斯ういふ事が、少からぬ便宜となつて、邦丸は、文政七年の七月十五日に、島津家の相續人として、初の登城をする事になつた。將軍との御對面も、首尾好く濟んで、其事は、急飛脚を以て、國許へも報告があつた。病ひの床に打伏して、最早や、自分の運命も、今日か、明日か、と、諦めをつけて居た、彌姫が、此の音信を、得た時には、何程の喜悅であつたか、其安心を得て、翌月の十六日に、眼を閉つたのである。其年の十一月二十一日に、邦丸は、從四位の侍從に昇り、兵庫頭と任官して、先づ相續人としての、位置は固くなつた。齊彬の齊の一字は、其時に、將軍から賜つたのである。

お由良の腹に出來た、普之進は、初めは、大隅國の種子島で、一萬石を領して居た、島津伊勢守の養子になつたのであるが、齊興は、普之進か、可愛い爲に、表向きだけはさうしたが、矢張り、本人を、城内に置いて、膝下で育て

たのであつた。文政九年になつて、更に普之進を、重富郷で、一萬千四百八十石を領して、御一門の首席に、なつて居た、島津出雲の養子として、長く重富の領主たるの、資格を與へた。縱令、妾腹から出た、子供にもせよ、是れ迄の扱ひを受けたならば、それで、滿足をしなければならぬ筈であるが、本人の普之進は、姑く撤き、母のお由良は、低い身分から、成上つた身の上で、而も、彌姫が、此世を去つてからは、全く城内に、權威を振つて、齊興の寵愛は日に益々、加はるばかりである、といふ所から、自然と、淺墓な女の、慾も出て來る。從つて、腹を痛めた子供の、普之進を、どうかして、御本家の相續人にしたい、といふ、惡い考へも、起つて來て、密に味方を集める事になつた。

三

如何に、お由良の方が、惡い陰謀をして、普之進を、本家の相續人にしよう、としても、それは、迚も駄目なことである。既に、邦丸は、榮翁の骨折に依つて、初登城の式も終り、親しく將軍にも拜謁したのであるから、島津家の正統な相續人たる事は、既に認められてしまつた。榮翁は、流石に、偉い所があつて、お由良の方に、男子が出來たといふ事が、何となく心懸りになつたので、そこで、邦丸の初登城を、急いだのに違ひない。殊に、將軍の諱の、一字を貰つて、齊彬と稱するに至つては、どうしても、相續人たる事を、動かす事は、容易に出來ないのである。齊彬が、恰度、十七歳の文政九年になつて、一橋民部卿の長女、英姫といふ、御方を迎へて、夫人とする事になつた。英姫は、齊彬より、四歳の年長であつたのでから、之を迎へるに就いて、榮翁の心慮も、凡そは想像するに、餘りがある。

それは、偖て置き、お由良の、苦心は一通りでない。幸ひにして、奥方の彌姫が亡くなられたので、全く奥向きの全權を握つて、齊興の寵を、一身に集めて、今では、どんな事でも、自分の思ひ通りになる、といふまでにはなつたが、唯一つ、望んで叶はぬ事は、普之進をして、本家の相續を爲させる一事であつた。さうなつて見ると、淺墓な

女の情熱は、愈々激しく燃えて來て、縱令、どんな手段を用ひても、この非望を成し遂げたい、といふ事になる。從つて、多くの味方を、造る必要がある、といふ所から、段々と、表方の役人に、因緣を求めては、ひそかに引見して、盛んに恩を施し、德を賣つて、味方に引着ける、算段を始めた。

齊興の御側を、勤める者が、その役柄の關係から、どうしても、お由良の方に、多く接近する事になる。其處が、お由良の附目であつて、御側御用人の調所笑左衞門、御側役の伊集院平の兩人を、手に入れてしまつた。笑左衞門が何事に付けても、才智の勝れて居る事は、前にも長々と、述べて置いた通りであるが、元來が、微賤の出身であつて、算數のよく分る男だけに、物事の利害を、打算する事が、並外れて早かつた。其才智が害をなして、斯うした非望に加擔する事になつたのであらう。

島津家の財政を料理して、長い間の貧乏世帶を、どうか、斯うか、整理したといふ所から、軍役や、老臣の間にも、追々と、信用を得て來て、今では、笑左衞門の勢力は、なか〳〵侮る事の出來ぬ程に、強くなつて來たので、その笑左衞門が、お由良の味方となり、つまり、此の陰謀に就いての、參謀長となつたのであるから、お由良の爲には、非常な利益であつたに違ひない。誰にしも、初から左樣した非望に加擔する所存でなくても、お由良に、接近して行く間に、何時か知らず、巧く籠絡されてしまつて、段々と、味方になつて來た者の中には、家老格の島津豐後、同石見、碇山將曹、二階堂志津馬、末川近江の四人、御側役では、伊集院伊織、番頭では吉利仲、勝手方御用人の海老原宗之丞、是れは、笑左衞門の恩顧に、預つた一人であるから、お由良の味方といふよりは、却て笑左衞門の爲には、どんな骨折も辭さぬ、といふ側の人である。屋久島奉行の西田彌右衞門、御藏方の宮原甚五兵衞、勘定奉行の本田藤左衞門、是れも矢張り、笑左衞門の味方で、御側用人の新納四郎左衞門は、笑左衞門の引立に依つて、此地位に昇つた人、廣敷番頭の牧仲太郎、三原藤五郎、勝手方の迫田甚助、是等の人々を集めたのだが、無論、半年や、一年の中に集め得たのではない。辛抱强く、徐々と壓迫せて、どうか斯うか、味方にしたのち、その結束が、充分に出來てから

初めて相談に上つたのが、齊彬を排斥して、普之進を、御本家へ直さう、といふ事であつた。之を聽かせられて、一時は驚いた人もあつたらうが、何しろ、太平が長く續いて、武士の思想が、墮落して居た時代であるから、お由良の味方になる方が、自身の爲にも利益である、といふやうな、卑しい考へから、遂に一味徒黨の盟約に、加はつたものが多く、その間に立つて、是れまでの結束をなさしめたのが、即ち笑左衞門の手腕であつた。

齊彬は、文政九年に、夫人を迎へて、それから四年目の十二年八月に、英姫は、男子を生んだのだが、不幸にして間も無く、此世を去つた。御夫婦の悲歎は一と通りでなかつたが、併し、まだ夫婦ともに、齡も若い事であるから、自ら心を慰めて、日を過す中に、天保八年の八月になつて、又も懷姫して産落したのが、今度は、女子であつた。不思議な事には、是れも亦、間も無く病死した。翌九年の十一月に、再び生んだが、是れも亦、間も無く死んでしまつた。弘化二年から四年迄に、男子二人を生んだが、是れも夭死をしてしまつた。それが皆な、三歳か四歳まで育つと不思議に、病氣が出て死ぬ。斯ういふ事が、續いて居る間に、普之進は、重富家の相續人となつて、山城と改め、養家の娘百子と、婚禮の式を擧げて、忠義といふ、嗣子を得た、といふやうな事もあつて、お由良の非望は、日に募つて來るばかりであつた。

齊彬の子供が夭死をする、といふ事に就いて、藩中に、惡い風評が、立つて來た。軈て、それが、お家騷動の原因になるのであるが、兎に角、齊彬の子供に限つて、夭死をするのは不思議な事だ、といふ噂は、御一家親類の間にも段々言ひ傳へる者が、出るやうになつて來た。

四

お由良の方では、齊彬が、本家の相續をして、當主になつた所で、その相續人さへなければ、准養子の形式を以て、普之進が、相續人になれるに、極つて居るのであるから、切めての事には、齊彬の子供だけでも、育たないやうにしよう、といふ、その思慮は淺薄であるが、さうした計畫もされた、といふ事は、充分に推察が出來る。

本國の方で、さうした非望が、企てられて居る事は、齊彬の方では、少しも知らなかつた。それは餘程、巧みに計畫されて居たから、齊彬の左右に居るものは、更に氣が付かなかつた。乍併、齊彬附の、家來の中には、なか〳〵偉い人物が、揃つて居た。其中にも、近藤隆右衞門、仙波小太郎の兩人は、極めて剛直な武士で、殊に、近藤は、陽明學を、深く修めて、藩中に於いての、陽明學者である所から、齊彬の御附として、江戸の藩邸に、定詰になつて居たのだ。さういふ者が、齊彬の左右に居る事は、陰謀を企てゝ居る、連中から見れば、非常な邪魔になるのであるから、どうかして、この兩人を、齊彬の御側から遠ざけてしまひたい、といふ事は、少し智慧のある人は、皆さう思ふて居たのである。

或日のこと、調所笑左衞門は、齊興の御前に出て、色々の御用を達して居た。齊興は、笑左衞門が、自分の鑑識に違はず、藩の財政を、巧みに整理し遂げたのを德として、其後も、笑左衞門を信用して、何事も、笑左衞門任せの傾きがあるのみならず、大概な事は、笑左衞門から吹き込めば、齊興の心が動く、といふ位にまで、深い信用を得て居たのであるから、藩士の役替へなぞは、笑左衞門の一言で、決するやうになつて居たのだ。その恐るべき勢力を、有つて居た爲に、笑左衞門の前には、大概な藩士は、頭を下げて、唯だ命維れ從ふ、といふ有樣で、實の所を言へば、殿樣の齊興よりも、家來の笑左衞門の方が、陰の勢力は、あつた位である。それ程にまで、勢力のある笑左衞門が、齊興の前に出た時は、左右の者が注意して、今日は、笑左衞門が、どんな事を、殿樣に申上げるかと、唯だそればかりに氣を揉む、といふ位の有樣であつた。

齊興は、極めて機嫌が好く、笑左衞門を對手に、頻りに話込んで居た。時に、笑左衞門が、席を進んで、

『乍恐、申上げまする』

『何事か』

『斯樣なことを、お尋ねも無きに申出づる、といふのは、如何にも僭越がましい、やうではござりまするが、苟も家來として、明かに是非の區別が、決きました場合に、秘して之を申上げませぬは、不忠の至りと考へて、お叱りをも顧みず申上げまするが、江戸表在番の近藤隆右衞門、並びに仙波小太郎の兩名は、私の見まする所では、殊の外、その才識も優れ、多くの御家來の中に於て、殊に、御役にも立たうかのやうに心得まするが、江戸の御邸に、事も無く、日を送つて居る、といふのは、無益に人を、養ひ置くやうにも、考へられまして、如何にも殘念に存じまするが、願はくは御國詰の、御沙汰下されて、更に相當の御役に、お引上げ下さりまするやう、願ひ上げまする』

お由良と、充分に打合はせをして、笑左衞門は、齊興に、勸めるのであつた。

この兩人が、江戸詰になつて居て、齊彬の左右に、居る事が、例の陰謀を遂げるに就いて、何れ程の邪魔に、なるか知れない。齊彬の左右には、成べく偉い者を置かない、といふのが、この非望を遂げる策としては、第一なのであるから、そこで、兩人を、遠ざける爲に、敢て讒言を構へずして、其人物を稱讃して、相當の位地に引上げ、然るべき役目を授けて、國詰にしようといふ、其處に、計畫の非凡な所はあつた。齊興は、又馬鹿な殿樣でないから、この兩人が、豫て用ひるに足るべき人物だ、といふ事は、よく知つて居たので、笑左衞門に言はれて、それに同意するのは無理のない事であつた。

『如何にも、道理と思ふが、併し、兩人を、國詰に致したならは、齊彬の左右に居る者は、何と致す所存か』

『其儀に就ては、御心配御無用と存じまする。眼に餘る程ありまする、御家來の中に、若殿樣の御附として、然るべき人物が無い、といふ筈はござりませぬ。老臣の方とも、篤と相談の上、然るべき人物を見立てまして、若殿樣御附に、致しまする考へでござりまするが、兎に角、近藤、仙波の兩名は、御國詰然るべし、と存じまする』

『其事さへ承知の上とあるならば、一向に差支へない。速に其取計らひを致して、宜からう』

『ハツ、御意に基づきまして、至急の取計らひ仕りまする』

斯うした次第で、笑左衞門は、殿樣の前を、下つて來る、と同時に、其手續きに及んだ。茲に於て、兩名は厭でも、齊彬の側を離れて、國詰にならなければならぬ事になつた。

五

若殿が、何程の齡になつても、現在の父が健康で、藩主を退かぬ以上は、單に相續人である、といふだけのことで、實は何等の效も無いのである。齊興は、追々の年配であつた。齊彬は、宮に藩中の評判ばかりでなく、親類交際をして居る諸侯の間にも、定評はあるのだ。けれども、齊興が、隱居をせぬ中は、何程、齊彬が偉くても、相續は出來ないのであるから、お由良が、齊興の寵を賴んで、成るべく相續させぬやうに仕向けて、齊興を、煽て上げて居るのであつた。

元來が、普通の馬鹿殿と違つて、立派な人物ではあつたが、大名育ちの我儘は、充分に有つたのである。其上に、何も彼も、よく判つて居るだけに、却て他の煽動にも、よく乘る風があり、自分では、乘らぬやうにして居ても、自我の念が強いから、何時か知らず、煽動には乘るのだ。それを僥倖に、お由良が、よく齊興の性質を、呑込んで居て、事に觸れ、物に付けて、巧みに煽て上げて、成るべく隱居をせぬやうに、仕掛けて居たのだ。左なきだに、自我の念が、強い爲に、隱居したくない、と思つて居る、齊興であるから、現在の實子、齊彬の爲人が立派である、といふ事は、他に向つても誇る位に、よく呑込んでは居るのだけれど、自ら藩主を退く、といふ考へは、更に無かつたのである。さうして、月日を送つて居る中には、齊興と、齊彬の間を疎隔させて、何かの口實を以て、齊彬を退けて、機會好くば、普之進を、相續人に引直さう、といふのが、第一の陰謀で、若し、それが外れたならば、齊彬の准養子といふ事にしたい、といふ計畫であつた。

齊彬は、極めて賢明な御方であつたから、策を構へて、他を陷れる、といふやうな事は、爲ぬと同時に、自分が他

から、さうした惨い目に遭ふ、といふやうな事も、考へて居なかつた。本國の家來の多くが、お由良の味方になつて、自分を排斥して、普之進を、島津家へ直さう、といふやうな、陰謀をして居る、といふ事は、夢にも知らなかつた。一般の諸侯は、相續人が二十歳を越えて、自分が、六十歳にもなれば、大概は、家督を讓り渡す、といふ習慣に、なつて居た。早い人は、四十歳臺で隱居するのもある。然るに、自分の父は、更に、そんな樣子も無く、何時までも藩主として立つて居り、自分が相續をする時は、何時來るか判らない。けれども、そんな事を、恨みに思つて、氣を焦るやうな、卑しい御方でなく、相變らず若殿として、平然して居たのである。

今日は、近藤隆右衞門が、火急に申述べたい事がある、と言ふて、面會を願ひ出た。そこで、直に許して、近藤に、對面する事になつた。

『其方、願出に依つて、面會を許したが、火急の用事と申すは、何事か』

『ハツ、唯今、本國より急使到來、初めて承知いたしましたが、御役替への儀で、ござりまする』

『フ、ウ、其方の役替へとは、どういふ事に相成るのか』

『私、身に取りましては、此上も無き幸福ではござりますが、併し、餘りの昇進に、自分ながら驚き居りまする』

『而て、役名は……』

『町奉行兼物頭といふやうに、承はり居りまする』

『ハ、ア、そりや、父上よりの御沙汰か』

『御意にござりまする。無論、大殿樣よりの御役方には、違ひござりますまいが、私への知らせには、御役方からの、公の御達しでござりませぬ』

『而て、何者から、知らせて寄越したか』

『豫て御承知ござりませう、琉球係りの大久保治右衞門より、急使を以ちまして、斯樣相成つた、といふ通知でござりました』

『治右衞門より、左樣な通知があつたか』

『御意に、ござります』

流石の齊彬も、暫時の間、考へて居たが、

『予は、未だ左樣な事は耳にせぬが、父上の御沙汰とあれば、止むを得ぬ。それに、其方が、出世とあれば、尙更ら予は喜んで、左樣相成る事を望むまでぢや』

『有難き御諚ではござりまするが、今日まで、長き歲月を、御側に侍して、勤め向きに、何の落度も無く、一方ならず御寵愛られました、思召に對しましては、何として忠勤を擺んでませうか、唯だ〳〵そればかり、苦心罷りありました折柄、斯樣な御沙汰とあつては、何分にも、快く御受けもなり兼ねまして、自分一存の御受けも、致し得ず萬一、公の御沙汰ありました時分には、固く御辭退申したく存じまして、取敢ず御意のほど、伺ひ上げたう、存じまする爲に、拜謁願ひ出でました次第に、ござりまする』

『何と申す。その昇進を拒む、と申すのか』

『イエ、決して拒む、といふ次第ではござりませぬが、今更に相成りまして、御側を離れまする、それが私の苦痛に存ずる所で、ござりまする』

『そりや、惡い考へぢや。予に盡すも、亦國詰となつて、藩へ盡すも、忠義の道に、二つは無い。心置きなく、其沙汰があつたら、受ける事に致せ』

『仰せではござりまするが、私と致しましては、何分にも、お受け致し兼ねまする故、今一應、熟考の上、更に申上げる事に致しまする』

『再考いたす、といふは、其方の勝手であるが、予は、偏に其沙汰を拒まぬやう、賴み入る』

『有難き御諚、なるべくは御意に、悖らぬやう仕ります』

御暇が出て、自邸へは歸つて來たが、併し、隆右衞門は、本國へ行きたくないのだ。誰にしても、自分が出世をする事なら、若殿樣御附で、窮屈な思ひをして居るよりは、その方が宜いのであるから、默つて行つてしまふのであるが、隆右衞門は、此の賢明な若殿の、御側に附いて居る方が、縱令、役目は下であつても、それが樂みである。然るに、何ういふ次第か、邊にこの昇進といふのは、何か其間に、怪しむべき事があるに、相違ない。殊に、治右衞門からの通知に、依つて見れば、調所笑左衞門が、推擧したのだ、といふが、若し果して、さうであつたならば、平生から、餘り感心して居ない、笑左衞門の推擧は、却て自分としては、迷惑を感ずるのであつた。けれども、齊彬侯が、是れまでに言はれる以上は、强てそれを拒む、といふ事もならぬ。仙波の邸へ、やつて來て、小太郎にも、相談して見たが、是れも同じ思ひで、翌日は、兩人揃ふて、齊彬に、拜謁を願ひ出て、同じやうな事を、申立てゝ見たけれど遂に齊彬は、懇々と、兩人の國詰に、なる事を諭した。

茲に於いて、止むことを得ず、兩人も、其心になつて居る所へ、本國から、公然の達しがあつた。大久保から、知らせて來た通り、兩人は、等しく國詰になつたのだ。仙波は、馬廻頭といふのであつたから、近藤から見れば、役目は下であるが、矢張り出世をしたのには、違ひない。

六

邪魔になる兩人は、齊彬の左右から、遠ざけてしまつた。何程に、兩人が、立派な人物であつても、之れを國詰にして、笑左衞門が、上から睨んで居る以上は、身動きもならぬ、といふのが、お由良一味の考へた惡い計畫であつた。それは宜い、としても、是れから、齊彬の左右に、然るべき味方を定詰にさせて、齊興との親子仲を、割くやうにしなければならないのだ。

お由良の侍女を、勤めて居たものに、菊野といふ者があつた。なか〳〵悧巧な性質の、殊には、容姿も美しく、讀書さへも、普通以上に出來る、といふ、三拍子揃ふた女であつた。表方の侍で、奥向きの用事にも關係のある若侍の、眼を惹くやうになつて、宿直の晩の徒然には、菊野の噂が、喧しい位であつた。お由良は、菊野を愛する事が一通りでなく、自分と同じやうに、身分の輕い者の娘であるだけに、その同情も、大かつたのである。表方の若侍に、本田六左衞門といふのがあつたが、武藝も充分に出來るし、武士の修養は、一通り仕込まれて、若侍の中でも、相當に腕も利く、といふ所から、藩中でも、重寶がられて居た。

或日、笑左衞門が、奥殿へやつて來て、お由良に、對面した時、本田の話が出た。どうかして、之を御側役に引上げて、齊興の目附役とし、併せて、齊彬との間を引割く、苦肉の策を行はさせる、役に使ひたい、といふ相談があつた。是れは、笑左衞門が、六左衞門の兩親の事に就いて、先年、心配をしてやつた事があり、それは、極く些細な事ではあるけれど、武士氣質の六左衞門が、甚く之を恩義に着て、笑左衞門を、大切な恩人として、扱ふて居る。それがあるから、笑左衞門は、お由良との打合せに、菊野と、六左衞門を、配せてから後に、齊興の御側役にしよう、といふ相談を、悉皆極めて、其翌日に、笑左衞門は、六左衞門を、態々呼びつけて、此相談に及んだ。初めて聽いた時は、六左衞門も、何の爲に、笑左衞門が、斯ういふ事にまで立入つて、心配をして吳れるのか、解らなかつた。まだ齡の若い身の、殊には、評判の菊野を貰へる、といふのであるから、格別深い思慮も無く、又、笑左衞門を、立派な武士として、崇めては居るし、自分の爲には恩人である、といふ所から、一切の事は、笑左衞門に任せる、といふ考へになつた。笑左衞門は、獨り笑壺に入つて、直にこれから、お由良へ、其旨を通ずる。兩人揃ふて、齊興の御前へ罷り出て、此事を願つて出た。

こんな事まで、齊興が、彼れ是れ、指圖する必要は無いのであるが、愛妾のお由良から、願つた事ではあるし、殊には、笑左衞門が、媒酌するとあつて見れば、別に故障を、言ふ次第も無いのだ。六左衞門の爲人も聽いて、さうい

ふ立派な者ならば、差支も無からう、といふ事になつて、齊興が承知をする。そこで、公然の手續をして、六左衞門と菊野は、夫婦になつた。

其次に、お由良が心配したのは、弟の小藤次の身の上であつた。自分が、島津家の當主たる、齊興の愛妾として、夫人の彌姫が、亡くなられてから後は、全くの御部屋樣としての、扱ひを受けて、七十七萬石の夫人に、なり濟ましたのであるから、此以上は、自分の弟を、大工で一生を送らせたくないから、是れも、笑左衞門に、段々相談をすると、早速に承知して呉れて、先づ自分に、任せて置け、といふ事であつたから、お由良も、何れ笑左衞門の才智に依つて、何とか小藤次の身分も、出來るものと思ふて、それを樂みに、日を送つて居たのである。

お由良が、鹿兒島へ移つてからは、兩親も、伴れて行かう、といふ相談はあつたけれど、昔の江戸子は、口先ばかりで氣が弱く、江戸の地を離れて、遠く鹿兒島まで、四百里もある所へ、引込むといふ決心は定かないで、娘に別れるのも辛いが、併し、江戸に殘りたい、といふ希望を、頻りに言ひ張つたので、そこで、相當の手當を貰つて、毎月の事は、藩の方から、それ〴〵に、送つて呉れるので、今は左團扇で、立派に暮して行ける、といふ樂隱居に、なつてしまつた。兩親は斯うなつても、伴の小藤次を、遊ばせて置く、といふ事は出來ないから、是れは大工として、自分から、金槌や手斧を、執るやうな事は無いとしても、幾人かの下方を使つて、今までの得意場を、稼いで居たのである。所へ、三田の邸から使者があつて、直に出て來い、といふ事であるから、藤左衞門と、同道で罷り出ると、

『此度、本國役方より、本國へ參れ、といふの達があつたから、早速に、出發の用意をしろ』

といふのであつた。そこで、藤左衞門が、

『全體、それは、何ういふ譯で、ございますか』

と尋ねると、御役の人は、

『お部屋樣からの御申付で、殊には、お殿樣も、お許可になつて、本國へ、遣はすやうにとの御沙汰であるが、其以

上の事は判らぬ。察するに、相當の身分に、御取立になるのであらう、と思ふから、一日も早く、出發の用意をしたら、宜からう』

斯う聞かされて見ると、何だか夢を、見るやうな心持で、お受をして家へ歸つてから、親子三人が、額を集めて、さてどうしたものか、といふ相談になつたが、何とも分別が決かぬから、引續いて懇意を、結んで居る、例の甚兵衞の所へ、相談に行く外は無い。そこで、甚兵衞方へ、使者を出すと、足輕な甚兵衞は、早速やつて來た。

『何か、急に用があるつて、何んな事だい。又、品川の一件から、チン〳〵喧嘩でもあるまいと、家を出る時、嬶と話し合つて、笑つて來たのだが、全體、相談てえのは、何かい』

お貞は、苦笑をして、

『厭な差配さんだよ。私の顏さへ見れば、品川の事を言つて、嘲弄んだから厭になつちまふ。さう何時迄も、亭主だつて、品川通ひばかりして居やしまいし、私だつて、何時まで角を、生して居る譯でもないんだから、そんな事は、是れから言ひツこなしですよ』

『オツト、宜し〳〵。さう話しが判れば、頼まれたつて言ふことぢやない。相談てえのは、何んな事か』

『マア、差配人さん、聽いて下さい。今日、亭主と、小藤次に、麟麿樣から迎ひが來て、行つて見ると、小藤次に、麟麿へ來い、といふんですが、どうしたもんでせうか、私共の思案では極りませんから、そこで、差配人さんに、御相談でさア』

甚兵衞は、思はず膝を打つて、

『そいつア、甘い事になつたぞ。否も應もあるものか、早速承知をして、オイ、小藤次さん、早く鹿兒島てえ所へ、行つて御覽、今度歸る時は、大小を差して、家來の五人や六人は從れて、肩で風を切つて、この四國町を歩くやうになれるんだ』

『エツ、そんな身分に、なれるんですか』

『勿論のことさ、大地を打つ槌は外れても、甚兵衛の見込は違はないよ。ハツハ、、、、、』

七

翌日は、甚兵衛が附添になつて、三田の醪邸へ、やつて來た。役向の人に、聽いて見ると、甚兵衛が、鑑定した通り、本國から迎ひの者が、來て居て、小藤次に同道しろ、といふのであつた。それは無論、お由良が、弟の小藤次を出世させようといふ、弟思ひの情から起きたのではあるが、又一面から云ふと、成るべく自分の味方に、なるべき者は、親疎の別なく、片端から引き着けよう、といふ準備の、一つであつたに違ひない。殊に、小藤次は、實弟であつて見れば、之を一廉の役人に、引き擧げて、自分の側に、引き着けて置いたならば、何かの時の役に立つだらうと、斯ういふ考へで、お由良が、笑左衛門と、相談の上で、小藤次を、薩摩へ呼び付ける事にしたのである。

斯うした事情で、小藤次は、旅の支度も早々に、迎ひに來た、武士に伴れられて、鹿兒島へ、遙々と下つて來た。

さて、お由良に、會つて見ると、甚兵衛が、鑑定した通りであるから、小藤次は、天へも昇る喜悅で、殿樣の齊興にも拜謁が出來るし、奥向の役人といふ事になつて、兩刀差す身の上になつた。如何に、お由良の實弟とは言ひながら昨日まで、大工をして居た者が、遽に兩刀さしての武士であるから、その評判は、直に藩中へ擴まつて、昔氣質の武士は、眉を顰めて、怪しからぬ事だとは思つたけれど、寵愛並ぶ方なき、お由良のする事ではあるし、殿樣が、之を許して、役人にしたとあつては、公然、苦情も言へず、唯だ蔭で、ブツ〳〵言ふばかりであつた。大工の小藤次は、此時から、岡田小藤次利武と、素晴らしい立派な名前になつて、毎日のやうに奥向へ、勤める事になつた。

笑左衛門の周旋で、追々に、徒黨は集まる、其多くは利を啗はして集めるのであるから、不時の用意金が無ければならぬ、といふ所に、氣が付いて、或日、笑左衛門は、用事に託げてお由良に對面した。

『さて、段々味方も殖えて、嘸お喜びではあらうが、之に就いて、一の難儀と申すは、他の事でもないが、日々に、多分の費用も要かる事であるから、何とかして不時の用意金を、造る事にしなければならぬ。此事に就いて、深い御考へがありまするか』

齊興の、お氣には容つて居るけれど、金が自由になると、いふ譯でもないから、お由良も、此質問に對しては、急に答へる事が出來ない、笑左衛門は、膝を進めながら、聲を潜めた。

『實は、伊集院平の妹婿に、田中四郎兵衛と、申す者がござる。此者は、なか〳〵文筆の事にも明るいし、又利殖の事に就いては、最も才智の働く者である故、殿樣へ申上げて、此者を、御使番に、引き擧げ、御納戸金の取扱ひを致させる事にして、利殖を計る事に、致したならば如何であらうか。思召を伺ひたく參つたのでござる』

『妾に於いては、何の好い分別も無いのでござりますから、貴殿が宜しい、と思召したならば、其通りにして戴きたいので御座います』

『宜しい。さういふ譯ならば、その取扱ひは致しまするが、御部屋樣も、矢張り殿樣へは、四郎兵衛の昇進に就いて然るべくお執成を願ひたい』

『それは、承知いたしました』

是で、相談が纏つて、表から笑左衛門が、頻りに推擧する。内部からは、お由良が取成す、といふやうな譯で、齊興も、遂に納得する。直に重役へ、其沙汰が下つて、田中四郎兵衛は、改めて使番となり、納戸金を、扱ふ身分になつた。

序に話して置くが、此の伊集院といふ人は、又なか〳〵陰險な、殊に、慾張つた人であつたから、其慾心に附込んだ、笑左衛門が、利を以て誘ふて、遂に仲間入りを爲せたのであるが、只此儘に、笑左衛門の配下に、使はれて居るといふ事は、伊集院も、餘り悅ばなかつたものであるから、事の序に、一儲けしようといふ、武士にあるまじき、惡

い考へを起して、家老の碇山將曹が、非常に刀劍を愛して居るといふ、事を知つて、或日のこと、自分が、豫て祕藏にして居る、備前物の、極めて出來の良い、刀を携へて、碇山を訪ねた。平生から懇々、出入をして居るので、碇山の方でも、伊集院が、一味の者ではあるし、旁々、心を許して、交際つて居たのであるから、早速、座敷へ引いて對面をした。伊集院は、例の刀を、碇山の前に差出して、

『甚だ失禮ではあるが、是れは、豫て祕藏の名刀、拙者の差料としては、餘りに立派過ぎまするから、お氣に召したならば、御使ひ下すつては、如何であらう』

理由なく、他の贈物を受ける、といふのは、善くない事ではあるが、碇山は、自分が、好む刀を出されたのであるから、思はず手を出す事になつて、

『お讓受けをすると、爲ぬとは兎に角、一應、中身は拜見いたしたい』

『どうぞ、御覽下され』

そこで、碇山が、拔いて見ると、實に立派な名刀で、慄へ付く程欲しくなつた。熟と、其態度を見て居た、伊集院の眼には、もう大丈夫といふ、見込が付いたから、

『甚だ失禮ではござるが、御受け下さるならば、此儘に差置きまするが、如何でござらうか』

『イヤ、何とも結構な名刀、相當の代價を拂ふて、お讓受を致したい』

『仰せではござりまするが、拙者は、刀劍商ではござりませぬ故、代金をといふお話ならば、お斷り致す外はござらぬ。唯だ是れだけの名刀を、自分が汚すに忍びずして、貴殿に、差上げるのであるから、お差料として下されば、此上も無い事でござる』

『然らば、御言葉に甘えて、此儘、お預り致す事に致さう』

豈夫、無代ならば尙ほ喜んで貰ふ、とも言へないから、こんな體裁の好い事を言ふて、碇山は、遂に、此刀を納め

た。伊集院は、更に隙を進めて、

『折角の名刀ではござるが、白鞘の儘では、如何にも仕方がない。依つて、是れは失禮ではござるが……』

と言ふて、差出したのが一封の金である。大概な者ならば、是で怒つてしまふのだが、慾の深い碇山は、莞爾と笑つて、其儘受けてしまつた。刀の造作を、爲るに就いての費用、といふ意味ではあらうが、何れにしても怪しからぬ、武士もあつたものだ、斯うした事情で、碇山は一層、伊集院が好きになる。それに附込んで、自分の兄弟のやうに、交際つて居る、西田彌右衞門といふ者を、碇山へ、頼み込んで、屋久島の奉行に、引き揚げて貰ふ事にした。

八

家老の二階堂志津馬が、江戸詰に、なつて居た。此人も矢張り、笑左衞門に說伏けられて、お由良の味方になつて居た一人であるが、今度の江戸詰に就いても、無論、笑左衞門の推擧で、齊彬の行狀を視察して、若し、少しでも缺點があつたならば、それを、本國へ知らせて、何かの材料に使はう、といふ、深い計畫があつたからである。志津馬は、家老でこそあつたが、餘り悧巧な人ではなく、殊には好色の、極めて素行の修まらぬ人であつた。かういふ人に、よく有り勝ちの酒癖も惡く、江戸詰になつた、時分には、父の代から、幾分か遺してあつた、貯蓄も使ひ盡して薩摩の家老としては、その格式を保つに、困る位の有樣であつた。

さういふ際に、附込んで行くのが、笑左衞門の長所で、百兩、二百兩と、段々貢いで、身動きもならぬやうな、義理の枷を、篏めて置いて、志津馬を、捕虜にして置いたのであるから、江戸詰に、爲るに就いても、幾分か、志津馬の身を、救濟する意味は、あつたのだ。重ね〴〵の、笑左衞門の注意には、志津馬も、感謝せずには居られない。從つて、其の陰謀に對して、献身的の働きをするのは、當然な事であつた。

齊彬は、部屋住の若殿ではあるけれど、夫人もあれば、子供も擧げて居る。何處へ押出しても、立派な薩摩の藩主

で、他か納得する。まだ相續をしない中から、藩主といふのも可怪しいが、それは、其人の德であつた。つまり、齊彬に對する、諸侯の尊敬の念が、深かつたのである。又齊彬は、普通の若殿と違つて、非常に氣品の高い上に、見識もある。既に此時分から、外國の軍艦が、江戸灣に出沒するやうになつて、追々、それが問題に、なつて來て、江戸や、京都では、攘夷とか、開港とか言つて、騒いで居る位であつた。齊彬は、流石に、一見識あつた人であるから、幕府を首め、多くの諸侯が、攘夷論に傾いて居たにも拘らず、どうしても、是れは結局、開港しなければ治りは付かぬ、それに就いては、今から外國のことを、取調べて置く必要がある、といふ見込みで、少しでも、蘭學に通じた者がある、と聞けば、直に招いて、高い手當を與へた上、外國の事情を、取調べさせた。現に、高野長英や、渡邊華山も、齊彬の聘に應じて、三田の邸へ、出入して居た。

幕府の方では、外國の事なんぞを調べて、其事情を、書物に著したり、議論したりするものは獄ばない、といふ傾きがあつて、高野や渡邊に就いては、それ〳〵注意して居た。高野は、奥州の水澤から、出て來て、夙から蘭學を修めて、當代得易からざるの、蘭學通であつた。

此時分に、大きな地球儀を買求めて、之を座敷に飾り、其上には、世界の地圖を掲げて、來る人毎に、世界の大勢を說いて、我日本國が、鎖國主義を、執つて居るのは、甚だ其當を得ない、と言つて、幕府の鎖國令を、攻擊をして居たのだ。此時代に、斯うした、進んだ議論をすれば、幕府に忌嫌はれて、果は、自分の一身が、危くなる位の事は、高野ほどの者が、知らぬ筈は無い。それを覺悟で、やつて居た事ではあるが、諸侯の中にも、幾分か、時勢を觀るの明があつて、却て高野を歡迎する、といふ藩もあつたが、それは多く、重役の爲に妨げられて、一度か二度、出掛けて行けば、後は成るべく、敬遠して近付けないやうに、して居たのである。

折柄、齊彬の聘に應じて、出掛けて行つた、長英は、非常に喜んで、齊彬の爲に、蘭書の講義もすれば、飜譯もした。今でも、島津家には、長英が飜譯した、稿本が遺つて居る、といふ事であるが、兎に角、齊彬は、よほど進んだ

思想を、有つて居た人であつた。

序に、長英の身の上に就いても、簡單に、話して置きたい。此人は、盛んに蘭書を飜譯したり、或は、西洋の事情を書いて、書物などを出版して、幕府の當局者に、世界を見るの明が無い事を痛罵して、頻に世界の事情を、一般の人に、吹き込まうとして居た。此時の町奉行をして居た、鳥居甲斐守といふ者が、非常に心の拗けた奴であつたから、遂に長英を陷れて、罪人にしてしまつた。

それは、異端邪說を唱へて、世人を惑はす、といふ意味から、爲たのであらうが、今より考へれば、實に馬鹿々々しい事である。けれども、幕府の方針は、全くさういふ事になつて、居たのだ。尤も、高野許りでなく、仙臺の林子平なぞは、江戸の日本橋の下を、流れて居る水が、倫敦のテームス河の水に、通じて居るのだ、といふ事を唱へた爲に、『飛んでもない事を、言ふ奴だ。江戸の水が、倫敦の水に、續いて居る、といふやうな、切支丹婆天連のいふやうな事を、言ふ者は、謀叛人にも等しい』と言ふ譯で、仙臺藩へ、お預けの身となつて、其一生を、禁獄の中に、送つてしまつた、といふやうな、悲慘な話もある。長英も、矢張り、それと同じやうな、運命に捉はれて、傳馬町の牢へ、下る事になつたのである。

一生、牢の中で送つて、空しく死んでしまふか、さうでなければ、何とか罪名を付けられて、首を刎ねられる事に極つて居たが、長英は、自分が、娑婆に居る時に、救ふた者の爲に、救はれる事になつた。風の強いのに乘じて、牢屋の附近へ、火を放けて、それが爲に、大火事となつた。さうして、縛がれて居る者は、一時、其火事の爲め、釋放になる、といふので、長英は、幸ひに娑婆の人に、なつたのである。斯樣な、不意の事が起つて、一時、釋放かれた者は、二十四時間の間に、石部帶刀の許へ、名乘つて出なければ、ならぬのであつた。

長英は、一旦、牢から出た以上は、歸る氣はなかつた。それから、藥の力で、相格を崩したり、姓名を變じて潛伏し、蘭學の力に依つて、世界の事情を、一般の人に傳へて居た。それが、遂に露顯して、捕縛の役人が、向ふた時、

長英は、敏くも察して、役人が乗込む、と同時に、切腹して相果てた、といふのが、長英の身の終りであつたが、渡邊華山も、矢張り、それと同じく、罪を幕府に得て、田原藩へ、お預けの身となつて、後、潔く切腹してしまつた。

斯うした連中を、非常に愛して、常に膝下へ、引き着けて居たのが、齊彬であつた。それが、何時か禍をなして、齊彬が、齊興の御機嫌に、觸れる事になつた。

齊興と齊彬の不和

一

今日でこそ、西洋を手本にして、何事も研究するのであるが、まだ舊幕の昔、嘉永の頃には、そんな氣の利いた事を、爲る者は少かつた。殊に、幕府が、鎖國の令を布いて、僅に葡萄牙の人や、和蘭の人に限つて、長崎の一隅へ、住居出入する事を許したが、其他の國民に對しては、一切、近付く事を許さなかつたのみならず、日本人が、海外へ渡航するなぞは、非常に嚴しく取締つて、若し此禁制を犯す者があれば、磔の極刑に處する、といふ位の有樣で、而も、それが長い間、打續いての事であつたから、何時か知らず、日本人の頭には、排外的の思想が、傳統の如くなつて刻み込まれて居た。

乍併、さういふ事が、何時までも、續いて居るものではなく、必ず何かの機會に、新しい芽が吹いて來て、思想の上にも、著しい變化を來すのは、自然の勢ひで、止むを得ないのである。されば、亞米利加のペルリが、浦賀港へ、乘込んで來てから、日本の狀況は、今までと違つて、表面に於いてこそ、幕府を首め、諸侯の間にも、攘夷の議論が強く行はれて居たけれど、その裏面には、異國の事でも、取調べて見なければ、善いか惡いかは判らぬ、といつたやうな意見が、段々行はれて來た。事の善惡を極めないで、頭から排斥してしまふのが、攘夷論である。それが、兎に角、調べて見てからに、爲ようではないか、といふ事になつて、來れば、攘夷論の根柢は、破れたのも同じ事で、調

べて行けば、必ず開國論に、變つて來るのは、當然のことであつた。

尤も、眼の覺めた連中は、天保の頃から、既にその取調べに、着手して居た事は、前に述べた、長英や崋山のことて、充分に證し得る、と思ふが、長州には、村田良安といふ醫者があつて、矢張り、同じ時代に、長崎へ出て、蘭學を修めて來てから、頻に蘭書に依つて、兵學の講義もすれば、世界の大勢も論じ、漸く一般に知られて、宇和島の伊達侯に、召抱へられた時、軍艦の模型を造つて、天下の人を驚かした、といふやうな事もあつた。此人は、後の大村益二郎であるが、斯うした具合に、少しでも隙があれば、西洋文明の空氣は、流れ込んで來て、鎖國の夢を、破つて行かう、とする。頑冥な、幕府の役人が、鵜の目、鷹の目で、西洋の新說を、唱へる者を、見付け出しては、片端から慘酷な、處分を加へたが、それでも、時勢の力は恐ろしいもので、遂には、幕府自から、蕃書取調所といふ役所を造り、蘭學の出來る人を、廣く天下に求めて、西洋の事情を、調べるやうになつたのだから、可笑なものだ。

齊興は、殊の外に、異人嫌ひで、幕府が唱へる、攘夷論とは、大に意味は違ふが、いづれにしても、異人は嫌ひである、といふのが、齊興の精神であつた。然るに、その相續人の齊彬は、却て異國の事が好きで、隱れた蘭學者を集めては、頻に異國の事情を取調べさせ、果は、書物を讀むだけでは、承知が出來なくなつて、砲術の研究については態々和蘭人の手に依つて、異國から、その材料を取寄せる、といふまでに、進んで來た。齊彬の思想は、それまでに進んで居ても、家來の思想は、更に進んで居ないのであるから、齊彬へ對して、忠義の心を有つて居る者でも、それを苦々しく、思ふ輩もあつた。

況して、齊彬を排斥しよう、として居る、お由良の味方から見れば、一層怪しからぬ事に思ふのも、無理はなかつた。何か過失があつたならば、それを材料に使つて、齊興へ、讒訴を構へ、父子の間の、情感を疎隔させよう、と覗つて居たので、斯樣な材料が、見付かつた以上、決して其儘に、過す譯は無く、直に此事が、色々の細工を加へられて、齊興の猜疑を、破裂させる事になつた。

齊興が、何れ程、偉い人でも、今は、お由良といふ、惡魔の手に掛つて、その本心を、失ふて居たのであるから、唯何事も、お由良の言ふ通りに動く、といふ、情ない事に、なつて居たのである。調所笑左衞門が、遽に拜謁を願ひ出た。お氣に入りの家來であるから、直に許されて、笑左衞門は、御前へ出た。

『オー、笑左衞門か』

『ハツ、拜謁御許し下されまして、有難く存じます』

『而て、其方の用事とは、何か』

『實は、容易ならぬ事を、聞き及びまして、取敢ず、思召のほどを伺ひたく、罷出でましてござりまする』

『フ、ム、そりや、何ういふ事か』

『江戸表より、意外の事を、申し來りましたる故、初めは餘りの事と存じまして、豈夫に、左樣の事のあるべき筈はないと心得、再度の取調べを、致しましたる所、矢張り、最初の、通報に違はず、今は、打棄て置き難く存じまして、拜謁願ひ出でましたる次第でござりまする』

何ういふ事であるか、といふのは、まだ判らないが、笑左衞門の話振から、考へて見ると、容易ならぬ事には、違ひない。齊興も、思はず膝を進めて、ぢつと耳を澄ます。笑左衞門は、益々落付き拂つて、

『江戸表におきまして、若殿樣の昨今は、實に容易ならぬ事のみで、ござりまする』

『何と申す。齊彬の身上に就いて、容易ならぬ事がある、と申すか』

『御意にござりまする』

『そりや、何ういふ事柄か』

『公儀より、嫌疑の掛りましたる、謂はゞ罪人同樣の、似非學者を集めて、頻に蘭書の取調べ、それが進んで　唯今では、態々、長崎の蘭人に求めましたる、大砲の試驗、其他、異國の事は、彼是となく、自から進んでの、御調査

とござりまして、その評判は、各藩にまで傳はり、公儀にても、由々敷一大事として　今にも御檢擧がある、といふ風評、此儘に打過しましては、後日の祟も、恐ろしく考へまする。若殿樣、思召の善惡は、姑く撒きまして、兎に角、御家の一大事と、考へまする故、思召の程を承りまして、何分の處置を、加へねば相成るまいかと、心得まする』

と、言葉巧みに、讒訴の口火を切つた。齊興の顏色は、段々、むづかしくなるばかりであつた。

二

考へて見れば、笑左衞門も、勝手な奴である。自分が、榮翁の寵臣となつて、藩の財政整理に、掛かつた時、公儀を僞り、鑛山採掘を名として、澤山の金を、借出した上に、其金で、秘密貿易をやつて、意外の大儲けを占め、それで、紊亂した財政の一部を、整理けたのだ。齊彬が、學者を聘んで、異國の事情を取調べたり、大砲の實地研究をしたり、することが、それ程の曲事であるならば、自分の行つた、秘密貿易は、尙更に、曲事と言はなければならぬ。齊興は、其事に關係が無い、とはいふやうなものゝ、併し、全然知らぬ、とも言へないのだ。今、笑左衞門の讒訴した事が、縱令眞實である、としても、顏色を變へて、怒る程の事ではない。靜かに考へて、徐ろに處置を付ければ、それで宜いのである。けれども、心から嫌ひな、異國の事を、齊彬が、自ら進んで調べるのみか、兵器の研究までも始めた、といふので、その志は惡い、とは言へまいが、第一に恐れるのは、幕府からの嫌疑である。第二には、自分が極端な、異人嫌ひであるにも拘らず、斯樣な事をされるのは、何となく自分が、侮られるやうな氣がして、不快の感は、一時に起つて來たのだ。それに附込んで、笑左衞門が、言葉巧みに說くのであるから、何うしても癎癪は、昂つて來る。

『其方、申す所に依れば、齊彬の處置は、甚だ宜しからぬ。萬一、公儀の沙汰ともならば、全く一大事に相違ない。

それに就いて、充分の取調べは致して居るのか』

『如何にも、取調べは付いて居ります、が、それを、一々申上げましては、却て御親子の御間に、障礙の起りますゆゑ、是も亦、大切の事と考へまして、深くは申上げまぬが、兎に角、若殿樣の思召は、容易ならぬ禍を、御當家へ及ぼす事と考へまする』

『如何にも、其通りぢや。全體、予が、異國嫌ひである事を知りながら、故意と、左樣な事を致して、予に見せ付けるとは、洵に以て、怪しからぬ事ぢや』

言葉は、荒くなつて來るし、尊榮のやうな癇癪筋は、額に、何本となく、出て來た。

『まだ、そればかりでは、御座りませぬ。奧州の浪人とやら聞き及ぶ、高野長英とか申しまする、似非學者がござりまするが、此者は、先年、破牢致しまして、公儀に於かれましても、行方を搜索中と、聞き及びまするが、その者を引付けて、三田の御邸內に、圍ひ置き、此者の取調べましたる、書類に就いて、頻りに御研究あらせられる、といふ事も、承り居りまする。若し左樣の事が、公儀の御耳に入りましたならば、それこそ、御家に瑕の付きまする一大事、是は、たゞ一つの例には過ぎませぬが、若殿樣、氣隨氣儘の御振舞は、御沙汰に依つて、御差止め相成る外は、ござりますまい』

『フヽム』

長英の事は、齊興も、豫て聞いて居た。左樣な者を、邸へ引入れて、異國の事を取調べる、といふのは、縱令、幕府の方で、默つて居ても、自分の心には、益々反く事になるのだ。癇癖の强い、自我の念の旺な、齊興としては、我慢の出來ぬは、無理のない事である。ギリ〳〵奧齒を嚙んで、その癇癪は、極度に上り詰めて來た。笑左衞門は、心の中に、笑つては居るが、何處までも、冷靜を裝ふて、

『右、申述べましたる儀に付きましては、如何取計らうて然るべきか、御沙汰の儀を、相待ちまする事に致しませう

か、それとも、此儘御放任置き遊ばすか、思召の儀を、伺ひたう存じまする』

『よし。それに就いては、予にも、一應の思案はある。今が今、直に致さねばならぬ、といふ事柄でもあるまいから追つて何分の沙汰に及ぶ、それまで控へて居れ』

『御意に基づきまして、差控へ居りまする。乍併、斯樣な事は、一日を緩う致しますると、意外の變の起らぬとも、限りませぬゆゑ、一刻も早きを宜し、と考へまする』

『宜い。それも、よく判つて居る』

是で、其日は濟んだが、齊興は、笑左衞門の讒訴に依つて、齊彬が、厭になつたらしい。左なきだに、お由良が、その寵を恃んで、動もすれば遠廻しに、齊彬の事を、惡樣に言ふから、幾分の心が、動いて居る所へ、斯ういふ事柄が、湧いて來たのであるから、齊彬に對する感情は、愈々惡くなつてしまつた。

本國の方で、斯ういふ秘密の運動が、起つて居る事を、齊彬は、少しも知らなかつた。異國の事情を取調べる爲には、樣々な人を引入れて、研究して居た。所へ、本國から、重役の者が、上つて來て、父齊興からの書面を、携へて來た、といふから、直に面會を許して、携へて來た、書面を見ると、意外千萬にも、異國の事を、取調べたに就いて非常な立腹である。從來、藩に於いて、抱へてある學者の外、身元不明の似非學者を、寄せ付ける事はならぬ、とか、或は、砲術の研究に就いて、異國の大砲なぞ取寄せて、公儀を憚らぬ仕方は、軈て、島津家に、累を及ぼす事であるから、一切左樣な事は致してならぬ、とか、此事に就いては、いづれ參覲交代の期も、近付いて居るから、出府の上、何分の處置を加へる、といふ意味が、書いてあつた。

父から受けた、今までの書面に、斯ういふ叱りを、受けたのは初であつた。それにしても、何うして江戸の事が、明瞭に、本國へ知れたのか、之には何か、仔細が無ければならぬ、と、流石に、賢明な齊彬であるから、少しは氣が付いたが、さればとて、其事を調べて、何うしやうといふやうな、小さな事は、固より好まぬ性質とて、獨り、自分

の胸に、納めて置いたから、現に、齊彬の左右に、仕へて居る者ですら、大殿からの御沙汰は、何んであつたか、といふ事を、知る者は、なかつた位である。けれども、是が原因になつて、齊興と、齊彬の間は、非常に疎隔してしまつた。お由良一派の、姦臣が考へた、第一の策は、確に成功したのであつた。

二

物事に就いての好惡は、全く理窟の外だ。

『俺は、何うもあの事が嫌ひだ』

といふのに、他人が、

『何故、お前は、それが嫌ひか、是非好きになれ』

と言つても、それは無獣な事である。好きだから好き、嫌ひだから嫌ひである、といふだけの事で、理窟を以て、その好惡を抑へよう、としても、是が爲に、人の感情は、動くものでない。舊幕時代の攘夷論にも、此の好惡の感情から、起つて來たのが、多いのだ。その證據には、

『俺は、異國は嫌ひである。異人は、見るさへ厭である』

と、言ふ人に向つて、

『それならば、異國の事は、よく知つて居るか』

と尋ねられたら、誰一人として、

『知つて居る』

と、答へる者は、無かつたであらう。

詰り、嫌ひだから嫌ひだ、といふ丈の事で、何ういふ點が嫌ひで、それは、何ういふ理窟から、嫌ひになつたか、

といふやうな事は、殆ど判らないのだ。德川三代の家光が、鎖國令を布いて、異人が、我國に來ることを拒んだのみならず、我國の人が、異國へ渡る事も禁じたのは、異人に近付くのが、日本國の爲にならぬ、とにふ議論も、あつての事であるかも知れないが、兎に角、異國嫌ひといふ、一種の感情に驅られた爲めであつたには、違ひないのだ。今日のやうな、時勢になつてから、色々な理窟を附けて、論ずるやうなものゝ、當時の人情は、たゞ好嫌の一點張りから、鎖國主義に傾いた、といふのが、一番に公平な觀察である、と思ふ。

乍併、斯ういふやうな、狹い事を、言ふて居て、何處までも、是が押通せるものではない。軈て、この頑冥な思想は、打破らるゝ時代が來るに、極つて居る。即ち天保から、嘉永の頃に掛けて、段々、さうした傾向が、見えて來たのは、今更言ふまでもない事だ。

けれども、長い間、鎖國の夢を見て居た、日本の人が、縱令、外の方から、刺戟をされたにせよ、一時に、其夢が醒める、といふ譯はない。そこで、攘夷の議論と、開國の說が、初めて起つて來て、非常な暗鬪を、爲るやうになつて來たのである。

此一事は、單り薩藩ばかりではなく、何處の藩にも、あつた事だけれども、薩藩に於ける、此二派の暗鬪は、殊に激かつたのである。當主の齊興が、異人嫌ひで、相續人の齊彬が、異國好きであつたのだから、どうしても、その折合の好くないのは、當然な譯で、その隙に乘じて、お由良の一派が、盛んに齊興を動かすのだから、齊興の頭は、その方へ、傾いて來て、齊彬は、自分の實子ではあるが、幾分か疎んずるやうに、なつても來る。是も、矢張り理窟でなく、感情の上から來るのであるから、親子とは言ひながら、一度、其間に、小さい溝渠が穿たれゝば、段々、それが大きくなつて來て、終ひには、どうにも始末の付かぬやうな、大きな溝渠が出來る、といふのは、世間にも、よく有勝ちの事で、當に齊興と、齊彬の間にばかり、起る事柄ではなかつたのだ。

薩藩の小姓組の一人に、大久保治右衞門と、いふ人があつた。その先祖の事は、判然しないが、藤原姓を冒して居て

京都邊りの縉紳の出だ、といふ說もある。串木野と、市來の間を流れる、境川の上流に、川上といふ所があつた。此處は、山間の小さい、村落ではあつたけれど、土地は、頗る豐饒で、狹い所の割合に、人が多く居た。治右衞門から幾代前の人か、それは能く判らないが、兎に角、京都から來た人が、其處へ落付いて、家を成した。それから、續いて來たのが、治右衞門の家であつた。

治右衞門の父を、正左衞門といふて、此人は、薩主の御供をして、江戸に出てから、死んで了つた。順養子で、弟の正左衞門が、大久保家を、繼ぐ事になつたが、是も、早く死んだ。その正左衞門の長男を、勘兵衞といふて、大島の代官附の、役人をして居た。次男が、治郎介といふて、非常な學者で、藩中に於いても、評判の人物であつたが、兩人ともに、早死をしてしまつた。其弟が、治右衞門といふて、小姓組の一人に、なつて居たのである。薩藩に於いて小姓組といへば、極めて貧しい生活をしたもので、知行の如きも、百五十石以下に、限られて居たのだ。多くは五十石內外であつたから、小姓組になる人は、生活難の爲に、何か內職を、爲なければ食へない、といふやうな境遇であつた。されば、其子供の多くは、お茶坊主になつて、御殿勤めをして、謹に一家の糊口を、支へて居たのである。

鹿兒島の城下を、流れて居る、甲突川の東岸に、加治屋町といふ所がある。大久保は、其處に、邸を持つて居たのだが、天保元年の八月になつて、男の子を擧げた。是が後の利通であつて、幼名は、正袈裟といひ、後正助と改め、更に市藏となつて、最後に、利通と稱したのであつた。

同じ加治屋町に住んで、是も貧乏武士の一人であつた、西鄕吉兵衞の家に、例の吉之助が生れて、利通にくらべれば、二年早く生れた兄であつたが、兎に角、同じ町內から、此の兩人が生れた、といふのは、實に珍しい事である。王政維新の大業を、成し遂げて、明治の聖世を開いた、その根本の偉業に關係した、所謂、維新の三傑中の二人までが、同じ町內から生れた、といふだけでも、薩藩の人は、天下に誇る事が出來る。今でも、加治屋町では、大久保と、西鄕の生れた、家の跡へ、鐵柵を廻らして、大きな記念碑が建つて在る。

大久保と、西郷を比ぶれば、無論、その性格に於ても、大分違つて居る所はあつたが、唯だ至誠を以て、國家の爲に盡す、といふ一念に至つては、兩人共に、異なる所は無かつた。惜しい哉、大久保には、稍狹い所があつて、人を容れるの量に乏かつた。大久保に、可愛がられた人から見れば、さうも、思つては居ないだらうが、大體の上から見れば、大久保には、さうした缺點は、確に有つたのである。大久保には、西郷のやうに、邈乎とした所が、少しも無く何事も、整然と取締りがあつて、少しも物事に對して、餘裕といふものを持たなかつたから、西郷の如く、無限の德望は無かつたが、政治家としての實質に於ては、或は西郷以上で、あつたかも知れない。何れにしても、大久保は、偉大なる政治家として、激賞するに足るの人物であつたには違ひない。

四

治右衞門は、文武の修養も深く、殊に、禪を學んで、その妙味を解して居た人であつた。極めて貧しい、生活はして居たが、其分に安んじて、更に虛榮の心は、有つて居なかつた。何時の時代にもある事だが、人物は、何程偉くとも、生活が貧しいと、餘り人に、歡んで迎へられない。治右衞門にも、多少その傾向はあつた。獨り、此治右衞門を立派な人物と見拔いて、深い交際をして居た者が、二人あつた。其一人が、山田一郎右衞門といふ人で、他の一人が、高崎五郎右衞門であつた。山田の事に就いては、後に稿を改めて、細に話す事にするが、高崎は、明治になつてから、陛下の御前奉公をして、長く御歌所の取締りをして居た、例の正風、幼い時は、佐太郎といつた人の、父である。

役柄から言へば、此の兩人は、ずツと上であつたが、治右衞門の爲人を、よく知つて、交際を結んで居た。時に、治右衞門が、生活難の爲に、非常な苦みをすることがあり、敢て救濟を求めるといふやうな、卑しい人ではなかつたが、その窮狀が、動もすると、他の目に付くまでに甚だしい場合があつた。さうすると、此の兩人が、陰になり、陽になりして、治右衞門を、その窮厄の中から、救ふこともあつた。

或日のこと、此の山田が、飄然とやつて來て、

『治右衞門どん、御在邸ごわすかな』

と、聲を掛けながら、這入つて來た。恰度、治右衞門は、裏の畑へ出て、頻に働いて居つた時であつたが、市郎右衞門の聲を、聞き付けて、

『オー、是や、よう御來訪ごわした』

『ヤツ、何時も、よう稼いてごわすのう』

治右衞門は、頭を搔きながら、

『別に稼いて居る、といふほどの事でも、ごわへんが、些と徒事を仕申してのう、ハツハ、、、、、』

『今日は、足下御一人かな』

『ウム、妻な、子供を伴れ申して、今、親類へ行んで、居り申すよ』

『そや、何よりの好都合ぢや。些と御內談な、申したい事のごわして、來申した』

『フム、そや、何ぎや事かな』

『外でも、ごわへんが、頃日の一條が、段々に險しうなり申して、此儘に、打棄て置いたならば、何ぎや事になるかそいが心配で、實は相談に、來申したのぢや』

斯う言ふて、居る中にも、山田の顏色には、何處となく、憂愁の色が、仄見える。治右衞門も、痛心に堪へぬと、いふ樣子で、

『何うも、困つた事が出來申して、俺どんも、頃日來、頻に氣ばかり焦つて居申すが、何か內密の事な、知れ申したか』

『ウム、そいが分つたで、打棄て置く事もならぬかち、相談に來たのぢや』

『何ぎや事が判つたので、ごわすか』

『例の笑左衞門の小細工から、御親子の不和を計つて、そいから段々、火の手を揚げやう、ちふ考へのやうで、ごわすよ』

『成る程』

『此頃も、江戸表へ、殿樣の御使者が、立ち申した時、若殿樣へ、何事か、嚴重の御沙汰の下つた、といふ事も、聞いて居る。若殿樣も、あの通り、賢明な御方ぢやから、豈夫に、拙な御返事は、なさるまいが、若し此事から、御親子の御間に、不和の事でも起つては、そいこそ、取返しの付かぬことで、ごわすからな』

『フム、そや、其通りでごわす。俺どん等は、何ぎや心配なし申しても、身分の低い者で、ごわすから、何ぎやにも、方策は立ち申さぬが、足下な好か思案のあつて、その防壓な、出來まいかのう』

『それに就いて、相談に參つたのぢやが、近く江戸表へ、上つて見よう、と思ふが、足下のお考へな、何ぎやもんで、ごわすか』

治右衞門の、膝は進んだ。

『何ツ、足下、出府せられると、申さるゝか』

『フム、是非、江戸表へ出て、若殿樣に、拜謁の上、俺どん等の意中を、申し述べたく、實は、用向を作つて、出府の願書も、出してあるので、ごわすよ』

『そや、好か事でごわす。足下な、出府せられたなら、そいで、奸黨の熙計な、總て破れる事でごわせう』

『さうも行くまいが、やれるだけやつて見る事にや、ならぬからな』

『是非、そぎや事にして、貰ひたいが……』

『そいに就いて、治右衞門どん。俺どんな不在中も、國許の事な、心許ないので、な、是非、足下に、お願ひして置き

たい事のごわして、參つたのぢや。其事な、高崎どんにも、話してあり申すが、よく高崎どんと談合して、油斷なく、奸黨の熙計に、注意なして貰ひたか』

『そや、お引受け申す。高崎どんな、あの通りの智慧者でごわすから、高崎どんの、お指圖に從ふて、何ぎや、活動も仕申す、覺悟でごわす』

是から、兩人が、膝を突き合せて、頻に密談に耽つた。その相談も、ほゞ終つた所へ、歸つて來たのが、治右衞門の妻、福女であつた。

後から續いて、長男の正助も、附いて來て、平生から、山田には、可愛がられて居るので、幾分か、甘える氣味もあつて、山田の顏を見るや、正助は駈寄つて、

『ヤア、山田の叔父さんな、來て居るのう』

と言ひながら、其處へ坐らう、とした。父の治右衞門は、聲と見たきり、何も言はなかつたが、母の福女は、

『御挨拶もせぬで、汝は、何をしなはるか』

と、正助の帶際を、取つて引寄せようとする。山田は、ニコ〳〵笑ひながら、

『イヤ、差支な無か、俺どんな、大好の正助どんぢや、汝、好か稚兒ぢやのう』

と言つて、手を取つた。

『早う大きくなつて、好か武士にならんきや、いかぬぞ』

『叔父さん、曾我の祭なしたうごわすよ』

『ウム、それが好か、併し、曾我の祭は、五月でなうては出來ぬからのう』

『五月でなうては、曾我の祭は、出來ぬのでごわすか、そや、何故でごわす』

『曾我の兄弟が、父の仇敵を討ち居つたのが、五月ぢやからのう。その祭な、五月でごわすよ』

『河原に出て、傘な燒く、あの祭なしたいのでごわす』

『ウム、曾我の祭と、言ひなはるのは、傘を集めて、燒き申す事が面白い、といふのでごわすか。イヤ、其處が子供ぢや。曾我の傘燒きの祭に、其傘に、火か付けるのが面白うて、曾我の祭がしたい、といふのか、ハツハ、、、、、、』

正助は、後ちの市藏である。

五

曾我の傘燒といふのは、毎年の五月に、例の曾我兄弟が、富士の裾野の卷狩を幸ひ、父の仇敵たる、工藤祐經を、討つて取つた、其日を記念として、鹿兒島の士族町で行はれる一つの祭であつた。澤山の傘を、河原へ、持つて出て、之に火を點けて、當時の事を追懷し、曾我兄弟の苦心を、偲ぶ爲めの催しで、其夜に限つて、何れの家でも、曾我物語に、一夜を明かす、といふ事になつて居る。前にも述べてあるが、曾我の傘燒と同じやうに、極月十四日には、赤義穗士會と、いふものが催されて、一夜を、義士の苦心談に明す。此二つの催しが、薩藩の士氣を養成する上には、非常な關係を、有つて居たのである。

舊幕の時代に於いて、親の仇を討つとか、主人に忠義を盡す、とかいふ事は、人間の最も大切な、義務になつて居た。殊に、武家に於ては、此二つを以て、武士の生命として、あつたのである。誰にしても、幼い時代には、それ程、深い理窟は解らなくとも、斯うした事が流行ると、其の中へ交つて、解らぬながらも、他の話を聽いて居る。そのうちに、段々解つて來て、理窟の一つも捏やう、といふ時分には、もう全然、忠孝の道を、呑込んで居るのだ。時代の相違もあるから、止むことを得ないが、今の學校教育とは、大分趣きが違つて居た。其代り、今の學校から出た人は、極く輕薄で、一寸の用事には、間に合ふ人は、多くあるのだらうが、忠孝の道を、よく守つて、誠實に、主人や、國

家の爲に盡す、といふやうな人は、段々少くなつて行く傾きがある。さうなつた方が、是から先の、日本國の爲になるのか何うかは、僕等にも解らないけれど、何だか昔の方が、良いやうな氣がする。

山田と、大久保が相談して、愈々山田は、江戸へ出る、決心をした所へ、江戸の友人からの、音信に依れば、近々齊彬侯は、歸國せられるといふ事であるから、之には聊か、山田も驚いた。若し、さういふ事になれば、途中で行違ひになつて、折角に決心して、江戸へ、行く效が無い。そこで、重役の或人を訪ねて、

『若殿樣は、御歸國に相成るのか、何うか』

といふて、問合はせて見ると、何か知らぬが、急に御歸國に相成る、といふ答であつたから、さうと極れば、江戸へ行くまでもなく、國許で待合はせて、お迎へ申す方が宜い、と、玆に又、計畫が一變して、齊彬侯の歸國を、待受ける事になつた。

齊興が、お由良を寵愛する事は、日に益々、深くなつて來て、夫人を、失ふてからは、お由良に對する、寵愛の度は、一層深くなるばかりであつた。殊に、老齡てからの子は可愛い、といふ事を、よく世間の人は言ふが、全く、それに違ひない。重富へ養子にやつた、普之進を、膝下に引付けた限りて、更に養家先へ、戻さずに置く。斯うなると、普之進に對する愛は、愈々深くなつて來るばかりだ。お由良は、其弱點に附込んで、頻に齊彬の事を、それとなく婉曲に讒訴する。負けぬ氣の齊興は、近頃になつて、齊彬が、自分の命に從はずに、何でも勝手に、行つてしまふのが、氣に入らずに居る所へ、此の讒訴があるのだから、何時か知らず、お由良に、捲込まれてしまつて、齊彬を疎んずる事は、日一日と、激しくなるばかりであつた。齊彬も、普之進も、同じく自分の子ではあるが、その可愛さは、矢張り、普之進の方が深いのであつた。さればとて、齊彬は、正腹の長男で、相續人になつて居るのだから、之を動かすことは、迚も出來ないのだが、昨今の齊彬は、自分の氣には染まないのである。其處に、齊興の煩悶は、あつたのだ。

今日も、お由良を對手に、奥御殿で、酒宴が催されて居る。所へ、例の笑左衞門首め、奸黨の連中が、集まつて來

て、頻に酒席の興を添へる。齊興は、唯だ他愛なく醉ふてしまふて、盛りげ少し過ぎたが、姥櫻の殘んの色香に、又一層の趣を見て、何事も、お由良次第に、なつて居る。それが、酒の機嫌につれて、家來の眼にも餘るやうな事が、屢々振舞の上にも、現れて來るのであつた。

出產は、下賤い者だが、遊藝は、一通り習得て、殊には江戸一流の舞踊が、上手であつた。もう大きな子供の、出來て居る上に、夫人の亡くなられた後は、眞實の御部屋樣になつて居たのだが、それでも、斯樣な際には、齊興の所望に任せて、舞踊や、歌謠に齊興の機嫌を、外らさぬやうにして居た。

『コレ、由良』

『ハイ』

『予は、もう大う醉ふた』

『それでは、御撤宴に遊ばしますか』

『ウム、予は醉ふたが、併し、家來の者共は、嬉しさうに飲み居る。今、暫時の辛抱ぢや』

『それ程に醉ふて、御出で遊ばしながら、我慢遊ばしては、御身にも障りませう。寧そ、此儘、御退席が、よいかのやうに、存じまする』

『イヤ、さうでない。醉ふては居るが、未だ正體はある。何時もく、難しい役向に、胸を痛めて居る家來共が、偶の遊興に、失望させるでもあるまい』

『それでは、今暫時の、御對手いたしませう』

『さうして呉れ。尙ほ其方に所望がある。例の舞を所望ぢや』

『もう左樣な事はいたしませんでも、宜しうございませう』

『イヤ、さうでない。皆の者が、見たう思ふても居らうから、早く舞へ』

一應は辭退したが、實は、お由良も、自慢の舞踊だから、强て勸められないでも、やつて見たいのだ。齡は幾歲になつても、好きな遊藝に掛けては、誰しも同じ心だ。そこで、お由良は、立つて踊り始めた。齊興は、眼を細くして凝然と、之に見惚れて居た。

六

其夜の酒宴は、お由良の舞踊で、一段落となつた。是れから、お座敷が變つて、笑左衞門はじめ、御寵愛の家來ばかりを集めて、御茶の催しがある。笑左衞門は、思ひ出したやうに、齊興の前へ進んで、手をついた。

『恐れ乍ら申上げまする』

『何ぢや』

『斯樣な席に於いては、如何と心得ましたが、不圖思ひ浮びました故に、申上げて置きまする』

『ウム、何ぢや』

『若殿樣、愈々御歸國とござりまして、その御先觸の次第は、先般申上げてござりまする』

『そりや、承知して居る』

『其儀に付きまして、一應申上げたき儀のござりまする』

『そりや、何ういふ事か』

『若殿樣、此度の御歸國は、如何なる御用向かは存じませぬが、餘りの突然に、驚き入りました。江戸表よりの、情報に依りますれば、先般、御沙汰のござりました、例の異國調査の一條、此儀に付きましての御歸國のやうに、承はり居りまする。小臣、愚察いたしまするに、或は、大殿樣御沙汰の趣旨に對しまして、御不滿の爲ではなからうかとも、心得まする』

齊興は、眉を八の字にして、手を振りながら、

『イヤ、其の事なら、申すな』

『でもございませうが、一應は小臣、聞き込みましたる事だけは、申上げて置きたう存じまする』

『矛は、左樣な事、聽きたうない』

『再度の仰せに悖りまするは、不忠の至りではございますが、強ひて此事だけは、申上げたう存じまする』

『其方も、判らぬ奴ぢやのう。予が、聽きたうない、と申したら、それで宜いては、ないか』

『乍併、御家に關る、一大事とありましては、家來の身分として、縱令、何ういふ仰せはありませうとも、申述ぶべき事は、忍び難うございまする』

『ウム、それまでに申すなら、聽いても置かう。何ういふ事か』

『先般、大殿樣、御沙汰のございました一條は、其後も、江戸表へ、腹心の者を遣はして、密に探りましたる所、全く御沙汰の効も無く、若殿樣は相變らず、卑むべき似非學者共を集めては、日夜の異國調査、是れではならぬと、私共に於きましても、それとなく遠廻しに、御諫言を致しましたが、是れ亦、何の效も無く、まことに遺憾の事に、心得居りました。然るに、此度、急の御歸國は、その儀に就て、大殿樣へ、申上げたいといふやうな事が、第一の御用向とも、承はり居りまする。固より賢明に渡らせられまする、若殿樣の事にございますれば、臣等如き、愚昧の者が、想像し及ばざる所に、深い思召もございませうが、何れにも致せ、事の善惡は、姑く措きまして、左樣な振舞のみ遊ばしては、何れ一度は、公儀の御咎めも蒙る事に、相成りませうと存じまして、唯だ、そればかりが、痛心に堪へませぬ。殊には、正統の御相續人、今日にして、その御心が、改まりませぬ以上は、如何なる變事の生ぜぬ、とも限りませぬ。此儀に付きましては、深く御留意遊ばして、若殿樣御着の上は、是非右樣の御振舞、是れなきやう御沙汰の程を、願ひ上げまする』

『其方が、申したいといふたのは、其事か』

『御意に、ございまする』

『フ、ム』

齊興は、益々澁しい面をして、考へて居る。笑左衞門は、言葉靜かに、

『私共は、數ならぬ身分の者ではございまするが、御家を思ふ一念より、立入つての進言、御意に悖りました所もございますれば、御成敗は、謹んで受けまするが、此儀に就きましては、深く愚昧の心に餘りまして、申上げ奉る次第、不敬の段は、幾重にも御赦しを、願ひ上げまする』

『其方の申す所は、よう相解つた。別に咎め立てを、致すやうな事も無い。唯一言、申して置くが、縱令、如何なる過失があらうとも、齊彬は、當家の相續人である、といふことは、心得て居れ』

『ハツ、恐入りましたる御言葉、それなればこそ、私共に於きましても、是れまでの苦心を、致して居りまする。大切なる御家御相續の御方が、公儀の御禁制を犯して、而も、破牢の大罪を、犯した者さへも、お近付け遊ばすといふ、左樣な事が、公儀の知る所と、なりましたならば、何れ御家の瑕瑾とも相成り、軈て御相續の上にも、御差支を來たさうか、と、そればかりに、胸を痛めまして、斯くは申上げまする次第で、ございまする』

『もう宜い、解つた。其事に就いては、深く聽きたうない。いづれ、齊彬が參らば、事情も相判らう』

それとなく、誘ひを掛けて見たのだが、流石に、齊興は引掛からなかつた。假令、どんな過失があらうとも、當家の相續人である、との一言は、笑左衞門の頭に、ピンと感へたのだ。側で聞いて居る、お由良も、齊興が、斯う言ひ出した以上は、餘り深入りして、言はぬ方が宜い、と思つたから、

『最早や、深更にも相成りましたれば、御寢所へ、渡らせられては如何でございますか』

『ウム、左樣いたさうか』

『それが、宜しうございませう』

そこで、笑左衞門はじめ、其他の者は、御暇が出て、御前を下つた。齊興は、お由良と共に、寢所へ入つた。是れからが又、お由良の手腕を振ふて、齊興を、婉曲に煽り付ける幕に、なるのだ。

齊興は、偉い人ではあつたが、お由良には、全り魅せられて居たのである。それに、笑左衞門が、奸才に長けて居る所から、攻道具を、色々に考へて、表裏から巧く、操縱して行くから、引掛からないやうではあるけれど、何時か知らず、齊興の心は、動いて來る。それが、齊彬排斥の時の、伏線になるのだ。國許では、斯ういふ事が、行はれて居る。其處へ、齊彬が、乘込んで來たのだから、何うしても一騷動、持上がらなければ、治まらぬのは、當然な事であつた。

七

齊彬は、鹿兒島に着いて、殿御へ入ると同時に、父齊興へ、其旨を通じたけれど、どういふ譯か、更に對面は、許されなかつた。昔の大名は、まことに窮屈な、家庭を作つて居たのであるから、父が怒つて、伴に對面をしない、といへば、それを無理に、父の部屋へ、侵して行く、といふ事は、出來なかつたのだ。齊彬の齡は、部屋住の若殿としては、既に老けて居た位で、夫人もあれば、子供もある。而も、其人物は、諸侯の間にも、評判のあつた程の御方であるが、それでも、父の憤怒に會へば、遙々、江戸から歸つて來たにも拘らず、對面する事が出來ない、といふ程に窮屈なものであつた。

齊彬も、江戸を出る時から、今度は、父の憤怒も、大分激しいやうであるから、どうせ普通の事で、その憤怒を、解く事は出來まい、と思つて居たが、兎に角、色々な風說も、耳にして居るし、旁々、父に對面して、充分に辯解したら、その憤怒も解けるであらう、と考へて、やつて來たのであるが、此調子では、當分、それも叶ふまい。斯ういふ時は、餘り執拗くする、と尙更、癇癪の强い父が、愈々、憤怒を昂めて、對面は難しくなるのだから、好い時機を、待つ外は無い、と、心密に決して、慎んで居たのである。

齊彬は、此外に、もう一つの苦痛があつた。それは外でもないが、お由良に對しては、どうしても、頭を下げる事が、出來なかつたのだ。實母の彌姬が、此世を去つてからは、お由良が、正式の奧方の如くなつて、家來からも、お部屋樣と崇められて、その勢威は、實に素晴しいもので、殊に、父齊興の寵愛も深いのであるから、縱令、母と呼ばぬまでも、それらしい待遇をして、上手に扱ふて行けば、斯ういふ場合に、齊興の憤怒を解く、多少の便宜にはならうけれど、齊彬は、正しい心を、有つて居た人であるから、それまでにしても、父の憤怒を解かう、とは思はないのだ。殊に、元來が、大工の娘の上りで、父の枕席に、侍した爲に、その寵愛を受けて居るのだ、といふ事が、どうしても胸にあるので、從つて、輕侮の念こそあれ、少しも之を尊敬する、考へは起らなかつた。

お由良の方でも、齊彬は、島津家の、正統の相續人であるし、評判の高い、悧巧な若殿、而も、上品な中にも、何處となく威權が備はつて居るから、其樣子を見ては、自分の方から、自然と、頭を下げるやうにもなる。それが、口惜しくてならないけれど、どうする事も出來ぬ。心の拗れた、成上り者の嫉妬ほど、恐ろしいものはない。お由良は、啻に自分の子の、普之進を、齊彬に代へよう、といふ考へばかりでなく、斯うした事も、齊彬を嫌ふ、一つの原因になつて、頻りに齊興を唆しては、齊彬を、離間して居たのである。

お由良から見ると、齊彬が、江戸の邸に、居て吳れた方が、よいのだ。眼と鼻の先の、同じ御殿の中に居られては、何分にも都合が惡い。それに、齊彬が、馬鹿な人ならば、差支も無いのだが、眼から鼻へ脫けるやうな、悧巧な齊彬の爲に、氣取られるやうな事があつては、尙更迷惑であるから、何とかして、一日も早く、江戸へ歸らせるやう御方で、あつて見ると、自分等の、豫て計畫して居る、普之進を、之に代へて、相續人にするといふ、企が、若しや、に、爲なければならぬ、といふ事は、齊彬が、歸國する前から、考へて居たのであつた。齊興は、自分の手の中に、

丸めて居るやうなものであるが、どういふ譯か、齊彬の事になると、思つた半分程も、自分の考へた事は行はれない。齊彬の有ること無いこと、巧く筋を作つて讒訴はするが、それを聽いた、齊興は、怒つて居ながらも、齊彬を退けて、普之進を、之に代へる、といふやうな考へには、どうしても、ならないやうな樣子であつた。而も、餘り突込んで、讒訴を激しくすると、唯だ理由も無く、癇癪を起して、反對に、叱り付けられる事が、多いのであつた。

此一事に就いては、お由良も、非常に胸は痛めて居るが、どうする事も出來ないので、時折は、笑左衞門に相談はするが、流石の智慧者も、是れだけは、お由良と同じやうに、唯だ困つたものだ、といふだけの事で、それ以上に、齊興を、動かす工夫は、無かつたのである。其處に、齊興が、普通の殿樣と違つて、偉い所はあつたのだらうが、兎に角、此の暗闘が、幾年か續いて、それが爲に、齊彬が容易に、家督の相續を、爲る事が出來なかつた、といふのは、甚だ殘念な次第であつた。

今日も、齊彬から、齊興へ對して、對面を、願つて出て居る。而も、その使者に見えたのが、山田市郎右衞門と、大久保治右衞門の兩人であつた。大久保は、琉球館の係で、斯うした役目を、勤める身分ではないが、齊彬の、御寵愛の家來として、まだ齊彬が、子供の時分には、側に附いて居た事もあるし、齊興も喜んで、大久保を、齊彬の談話對手に、爲て置いた位であるから、今更にお前は、その使者を、勤める役ではない、と言ふて、叱り付ける事も出來なかつた。殊に、山田は、藩に對して、非常な功勞のあつた人ではあるし、陽明學を、深く修めて、傍ら、和學の造詣もあり、和歌なぞも、なか〳〵巧みに詠む、といふやうな譯で、山田に對しては、齊興も、幾分の安心を以て、何時も對面を、許す事になつて居たのだ。

山田と、大久保の兩人が、齊興へ、拜謁を願出たのに就いては、前回にも、述べて置いた通り、齊彬の歸國に就いて、この兩人は、深く心配する所があつて、一度は、山田が、江戸へ出掛けて、齊彬に、自分等の考へも申上げ、さうして、御親子の間の、調和を計らうとした、事もあつた。所へ、齊彬は歸國する、といふので、江戸へ行くのは止

めたが、齊彬が、鹿兒島へ着いて、御殿へ、はひられるのを待つて、更に拜謁を願出たから、齊彬は、兩人を呼んで、對面する事になつた。其時に、山田と、大久保から、國許の內情を申上げて、

『兎に角、此際、若殿が、何程よいと信じてなさる事でも、大殿樣の、御機嫌に副はぬ事は、一時打棄てゝ、大殿樣の御機嫌を、繕ひ、よく〳〵、大殿樣の、御得心が、參るやうに談合の上で、何事も、なさる方が宜からう、と思ふ。何れそのうちには、大殿樣の、お考へも直つて、若殿が、御當主になられたならば、其時こそ、若殿の、お考へなさる通りの事を、御遠慮なく行はせられる、といふのが、上策であると考へて、實は、其旨を申上げたい爲に、江戸表へ、罷り出るの考へでありました』

と、しふ事を言上したので、齊彬は、兩人の手を把らぬばかりにして、非常に喜ばれた。

『汝達の誠忠は、決して忘れない。予が、一徹の考へから、父の勘氣に觸れるも、厭はず、我意の振舞をしたのは、全く惡かつたから、將來は努めて、汝等の言ふ通りに、致さう。依つて、父上の方は、汝等からも、宜しく取做して呉れ』

と言はれて、兩人は、涙の出る程嬉しかつた。縱令、心の中は、どうあらうとも、數ならぬ身の兩人が、申上げた事に對して、是れまでに、優しいことを、仰せられるといふのは、如何にも有難い、と感じて、それから二人は、一段と、齊彬の爲に盡さう、といふ心は固くなつて、段々、御殿の內情を、間接に探つて見ると、御親子の對面が、一日延びれば、それだけに邪魔が、入る事の甚だしい、といふ事も判つて來たから、そこで、兩人は、急に思ひ立つて、齊興へ、拜謁を願出たのであつた。幸ひにして、それが聽屆けになつたので、齊興の御前へ出た譯である。

齊興は、齊彬が、歸國してから後、まだ一度も、對面はして居ないのだが、それは幾分か、癇癪に觸つて居るから、對面を許さないのであるが、實を言へば、幾ら憎いといつた所で、實子の事であるから、何時か一度は、對面を爲るつもりで、居たに違ひない。乍併、左右に居る者が、一人として、齊彬の事を取做して、對面を急ぐやうに、途を

開いて呉れないから、豈夫に、自分から言ひ出す事もならず、幾分の煩悶はして居たのである。所へ、氣に入りの家來、大久保と、山田が、至急に拜謁をしたい、といふ願ひを出したのだから、渡りに船と喜んで、齊興は、この兩人に、對面を許したのであつた。

山田は、下の者に對しては、極めて柔和な、極く人好きのする方であつたが、少しでも上の人に對しては、極めて嚴格で、一言一句苟もせず、何處までも、嚴然と構へて、話し込む、といふ風の人であつたから、誰にしても、山田には、何となく面會する事を喜ばなかつた。大久保とても、同じやうな氣風の、所謂、剛直の士であつたから、今日の拜謁願ひにも、多少の決心は、有つて來たのである。先づ時候の、挨拶も濟んでから、山田は、徐に口を開いた。

『恐れ乍ら申上げまする。本日は、特に拜謁の儀、願ひ出でまして、早速の御聽屆けを賜り、兩名共、有難く存じまする』

『オー、兩名とも、相變らずで結構ぢやのう』

『ハツ、有難き御言葉……』

『而て、其方共の用向は、何か』

『まことに、恐入りましたる次第ではござりまするが、內密にて、申上げたき儀のござりまして、罷り出でました』

『ウム、宜し』

齊興は、眼光で、それと知らせて、左右の者を、遠ざけてしまつた。

『其方、要求に依つて、人拂ひは致した。用向は、何ういふ事か』

『餘の儀でもござりませぬが、若殿樣、御歸國に相成りまして、未だ御對面も遊ばされず、我等は、家來の身分と致しまして、如何にも痛心に堪へませぬ儀で、ござりまするが、御對面のござりませぬは、如何なる次第か、其邊の儀は、確と相解りませぬと、兎に角、若殿樣、御歸國の上は、速に御對面ありて然るべく、と考へまする。昨今下

民の蔭口も、耳痛く存じますれば、何卒至急に、若殿樣へ、御對面の儀、御沙汰の程、願ひたう存じまする』

『ウム、其事か』

『ハツ』

『宜い。予も、さう思ふて居つたのぢや。昨今、氣分が惡うて、心も進まぬ。それが爲に、遲延になつて居たのぢや。其方共の注意は、予も、惡うは思はぬ。取敢ず對面は、致す事にしやうが、齊彬にも、實は困つたものぢやよ』

『ハツ、御言葉ではござりますれど、公儀御役方は勿論、諸藩の間にも、賢明の聞え高き若殿樣、それが何と致して御意に副ひませぬか。我等には、頓と相分りませぬ』

『世間の評判が、どうあらうとも、予と彼とは、親子の間ぢや。少くも子としては、父へ對する、禮も知らなければならぬ筈ぢや。動もすれば、予に對して、敵對するが如き振舞は、些と違ふて居るやうにも思ふが、其方共は、何と考へるか』

斯う言はれて見ると、山田と、大久保が、すぐに應答が、出來なかつたのは、豈夫に、殿樣に對して、議論も仕掛けられず、といふて、その辯解をすれば、自然と、議論にもなるのだから、自分等の考へは、可成く言ひたくないのだ。乍併、齊興侯が、どういふ考へから、こんな事を、御尋ねになるのか、其心の底は量り兼ねたのである。兩人は、手を突いた儘、急に答が出なかつた。齊興は、もどかしいといふやうな樣子であつたが、

『其方共の考へは、どうあるかと、尋ねて居るのぢや』

『御言葉に從ひまして、御答申上げまする。若殿樣の思召は、我等にも、それと明かに、申上げる事は出來ませぬが、兎に角、御親子の御對面が、疎遠しくなると、いふのが、矢張り大殿樣思召に、左樣の御疑ひが起る、原因かとも存じまする。所詮は、御對面の儀は、屢々遊ばされるに限るかのやうに、心得まする』

流石に、山田は、苦勞した人だけあつて、當意卽妙の答をした。之には、齊興も、少からず心の中に感じた。

『其方共の志は、よう相解つた。明日にもあれ、予の都合に依つて、彼には、對面する事に致さう』

齊興の心が、是までに解けたから、兩人は喜んで、其日は、御前を下つた。それから二日程經つて、齊興と、齊彬の對面は、無事に濟んだので、心ある家來は、蔭乍ら、祝盃を擧げて、互に喜び合ふた。

奸黨の呪詛

一

如何に、意見の調和が悪い、といふても、親子の情は、格別なものであるから、遠く離れて、睨み合つて居ればこそ、段々、その感情は、齟齬しても來るだらうし、又、其間に立つて、離間をする者があれば、益々、不和にもなるだらうが、膝を突き合はせて、度々、顏を見合はすやうになれば、其反感は、自然と、解けて來る。殊に、齊彬は、品格の高い、心の潔白な人であつたから、父の齊興も、其點に就いては自分の子供ながら、感心して居たのである。

山田や大久保が、頻りに心配して、君家を、泰山の安きに置きたい、といふ考から、齊興の、怒りを宥める。一方に於ては、齊彬に、諫言もする、といふやうな譯で、どうか斯うか、親子の間は、美しい事になつたが、それにしても、齊彬を、江戸へ、出して置くのは、不得策と考へて、之に就いて、忠義な家來が、種々と、苦心の末、齊彬も、當分は國詰といふ事になつた。

薩摩と、江戸に別れて、親子が住んで居ればこそ、其間に、離間も起れば、中傷も入るのであるが、斯ういふ工合に、同じ御殿の内に、親子が起臥する、といふ事になれば、流石のお由良派も、殆んど手の下しやうは無く、殊に、齊彬が、立派な人物であつただけに、尙更、之を退けて、普之進を、相續人に直す、といふやうな事は、迚も行はれぬのであつた。茲に於いて、笑左衞門を首め、お由良派の連中が、頻に奸策を運らして、若し、自分等の目的の通り

に、齊彬を、排斥する事が出來なかつたならば、切めての事には、普之進を、齊彬の准養子にして、齊彬の壽命が、絶れた時は、直に普之進を、島津家第三十代の當主にしよう、といふ計畫を、進める事になつた。

乍併、此目的を達しよう、とするのには、どうしても、齊彬の實子を、亡き者にしてしまはなければ、出來ない事であるから、そこで漸々、齊彬の子供へ、手を掛けるやうになつて來た。是は、島津家の騷動ばかりに、限つて居るのでなく、何處の藩の騷動にも、必ず是れと同じ事は、繰返されて居たのだ。現に、加賀、越後、仙臺等の諸家にも、同じやうな騷動があつて、仙臺騷動なぞは、芝居や淨瑠璃にまで、上つた位であるから、誰も知つて居るが、忠義な家來が、一生懸命になつて、殿樣の子供を擁立てようとする、苦心の一斑は、芝居で見る、先代萩の飯炊場でも、よく判る位である。

斯うした事に就いて、理窟を言ふのは野暮なやうだが、自分の子供が可愛いから、藩の當主に直したい、といふ爲に、他の子供を、亡き者にしよう、といふのは、餘りに人情を缺いた事ではあるが、併し、他の子はどうならうとも、自分の子さへ、可愛がれば宜い、といふ、世間に有りふれた、親心から見たならば、斯ういふ手段を取るのも、或は無理でないかも知れない。新聞の記事に、よく現れて來る、繼子窘めといふのが、大名の家にすれば、即ち島津家の騷動と、同じ事になるのだ、

お由良派の陰謀は、遂に恐ろしい事にまで、進んで來たのであるが、齊彬の方でも、充分の注意があるから、なかなか直接に、手を下して、何うするといふ事は、出來なかつた。そこで、よく昔は流行つた、呪詛の法に依つて、子供の成育を妨げ、まだ大きくならない中に、その壽命を絶つてしまはう、といふ手段を、取る事になつた。

薩藩には、怨敵調伏の法が、代々、傳はつて居て、若し、他國と戰端を、開くやうな場合には、必ず出陣の前に當つて、この呪詛の法を以て、敵の鋭氣を挫く、といふ事が、非常に重く用ひられて居た。之を兵道の修法といふて、祕密の中に、島津家に、傳はつて來たものであるが、此時分に、御隠殿番頭を、勤めて居た、牧仲太郎といふ

者が、この兵道の修法を、極めて居たのみならず、實は、牧家の代々に、傳つて來た祕法と、いふやうに、なつて居たのだ。愈々、此方法に依つて、齊彬の子を祈り殺す、といふ事になつたのであるが、まだ其頃には、牧が、お由良派へ、加擔して居なかつたのだから、之を何とかして、懷柔けて味方にしなければならぬ、といふので、笑左衞門等は、一苦勞したのである。

今日のやうな、進んだ時勢になつて、斯ういふ物語を繰返すと、舊弊じみて居るけれど、よく昔の繪草紙なぞにもある、丑の刻詣りといふて、凄い程に、美しい女が、漆黑の髮を、長く垂れて、頭の上には、蠟燭を點し、藁人形と、金槌を持つて、木萱も眠る丑滿の頃に、山奥深く祀られてある、山神の杉の木立の間に、スツと現れて來る所なぞは、餘り好い氣持のものではない。つまり言へば、お由良の一派が、それを行はう、としたのである。又是れは、眞に效能のあるものとしては此一派からは、深い信仰を以て行はれたのであるから、滿更、怪誕妄說として、却ける譯にも、いかないのである。

齊彬の子供が、幾人生れても、片端から、祈り殺してしまはう、といふのだから、實に怖しい事である。併し、女子ならば差支はないが、苟も男子である以上は、何の惜氣もなく、祈り殺して、男子の根絶さへすれば、どうしても准養子といふので、普之進が、相續人になる事は、間違ひない。さうすれば、評判の良い齊彬に、手をつけずとも濟む。親藩の苦情も起らねば、公儀の見込みも、善くなるに決まつて居る。只だ、其方法は、餘程巧みに行らぬと、物議を招くから、此一事についての苦心は深かつた。それも、牧が、味方になれば出來る、といふだけは、充分に見込みがついたので、これからは、牧を引入れる工夫で、毎日のやうに、笑左衞門の邸へ、一味のものは、集つて居るのであつた。

二

名義は、兵道の修法なぞと、立派に附けられて居ても、其實は、人を呪ふ、といふのだから、餘り上品なものではない。從つて、之を行ふ者は、豈夫に、聖人の道を、履む者には出來ないのである。御廣敷番頭といへば、何處の藩に於ても、相當の位置ある者として、他から尊敬される身分であるが、心の拗けた牧は、存外に贅澤な生活をして、何時も、金の爲に苦しんでは、善からぬ事に關係して、屢々重役の耳にも入り、叱言を言はれた事も、幾度かあつた位で、餘り品性の善い人とは、言へなかつた。それが、お由良派の、附込み所で、笑左衞門は、或夜密に、牧を迎ひにやつて、之を說き付けよう、としたのである。

笑左衞門の邸へ、出入をする町人に、牧が、少からぬ負債があつて、一時凌ぎの詐僞から、借りた金であるから、返濟の期日が來ても、返すべき當は無かつたのだ。殊に、其負債に就ては、自分と、相役の者の、謀判までしてあるといふので、それが嚴しい談判になつて、牧も、二三日來、頭を痛めて居た所だ。折柄、笑左衞門の、使者があつたので、早速にやつて來て、笑左衞門に面會した。

笑左衞門は、なか〳〵奸智に、長けた者であるから、さうした弱點に附込んで、人を押へる事は巧みだが、さればとて、其者を呼び付けて置いて、直に其場から、話に取掛かるやうな、そんな間抜けな事はしない。散々御馳走をして、色々な話から、漸次、話を移して行く、といふ處に、一種の秘法があつて、笑左衞門の談合は、實に巧みなものであつた。牧は、笑左衞門の、問ひ落しに引掛かつて、

『さう、何も彼も御承知とあつては、恐縮の外御座らぬ。實は、切羽詰つて、金の工面に困じて、一時の出來心から、右樣の次第、是が表沙汰になれば、御役を被免るは勿論、拙者も、武士として、一分が立たねば、據所なく切腹して、御詫をするの外は、ござらぬ』

言葉强く言ふても、何となく、打ち沈んだ隱を見て、笑左衞門は、頗る同情した。

『苟且にも、武士として、左樣な事をなされた、といふのは、甚だ怪しからぬ事ではあるが、併し、それも苦しさの

餘りで、一時の出來心とすれば、大目に見ぬ、といふ限りもないが、此事を聽き込んだのが、拙者なればこそ宜いが、若し他の者にでも聞き込まれては、全く御身の破滅にもならう。今後は、深く愼んで、左樣な事は、致されぬが宜い』

『左樣仰せられては、何とも申譯もござらぬ。併し、今が今とて、返濟の目的も無く、さればとて、打棄てゝ置けば利に敏き町人共が、なか〳〵に承知もしまいから、何れ此事は、公の沙汰になつて、拙者の武運も、これまでと、此一兩日來は、諦めて居り申す』

『それ程にせずとも、始末は付かうから、マア、拙者に、任せて置きなさい』

性質の惡い借金で、腹を切るなぞは、武士として、實に恥しい事であるから、同じ死ぬにしても、そんな事で死にたくないのは、誰にしても同じ事だ。牧も、流石に、笑左衞門が、情ある一言を、有難く思つた。

『御情厚き、その御言葉に、甘えて縋る、といふのも、意氣地の無い事ではござるが、貴方の御才覺に依つて、之を脫れる途は、ござるまいか』

『そんな事は、何でもない。拙者に、任せて置けば、何とても方法は、立てゝ見よう。マア、悠り構へて居るが、よからう』

其晩の話は、それで終つて、牧は、私邸へ歸つて來た。翌日になると、笑左衞門から、思つたより澤山の金を、屆けて呉れて、一時の急場を、脫れる事は出來た。それからは、笑左衞門に、頭の上らぬ牧、啻にそればかりでなく、其後も、再度の金工面に、笑左衞門を煩はしたことがあり、そんな斯んなで、牧は、笑左衞門の言ふ事には、絕對に背けぬやうになつた。

牧は、自分の不身持から、笑左衞門の、陷穽に陷つて、恩義の枷を、篏められてしまつたのである。其時には、お由良の一派が、恐ろしい陰謀をして居るのを、流石の牧も知らなかつた。どうしても、笑左衞門の爲には、大概な、

苦痛を忍んでも、其命に從はなければならぬ、といふ場合になつてから、笑左衞門が、初めて明した、お由良の陰謀。之れを聽いた時には、牧も驚いたが、段々、笑左衞門に說きつけられて、遂に徒黨の一人となつた上、更に、笑左衞門の紹介で、お由良にも、密に對面する、といふやうな譯で、到頭、自分の家に傳はる、兵道の修法を以て、齊彬の子供を、祈り殺す事を、引受けたのである。

呪詛の事は引受けたが、自分一人では心許ない、と思つて、牧は、頻に仲間の者を求めた。惡い事には與する者が多い世の慣で、其道に掛けては、一通りの修業を積んで居た、日高、石塚の二人が、慾の爲に、眼が眩んで、牧の相談に應じて、手傳ひをする事になつた。齊彬の長男として、生れた菊三郎は、赤子の中に死んでしまつて、その次が澄姫、邦姫の二女であつた。四人目に生れたのが、次男の寬之助である。

弘化二年七月二十八日の出生であるが、先つ以て、是れから祈殺けて行かう、といふ事になつて、牧の一味は、呪詛に掛かつたのであるが、無論のこと、鹿兒島の城下で行れば、人の目に掛かるから、城下から少し離れた、谷山といふ所の山奥深く入つて、正式に、呪詛の法を始めたのである。その效驗が顯れて、寬之助の身に、凶事でも起れば、それこそ、お由良の喜悅は、此の上も無いことであらう。

二

嘉永元年の四月中旬頃から、齊彬の次男寬之助が、何といふ病氣ともつかず、夜になると、非常に熱が昂まつて、樂々眠る事も出來ずに、泣いて居る。側に附いて居る者を首め、御附の醫者も、手當の限りは盡すけれど、少しもその效驗が見えないで、日一日と、其容體は、惡くなるばかりであつた。如何に悧巧な、天禀とは言ひ乍ら、まだ漸く三歲に、なつたばかりの子供であるから、醫師の問ひに對しても、充分に容體を、言ふ事も出來ず、唯だ熱が昂く、苦くなつて來れば泣くばかりで、その後は、疲勞が出るので、恰も死んだ人のやうになつて、寢入つてしまふ。

その發熱して、苦む時刻が、不思議に、一定して居て、夜も、段々更けて、木萱も眠るといふ、丑滿の頃になると『ウーム〳〵』と、いふて、苦しみ出し、身體は、恰で熱の爲に燄つて、火のやうになる。頑是ない子供の事であるから、寢床の中を轉げ廻つて苦む。その可憐しい狀は、見て居られない。醫者も、頻に首を捻つては、藥を服ませるのだが、更に效が無かつた。漸く東の方が、白む頃から、熱も下つて、苦痛も、薄らいで來るので、初めて本人も眠れば、御附の者も、胸を撫でおろす、といふやうな譯で、是が每晩のやうに續くのであるから、迚も堪つたものでない。

普通の男子でさへ、堪へ難い程の苦痛が、日を續けて、斯ういふ工合に續いたならば、大概は、その疲憊に、斃れてしまふ外は、ないのだ。殊に、まだ漸く三歲に、なつたばかりの子供であるから、一層に、その疲憊も酷かつた。齊彬と、奥方の心配は言ふまでもなく、大殿の齊興も、可愛い孫の事であるから、矢張り心配して、幾度か、其病床に就て、容子を見て吳れたが、早や五月に入つてからは、殆んど回復の見込みは無い、といふ事になつて、流石の醫者も、匙を投げてしまつた。

一般の町家に於る、大家の息子さんが、病氣になつたのと違つて、苟くも島津家の若樣、といふのであるから、縱令、その家來であつても、容易に御側に近付いて、御見舞を申上げる事は出來ない。唯だ、その係の者の所へ、御見舞を申して、引退るやうな事に、なつて居るのであつたが、大久保と、山田の兩人は、此病氣に就いても、何となく疑ひを持つやうになつた。如何に、御病氣の爲とは、いひ乍ら、每夜、時刻が定つて、御苦惱がある上に、その御苦惱の治まつて、眠れるやうになる時刻が、矢張り定つて居る、といふのは、何となく疑はしい、といふ考へが起つて、或時、御附の醫師を訪ねて、山田から、其病狀に就いて、質問をして見たが、醫師の答も、甚だ曖昧な事ばかりで殊には病名も判らず、何の爲の發熱が、それさへも、知る事が出來ない、といふ、心細い診斷をして居るのであるから、從つて、其藥の如きも、何んなものを使つて居るのだか、疑ふて見れば、それにも、變な感じが、起つて來るの

だ。

今日は、兩人打揃ふて、齊彬侯に、拜謁を願つて出た。若樣の御病氣で、一方ならぬ心配を、爲て居られる最中ではあるが、この兩人は、自分の爲にも、非常に忠義を盡して呉れる、眞實の武夫である、といふ事を、深く信じて居た、齊彬は、縱令、他の家來には、面會を許さずとも、この兩人には、時を擇ばず、何時も直に、拜謁を許すやうになつて居たのだ。

『オー、兩人打揃ふて、何事か』

『若樣御惱は、如何樣の御病名か、其程も相判らず、醫師共の申立にも、不安心の廉があり、旁々以て、不思議の事ばかりでござりまする。昨今の御病體、如何にござりまするか、臣等兩人、親しく御側に侍いて、縱令一夜なりとも、御介抱申上げたく存じまするが、御聽屆けの儀を、願上げまする』

醫者も、見放して居るし、加持祈禱の效も無い、となつて、今は唯だ、其死を待つばかりの、寬之助に對して、兩人が、斯ういふ願ひを申出たのは、齊彬の身に取つて、何程に嬉しいか判らないが、併し、介抱する人の手は、多過ぎて困る程で、醫者の注意から、その人を限つて、側に附け居る位にして居るのだ。今更に、この兩人が、介抱人になつた所で、その效はあるまい。

『其方共が、寬之助の病氣を憂ひて、左までに心配して呉れる、その志は、嬉しう思ふが、今更に、其方共を煩はして、介抱を託したればとて、その詮はあるまい、と思ふに依つて、其志は受けて置くが、唯だ此上は、天命に待つ外は、あるまいよ』

『ハ、ツ、恐入りましたる仰せ、押して願上げまするは、些と異なやうに、思召しもござりませうが、臣等、赤心を以ちまして、縱令一夜なりとも、御介抱申上げねば臣下たるもの、義務が相濟みませぬ。尙ほお含みまでに申上げまするは、此御病氣に就きましては、些と臣等兩人にも、所存のござりますること故、唯だ一夜だけ、御側に在りますする事を、御許しの儀、切に願ひ上げまする』

といふ、その言葉の中には、何となく意味ありげな、流石に、賢明な齊彬は、さては何か、此病氣に就いて、兩人は、所存があつて來たのだな、と、敏くも察した。

『宜い。それ程に申すことならば、予に、異存は無い。一應係りの者と、醫師にも命じて、許す事に致さう』

『願ひの趣き、御聽屆け下さりまして、有難う存じまする』

是れから、齊彬は、奥方にも、それと知らせる。醫師と、係りの者を呼んで、此旨を申渡したから、外の事と違ふて、齊彬侯からの御聲掛りでは、拒むべき筋合の事ではないのであるから、一同に於ても、兩人の特志は、實に感ずべきものである、といふ旨を、申上げて退がる。そこで、二人は、改めて今宵の、宿直を命ぜられる事になつた。何が故に、この兩人が、强て寬之助の、御介抱を願つて出たか、之には何か仔細が、無ければならぬ筈だ。

四

人を祈つて殺す、といふやうな事が、果して出來るか、何うかは、甚だ疑はしいが、併し、昔は、よくあつた事で今日のやうな時勢になつても、時として、新聞の上には、それと同じやうな記事が、載つて來る事もある。その呪詛が、效を奏して、狙ひ付けた者を殺した、といふ事は、餘り聞かないが、どうかすると、さういふ、古風な事を考へて、憎い敵を殺したい、といふやうな事を、考へる者もある。一生懸命に、思ひ詰めて、是非、彼奴を殺してしまはなければならぬといふ、考へから、神佛に、祈願を籠めて、自分の壽命は縮めても、敵の命を取らなければならぬ、と、一心不亂に、跣參りをして居る者などが、新聞の材料に、なつて來る事があるのは、誰れにしても、よく知つて居る事で、その效能の有る無しは、姑く惜いて、縱令陰にもせよ、こんな事を、祈られるやうな者は、安穩に、身の行末が、治まつて行くべき筈はない、と、誰れにしても、さう思はれるのだから、祈つて居る本人になれば、乾度、

この祈願は、叶ふに違ひないと、其處に、確い信仰の心を繫いで、自分の壽命を、削つてかゝる祈願であるから、餘程、强情な神樣でない限りは、その祈願も、聽く事になるだらう。どんな事が、原因になつて居るにもせよ、自分の壽命を縮めて、他の壽命まで、同時に縮めよう、といふやうな祈願は、まことに淺墓な事ではあるが、さういふ事を祈られる者も、何處かに、それだけの惡い事も、あるのだらうから、愈々、自分が祈られて居る、といふ事を、知つた時は、餘り好い氣持は、爲ないに違ひない。そこで、人間の心は、存外に弱いものであるから、どうかすると、神經病を發して、呪詛の方は利かないでも、自分から、病氣を惹起して、飛んだ事になる場合も、世間に多くあることだ。

學者に聽けば、それは、神經の作用に過ぎぬと、いふやうな事を言つて、胡麻化してしまふけれど、縱令、神經の作用にもせよ、そんな者が、一人でも二人でも、出て來る、といふのが、其處に、矢張り人間の弱點が、現はれて居る譯で、必ずしも人の呪詛に、效驗が無い、とばかりは、言へないのだ。

乍併、島津家の若君、寬之助が、祈られたのは、別に、その祈られて居る若君に、惡い事があるのでもなく、況して、まだ三歲にしか、ならない幼兒の、他に怨みを、買ふべき譯は無いのだから、之を祈る者があつたからとて、その祈願を、直に聽屆ける神樣があれば、それは餘程、無慈悲な神樣であつて、恐らく八百萬神の、仲間入りをして居ない、惡魔に等しい、神樣であらう、と思ふ。

山田と、大久保の兩人は、齊彬侯の許しを得て、今宵は、寬之助君の、宿直をする事になつた。多くの人が、時間を極めて、交代しては宿直をするのであるから、さまで疲勞も、なささうなものだが、それでも一生懸命に、若樣の御身の上大事と、宿直する者は、心配の餘りの、氣疲れも出て、存外に係りの者は、疲れ切つて居る。所へ、新手の兩人が、加はつて來たのであるから、之には一同も力を得た。

『是れは〳〵御兩所には、まことに御若樣千萬、此度の若樣の御儀に就ては、何とも申上げやうも無き仕儀、我等が、

如何に焦つて、御介抱申上げても、更に效も無く、日々の御憔悴方、見る目にも、可憐しう感じて居り申す。今宵は、新手の御兩所が、入代つての御介抱、嘸若君にも、御喜びの事でござらう』

『是れは、御丁寧な御挨拶にて、痛み入る、病氣や藥に就いては、何の分別も持たぬ、我等が、今日に至つて、御介抱申上げたればとて、何の效もござるまいが、唯だ、我等は、至誠を以て、神に祈り、一心に御介抱申上げる迄の事でござれば、貴殿方が、今日まで、御盡し下されたのと、更に變る事はござらぬ、唯だ、貴殿方のお疲れも、嘸かしと、お察し致して、縱令、一夜たりとも、貴殿方に代つて、御介抱申上げ、貴殿方を、暫時にても、御休息させ申さうの考へから、罷り出でました。諸事、不慣の我等にござれば、然るべくお指圖の上、御介抱に、差支の無きやう、お引廻しの程、偏にお願ひ申す』

今迄に、看病して居た、人達から見れば、身分は上でもあるし、人物も一同から尊敬される程に、立派な兩人であつたが、斯かる場合にも、謙遜して、人を反さぬ挨拶には、一同も、感心する外はなかつた。

齊彬侯から、奧方へも、それと通じてあつたので、御介抱の役を、受持つて居た、老女から、醫師へも、一應相談の上、取敢へず兩人を、若君の御枕邊へ呼出して、御容體を拜させる事にした。是れは全く、特別の扱ひで、普通の家來が、御介抱を申付かつて、宿直するにしても、決して斯樣な事は、ないのである。今改めて、老女から、之を許された、兩人は、非常な面目として、早速に、御枕邊へ拜伏して、默々と、その御容體を何へば、今まで聞いて居たよりは、一層に甚い、お憔悴方で、御病氣になる前に、家來を對手にして、遊び戯れて居た時の、寬之助君とは全く相違して、たゞ骨と皮ばかりの、如何にも痛はしい有樣に、なつて居る。それを、默視めた時には、もう御見舞の言葉を申上げる、勇氣も脫けて、兩人は、頭を下げた儘、唯だ涙に暮れる外はなかつた。

五

若君の病室からは、二室程離れた、廣い座敷に、御介抱係りの、宿直の武士が、控へて居るのだ。迚も、回復の見込は無い、といふ程に、激くなつて居る病狀ではあるが、幾分の慾が手傳つて、萬一にも御快氣に、向ふやうな事があるならばと、何を當にするといふのでもなく、唯だ空に、若君の御快方を、祈つて居るのは、山田大久保の兩人だけではなく、宿直をして居る武士は、一同に、それを祈つて居るのだ。宵の間は、濕つぽい中にも、幾分の元氣はあつて、さまでに淋しい、といふ事も感じないが、時刻が、進むに從つて、物淋しくなつて來る、廣い御殿の夜の態は、眼かなものではないが、殊に、若君の御病氣危篤とあつては、殊更に、人の心が、沈んで居るから、その淋しさは、一層であつた、老臣と若侍が、それ〴〵に、席を分つて、廣い一室の中に、控へて居る。

今宵は、山田と、大久保の二人が、殖えたので、上座の方へ、小さい火鉢を備へて、兩人の席は、設けてあつた。山田と大久保は、若君の御容體を拜するまでは、餘程の御軍態といふことは聞いて居たが、左程までの憔悴とは、思つて居なかつたのである、一目見たゞけで、もう回復の見込はない、といふ事だけは、兩人も、諦めは、付けてしまつたが、此上は、御惱の有狀が、どういふ風であるか、といふ事を、見屆けて置きたいと、思つて、控へて居るのだ。老臣の一人が、靜に席を立つて、兩人の前へ來たので、兩人も、膝を向け直して、老臣と相對した。

『今宵は、急の御介抱役、御兩所には、定めてお驚きでもござらうが、若君も、あの御容體では、何とも申上げやうのない次第でござる』

と、いふ中にも、早や、老の眼には、涙が一ぱいになつて居る。

『御容體より拜察するに、恐れ多きこと乍ら、御回復は、たゞ神の冥助を、待つの外はない、と存ず申す。唯だ、御發熱の時刻が、毎夜同じで、而も、その御惱みの普通ならぬ、御樣子と承はつて、如何にも不思議に存じ、實は今宵の御介抱を、御願ひした次第でござりまするが、御發病の時より、御側に、お附き申して居られた、足下の眼に、何か異樣に、感じた事でもござつたならば、何卒お明しを願ひたい』

老臣は、一段と聲を潛めて、

『その事ぢや、實は、手前も、怪く思ふて居る仔細がござるよ』

兩人の膝は、思はず進んだ。

『而て、その怪しう感じたと、言はつしやるは、何ういふ事か、それをお明し下され』

『一應お聽き下さい。最初は御風氣の、稍や念の入つたもの、とのみ思ふて居た中に、その御發熱の有樣が、普通でない。そこで、醫師にも、確く申傳へて、油斷なく御手當は致したのぢやが、どういふ譯か、藥の効能も無く、日を逐ふて、御容體は惡くなるばかりで、殊更に、深更に相成つてからの御惱みは、さも物怪に魘はれるやうにも思はれて、如何にも、奇怪千萬とは存ずれど、我等の力にては、如何とも致方なく、氣のみ焦りて、醫師にも、其旨を申し聽けたが、何がさて御脈を拜して、匙を使ふ外に、何の能も無き醫師の、如何に勵ますも、好い分別は出ず、唯だ不思議々々々とのみ申し居りて、今日に及んだ次第でござるが、拙老の考へに致しても、普通の御病氣とは、心得申さぬ。必ず物怪の祟りと、深く信じては居れど、さればとて、之を明かに、申し立つる程の、證據も無く、唯だ怪しく感ずるのみで、空しく過ごして參つたのぢやが、幸ひに御兩所が、吾等と、同じ樣の考へを以て、御介抱を願ひ出でられた、とあつては、何となく拙老も、百萬の味方を、得たる心地して、是非、此一事だけは、念の爲に申入れて、置きたく存じて、お待受け致した次第でござる』

之を聞いた兩人は、自分等の、想像が、眞に近い、といふ事を、確く思ひ詰めたのである。老臣の物語を聽いても、之といふて確かな證據は、握つて居ないまでも、若君の御病氣は、眞の御病氣でなくして、怪物の祟りのやうに思はれるとの、一言は、輕々しく聽き流す事は出來なかつた。大久保は、老人に向つて、

『其の御見込を、伺つて見れば、我等の推察も、稍それに近く、實は、それ等に就いての、眞僞も極めたく、斯くは我等も、宿直いたすやうに相成つたのでござれば、此上ともに、お氣付きになつた事は、御遠慮なく、お打明けを

願ひたいのぢや』

『そりや、仰せまでもござらぬ。此上とも、尙ほ吾等の氣付きたる事は、一々お打明け申す故、何卒お聽取を願ひたい』

『何分ともに、お願ひ致す』

斯んな問答で、時刻を過ごす中に、御病室の方では、何となく人音が、騷がしくなつて來たので、兩人は、耳を聳てゝ、其狀況を窺ふて居ると、今まで話對手に、なつて居た老臣は、早くも立つて、御病室へ駈着けた。後は、四組餘りの家來が、火鉢を圍ふて、太い息を吐くばかりであつた。暫くすると、彼の、老臣は再び戻つて來て、頻に手招きをするから、山田と大久保は、等しく立上つて、廊下の方へ出た。薄暗い襖の蔭に潛んで、老臣は、兩人の耳に、口を寄せて、何事か、頻に囁くのであつた。

六

眞の病氣で、苦んで居るものを、素人が、透見した所で、何の効も無い事は、極つて居るが、既に其病氣に、疑ひがあつて、物怪に魘はれて居る、といふやうな事を聽いてから、老臣の案内で、御病室の次室へ、密とはひつた兩人は、醫者の考へて居る以外に、深い疑念を以て、御惱の狀態を見るのであるから、何か得る所がなければならぬ筈だ。

若君は、苦しさうに悶えながら、如何にも悲氣な聲を揚げては、唸つて居る。醫師や侍女をはじめ、御乳の人までが、頻に撫擦つて介抱はするが、若君は、今、熱の冒して來る頂上で、悲鳴を揚げては、蒲團の上を、轉輾る。絲のやうに細くなつた、小さい體から出る、力の强さ、左右から介抱する、侍女の手なぞは、拂ひ退けて、醫師が脂のやうな汗を流して、服藥を、お進めするけれど、どうしても服まうとはせず、唸る聲は、段々激しくなるばかりであ

つた。次の室から、其狀態を見て居た、兩人は、坐ても立つても、我慢が出來ない。そこで、山田は、廊下を廻つて障子の外から、

『御附の方へ申上げる。山田市郎右衞門……些と願ひの筋がござる』

と、いふのを聞きつけて、老女の一人は、それへ出て來た。

『オー、山田樣でござりまするか、して御用は……』

『餘の儀でもござらぬが、若樣、御惱の御有樣、お次室より承知いたしたが、御苦惱の御容體が心配でなりませねば拙者と大久保の、兩名、暫時なりとも、御枕邊に居られまするやう、お取計ひを願ひたい』

御介抱の爲に、宿直して居る武士は、萬一の變が、あつた時の用意であるから、斯樣の願出に就ては、拒むべき筋合のものではない。そこで、老女は、

『妾が、承知でござりまする。御遠慮なく、此方へ、お入り下されませ』

『然らば、御免』

と、大久保にも知らせて、兩人は揃ふて、病室へ入つて來た。

枕邊近く、膝を正して、若君が、苦痛に惱む狀態を、熟と見詰めて居ると、その苦しさうな樣子は、傳へ聞いたより甚く、僅に三歲にしかならぬ、幼い子供のやうでもなく、蒲團の上を、悶え苦しみながら、荒狂ふ樣子を見たばかりでも、成る程、此容體では、迚も堪つたものではない。あの纖細い、小さな體で、どうして此後の幾日かを、過すことが出來やう、嗚乎、見るも御痛はしきことである、と、思ひ詰めて來れば、忠義に凝つた兩人は、もう堪らなくなつて、疊に兩手を突いて挫へたが、早や涙に暮れて、何と御手當を申上げる、工夫も付かぬ。

『ウーム〳〵、苦しい』

と、氣味が惡いやうな、聲を出して、泣き叫び乍ら、御附の者の、押へる手を振拂つて、蒲團の上を轉がる。山田は

密と、醫師の袖を引いて、眼で知らせ乍ら、起上つた。醫師も、輕く首肯いて、山田の後から從いて、次の部屋へ下る。大久保は、後に殘つて、御介抱を申上げて居るのだ。

山田は、聲を潜めて、

『御惱の御有樣は、每夜、あの通りでござるか』

『如何にも、左樣でござりまする』

『フ、ム、拙者は、醫藥の事は心得申さず、全く素人でござれば、深い事は心得て居らねど、あの御惱の御有樣は、普通の御病氣から、とも心得ぬが、足下のお考へは、何うでござるか、一應伺ふて、置きたい』

醫師は、顏を顰め乍ら、圓い頭を押へて、

『左樣、御尋ねに預つては、何とも申上げやうもござらねど、實は、御發病の時より、些と疑ひのござつて、他の醫師とも、相談の上、お藥は、差上げて居りましたが、愚老は、今日まで幾たびと、限り無く、多くの病氣も診ましたけれど、あのやうな恐ろしい病氣には、まだ出會ふた事がござらぬ。どう考へても、普通の御病氣とは、思へませぬ』

『而て、御病名は、何と申さるゝか』

『サア、其事でござりまする。御熱氣が激しく、それに連れての御惱み故、無論のこと、熱病とは存ずれど、熱病の種類の中で、何と名付けて宜しいか、其邊は確と相判らぬので、ござりまする』

『然らば、熱病とは判つて居るが、其以上は、確と分らぬ、と申されるのか』

『御意の通りでござりまする』

『左樣な、曖昧な診察では、お藥を差上げるにしても、何を目的に調劑せられるのか、拙者には、其意味が、解り申さぬ』

『御道理のお疑ひでござりまする。併し、御熱病には、違ひないのでござるから、御熱が下りまするやうに、御藥は差上げて居りまする。每夜の事で、御疲勞も激しい故、脾胃を調へる御藥も、每朝差上げてはござるが、更に藥の効能は無く、日々のお苦惱と、お憔悴には、愚老も、頓と恐縮いたして居る次第でござりまする』

『フーム、それまでの御手當を申上げて、尙ほ御惱の治まらぬといふに、就ては、何か、足下の胸に、感ぜられた事でも、ござらぬか』

醫師は、暫く考へて居たが、

『其儀に付きましては、確と申上げられませぬ』

『イヤ、御心配には及ばぬ。それと打明けられぬまでも、斯ういふ不思議な事もあつたといふ、見込だけは、お話し下されても、お差支あるまい、と存ずるが、其邊の事は、如何でござるか』

醫師は、思案に沈んで居る。其態度から察するに、醫師にも、異樣に感じて居ることは、あるらしい。それを言はせやう、と思ふて、花々に責めたけれど、醫師は何事も言はず、唯だ自分等の、御療治が屆かぬ、といふ事を恐縮するばかりで、要領は得なかつた。そのうちに、若君の御惱が、益々激くなつて來たといふので、山田は、醫師と共に、再び御病室へ、はひつて來て、大久保と共に、東の白む頃まで、まんじりともせず、御介抱申上げた。

七

病氣に惱む、若君の苦痛は、言ふまでもないが、それを介抱して居る、忠義な家來の、胸の苦しさは、尙一層の事であらう。漸くに夜が明け放れると、若君の容體は、段々良くなつて來る。容體が良くなる、といふても、それは唯、熱が下つて來た爲に、一夜苦痛に悶えて居た、その疲れが出て、恰て死んだやうになつて、よく寢入る、といふまでの事で、之を每日のやうに、繰返して居る中には、若君の壽命は、盡きてしまふのであらう。さういふ事までも、思

ひ合せて見ると、山田や大久保が、胸中の苦悶は、一通りでなかつた。どう考へて見ても、昨夜の苦惱の狀態は、尋常事でない、といふ感じは、益々深くなるばかりで、それにつけても、どういふ譯で、あのやうな苦痛を、見られるのであるかと、そればかりを考へて、獨り胸を痛めて居るのであつた。

『兎に角、もう一晩、宿直を願ふて、尙ほ探り得られるだけの事は、探つて見たい、といふ考へで、手順を逐ふて、願つて見ると、直に許されたから、正午頃になつて、兩人は、一先づ私邸へ、引揚げて來た。

『何うぢや、大久保、昨夜のあの有樣は、尋常事でない、と思ふが、足下は、何う考へる』

『そりや、拙者とても、同じ考へぢや。何か仔細のある事には違ひない、と思ふが、さればといふて、明かに、是れが原因である、とも言ひ兼ねる。唯だ疑はしいと、思ふだけの事では、如何とも致し樣もない。些と、邪推に過ぎるかも知れぬが、例の御方樣が、豫ての野心を、滿たさうが爲に、其一味の者共と謀つて、若君を亡き者にしようの考へから、若しや、兵道の修法に依つて、若君を呪ふて居るのではあるまいか。どう考へても、拙者には、さうとしか思へぬが、貴殿の考へは、どうかな』

『左樣さ』

と、言つた切り、山田は、暫く考へて居たが、思ひ付いたやうに、膝を打つて、

『ウム、さう言へば、些と思ひ當ることが、ござるぞ』

『エツ、思ひ當る事とは、いかなる儀て、ござるか』

『外の事でもないが、例の兵道の修法を家傳として、少なからぬ知行を、頂戴して居る、牧の事は御承知ぢやらう。彼奴が、此頃の振舞、聊か俯に落ちぬ事もござれば、今宵の宿直を終つた後、お互に力を協せて、彼の行狀に就て、取調べをして見ようてはないか』

『成る程、さう言はれて見れば、牧が、昨今の驕奢增長、殊には月の中に、半分までは、所勞と稱して、御勤務は怠り勝ち、之には何ぞ仔細のある事と、豫て思ふては居たが、深く考へて見れば、足下の言はれる通り、或は彼奴等の所業ではあるまいか、とも思はれる。いづれは、今宵の御勤務を、終つてからの事に致さう』

『それが、宜からう』

そこで、大久保は、山田の邸を出て、自分の邸へ、歸つて來た。

此時分の大久保は、琉球館の係をして居て、相當の位置は、得て居たのだが、藩から貰ふて居る、食祿は、餘り多くないのであつた。殊には、子供も多く有つて、家族の壓累の爲に、其日の活計向は、固より裕では、なかつたが、唯だ身を持する事の、堅固な上に、極めて質素儉約を、旨として居た人であるから、傍から觀る程に、內部の苦しさは、甚くなかつた。さうした中で、育て上げられた、伴の正助は、もう此時分に、二十歲近くに、なつて居て、文武一と通りの修業は、父の慈愛で、修めて居たのである。けれども、家計が裕でないだけに、お入費お構ひなしの、修業は出來なかつたのであるから、從つて、自分等が、思ふやうな師を、求める事は、出來なかつた。同じ町で生れた、西鄕吉之助とは、刎頸斷琴の交際を結んで、朝に夕に、往來出入して居て、何事も、お互に相談し合ふて居たのである。其他に、最も深く交つて居たのが、吉井幸輔であつた。是れが、後の宮內次官、吉井友實である。此人の伯父に當るのが、秩父扇れの時、武士を罷めて、坊主になつてから無參禪師となつて、名僧の名を、今の世にまで遺した、蘆谷の事である。吉之助と、正助の兩人は、恰て兄弟のやうに、睦じく交際うて、毎日のやうに、無參禪師の許へ通つて、敎訓を受けて居たのだ。

吉之助の父は、吉兵衞といふて、是は又、正助の父、治右衞門よりは、遙かに身分の低い、島津家の連枝一門に仕へて、色々な雜用を引受ける、用達といふ役をして居たのである。藩から貰ふ知行は、雀の淚程で、而も、吉兵衞は、子福者といはれて、男女を合はせて、七人の子持であつた。それが爲に、家計の苦しさは、一通りでなかつた。吉之助は、十七歲の時に、鹿兒島から程近き、松山へ入つて獵をした。それが、御留山といふて、禁獵の場所であつた事

に、氣が付かず、一頭の猪を射止めて、歸つて來た。その事が、翌日になつて知れたので、遂に流罪を申渡されてしまつた。漸く赦免の御沙汰を受けて、歸つて來た後に起つたのが、此騒動であつた。

父の吉兵衞が、仕へて居たのは、赤山靱負といふて、島津家の一門で、家老を、勤めて居た人だから、門地の上からいへば、なか〳〵の名家で、而も、一萬石に近い、知行を領して居た、といふ位に、赤山家は、立派な家柄であつた。吉兵衞は、殆んど赤山家の用達のみをして居たのである。赤山が、吉兵衞の正直を見込んで、常に屋敷の用事を、まかせて居たので、伴の吉之助も、屢々、父に伴れられて、赤山家へ出入するうちに、靱負が、吉之助を見込んで、是は必ず、後年に名を成す者になるであらう、と、深くも考へて、吉之助の爲には、何かと世話をして呉れて居たのだ。されば、吉之助の方でも、赤山に對しては、主人なり又恩人として、忠實に仕へて居たのであつた。

正助と、吉之助が、仲の好い所から、正助も、赤山家へ出入して、靱負には、吉之助と同じやうに、可愛がられて居た。然るに、靱負も、若君の御病症に就ては、深く心配して居た一人で、此事に就ては、治右衞門と、市郎左衞門も、幾度か、靱負に會ふて、密々相談した事もあつた。さうした關係から、赤山と、大久保、山田の兩人とは、其身分にこそ、上下の別はあり、役柄の上からいへば、比較にならぬ程の區別はあつたが、君家の爲には、互に隔意なく、膝を交へて相談する、といふ關係に、なつて居たのである。

八

山田に別れて、治右衞門が、自邸へ歸つて來ると、妻の福女と、伴の正助が、先づ出迎へて、昨夜の樣子を尋ねるから、治右衞門は、言葉短に、若君の御容體が、良くない事を物語つた。

『若樣のお悪い、といふ事は、傳へ聞いても居りましたが、それ程までとは存じませんでした。お話の模樣では、御手當も叶はぬやうに存じまするが、お醫師の見込は、何うでございまする』

『サア、それが、まことに心許ないのぢや。病名を尋ねれば、何とも定め難い、と言ふ。普通の病氣とも思へぬが、何か仔細のある事ではないか、と尋ねれば、さういふ樣子はあるが、確とは答が出來ぬ、と言ふばかりで、病氣になつては、屆かぬ事に、なるかも知れぬ』

『何といふ悲しい事でございませう。此上は、神佛の御力に縋つて、御願ひ致すの外は、ございますまい』

『左樣ぢや、其外に、途はあるまいのう』

『今更に、思ひ立ちまするも、遲れた事ではございまするが、妾は、是れから神詣でに、氣根を入れて、若君の御安泰を、祈る考へでございまするが、御許し下さりませうか』

『そりや、好い所へ、氣が付いた。善いも悪いもないから、早速に祈願を籠めて、貰ひたい』

『それでは、左樣いたしませう』

是れから、妻の福女は、身仕度を整へて、神詣でに出掛けた。後は、治右衞門と、正助ばかりで、眞に水入らずの父子が、差向ひになつた。

自分の子ではあるが、その悧巧な性質と、才智を見込んで、自分の智慧に餘つた事は、何時も、相談するやうに、爲て居たのだ。正助は、物心を覺えてより、父が、島津家に對する、忠義の狀は、朝夕に見て居たのであるから、今度の事に就て、父が苦心、又幼い時から、可愛がつて呉れた、山田が、お上への忠節、それは、よく判つて居たのであるから、縱令、父より言付けられずとも、此事に就ての苦心は、父に劣らず爲て居たのである。

『父上』

『何ぢや』

『私は、此頃、不思議に堪へぬ事が、ございまするが、それと打明けて、宜いか悪いか、其邊の事も考へ付かず、今

日まで、躊躇して居りましたが、牧仲太郎の身の上に付きまして、如何にも奇怪千萬の事がございまするぞ』

『エツ、何といふ。牧の身上に就て、奇怪千萬の事があると、申すか』

『左樣でございます』

『フヽム』

治右衞門は、意外な感に打たれた。それは、今の今まで、怪しい奴と、目星を付けて居た、牧の身の上に就て、俥の正助が、奇怪千萬とまで言ふのには、何か、確かな證據を、押へて居るに、違ひない。

『そりや、何ういふことか』

『私が、此の間、吉つアんと兩人で、谷山へ、參りました時に、彼方の友達の申しまするには、近頃になつてから、御城下の牧といふ人が、烏帽子嶽の山奥深く、立入る事が度重なつて、何時も、獵の道具は持たず、何となく山入をしては、二三日經つと、出て來る。別に獲物を、提げて來る、といふのでもないし、如何にも、其樣子が可怪しいので、好奇の者二三が、跡を追けたけれど、途中で失れてしまひ、牧が、何事の爲に、山入をするのか、それを究めた者はないが、之には何か、深い仔細のある事であらうが、御城下の方では、どんな風說が、立つて居るか、といふやうな事を聽かされまして、不思議な事があるものと、思ふて居りましたが、先頃より、若君の御惱に就て、山田の伯父樣と、父上が秘密談、別に立聞きした、といふ譯ではないのですが、自然と、私の耳に入りましたのは、あの人々にも、疑ひが掛かつて、居るやうに思はれますまい、と考へまするが、如何でございますか』

昨夜の宿直に、若君の御惱は、物怪の祟である、と、見當を付けて、歸つて來た、治右衞門の耳には、正助の物語が、狙つた標的を、射止めたやうな、心地がしたのであつた。

隱事は顯れ易い、と、世の諺にもある通り、牧が、若君を呪詛する事に就て、お由良の一派から引受けた、その

呪詛の場所は、谷山の烏帽子嶽と極めて、同じ道の修法に、一廉の妙を得て居る、二三の者を伴ふて、淋廊へは、所勞屆を出して、家の中に、引籠つて居るやうに、見せ掛けては、夜密に、烏帽子嶽へ乘込んで、祭壇を設けて、若君の壽命を縮めようと、呪詛を始めてから、早や一月餘りにもなるのだ。さうした恐ろしい計畫があつて、牧が、山入をする事は、誰一人として、知る者は無かつたのであるが、谷山の誰彼に、その山入を、疑はれたのが因で、噂が高くなり、その評判が、正助の耳に入つた、といふのは、是れも矢張り、天命とでも言ふべきか。惡事の破綻は、總て斯うした所から、來るものである。

治右衞門は、計らずも、正助から聽いた、牧の秘密、此上は、牧の行狀に就て、深い探偵を入れたならば、自分等が、見込んだ通りの惡事が、彼の一身から、判つて來るに違ひない、と、その喜悅は一通りでなかつた。治右衞門は、正助に向つて、

『そりや、宜い事を、聞き出して呉れた。實は、此父も、山田の伯父樣も、同じやうに牧の身の上に、疑ひを有つて居たのぢや。若君の御惱も、それと想像は致して居たが、確とした證據を、握らぬ中は、如何んとも致方が無く、昨夜も、宿直の際に、山田とも、談合した末、牧の行狀に就て、密に探つて見る事に、相談した位ぢやから、汝が、今言ふた評判ばなしは、聞き流しにする事は出來ぬが、尙ほ踏み込んで、詳しい事を、探つて貰ひたい。それに就いて、却て汝のやうな、部屋住の者が、遊山半分に來た、といふ事を口實に、谷山の者を誘ふて、烏帽子嶽へ探偵に入れば、別に疑はれる事もなからう。些と難役ではあらうが、御家の爲ぢや、確り勤めて呉れい』

『父上の仰せが無くも、その評判ばなしが、若君の御病氣に、關係のある事と聽いては、打棄て置く事は出來ませぬ。それでは、是れから直に、谷山へ參りまして、探り得られるだけの事は探つて、直ぐお知らせ致します』

『ウム、どうか左樣して呉れ。併し、吉之助どんも、共に聞いた、といふのでは、汝一人で行くよりは、誘ふて行くが、宜からう』

『左樣なりますれば、私も、氣丈夫でござりまするから、すぐに吉つアんを、誘ふて行く事に致しませう』

『それぢや、左樣してくれ』

治右衞門は、幾何かの小遣錢を與へて、正助を急がす。父の命令に、是れも忠義の爲とあつて、正助は、勇み喜んで、家を飛び出すと、直に吉之助を誘ふて、谷山の方へ、探偵に行く事になつた。

九

齊彬は、父の怒りに觸れて、歸國してから後は、何事も控目に、父の機嫌に、逆らはぬやうにして居たので、齊興との感情は、段々に好くなつて來た。如何に意見の違ひがあつて、不和になつた所で、元來が實の父子であるから、感情が融和されゝば、今までの、思ひ違ひであつた事も、漸次と、判つて來るばかりでなく、多少は、左右の者に、誤られた事も、悟れるのであつた。けれども、斯ういふ風に、讒者の言に、誤られる事があるのは、畢竟する に、自分が、耳順に近い、老人であり乍ら、齊彬に、家督を讓らないのが、その原因をなすのである、といふ事は、未だ氣が付かなかつたのである。齊彬は、品格の高い人であつたから、どういふ事が起つても、それは、自分の位置を覗つて、色々な計畫をする者がある爲だ、といふやうな事は、更に知らなかつたらしく、尋常外れて、悧巧な人であるから、さういふ厭な事情が搦んで、惡い計畫をする者がある、といふ位の事は、想像して出來ぬこともなからうが、左樣な事は、努めて知らぬ顏で、過して居る。其處に、齊彬の偉い所はあつたのだ。

現に、自分の相續人と、なるべき子供が、重い病に罹かつて、日夜の苦悶を見るにつけて、不愍な者だ、といふ情は、人一倍に、深いものはあつたけれど、お由良の一派が、陰て企てゝ居る非望が、原因になつて居るのだ、といふ惡い風評が立つて居るにも不拘、それが、病氣の原因である、といふやうな、邪推は、少しも起さなかつた。只だ可愛い子供の難病を、一日も早く、全快させてやりたいゝと、一心に考へて居るから、毎日のやうに、其病床に就いて、

容體は見に來るが、素人の悲しさには、どうして、苦悶を除いてやる、といふ方法も、考へ付かないのであつた。

醫師や侍女から、一通りの說明を聽いて、寬之助の枕許を離れた、齊彬は、今、次の御部屋へ出て來た。途端に、山田と大久保が、宿直のために、相携へて、出仕した。齊彬侯が、御居でになつて居なれる、と聞いて、急ぎ御次室まで來て、控へて居た。

齊彬は、臣下に對して、慈愛深い御方であつたから、若君の御病氣に付いて、御附の家來が、日夜の看護に、疲れ果てゝ居るのも厭はず、一心不亂に、御介抱申上げて居る、といふ事は、豫て聞いても居るし、斯うして屢々、見舞つて來る時に、其實際も、見て居られるのであるから、病室の次室へ、出た時に、それ等の者を集めて、丁寧な御挨拶があつた。

忠義一途に、凝り固つた家來は、自分の身を忘れて、介抱して居る所へ、斯ういふ事を、されたのだから、有難いのが先に立つて、涙に噎ぶ者さへある位であつた。

『申上げまする。唯今、御次室まで、山田大久保の兩人が、拜謁を願ひ出て居りまするが、如何取計らうて宜しうござりますか、御意を伺ひまする』

『オー、兩名が、參つて居るか』

『御意にござりまする』

『宜し、これへ通せ』

取次は立つて、次室へ行く。間もなく案內されて、出て來た兩人は、御前に控へた。

『市郎右衞門か』

『ハツ』

『治右衞門か』

『ハ、ツ』

『昨夜來、寛之助の病氣に就いて能う親切に、介抱して吳れた。予は、深く喜ぶぞ』

主人から、斯う言はれては、家來として、返すべき言葉も無い。兩人は頭が下るばかりだ。

治右衞門は、稍や膝を進めて、

『乍恐、願ひ上げまする』

『何事か』

『若君、御惱に就きまして、臣等、愚存の程もござりますれば、暫時の間、御人拂ひの儀を、願ひたう存じまする』

齊彬は、左右を顧みて、眼で知らせる。左右に附いて居る家來は、それ〴〵に、別室へ引下つた。後は、山田大久保と、齊彬の差向ひである。

『其方、希望に依つて、人拂ひは致したが、用向は何事か』

『ハ、ツ、恐れ入りまする。實は、若君御惱に就きまして、段々の疑ひ、如何にも普通の御病體とも心得ませず、必ず何等かの秘密も、是れある事と思ひまして、段々と、注意いたしましたる所、意外千萬にも、若君の御壽命を、縮め奉らう、との所存を以て、兵道の修法に依り、若君を呪詛いたす者が、ござりまする。其儀に就きましては、一々一味の人名も、取調べありまする故、其儀を申述べたく、御人拂ひを願ひましたる次第に、ござりまする。さて臣等兩名、力を協せて、今日までに探り得ましたる所は……』

『一寸、待て』

『ハ、ツ』

『意外の沙汰に、予も、聊か思ひ惑ふ。其儀に就いては、更に書面に認めて、送り吳れい。篤と熟讀いたす事に致さう』

『仰せではござりまするが、此場合に於きまして、一應申上げましたる後、更に書面に認め、差上げたう存じまするが御許可下さりませぬか』

『イヤ、許す許さぬの沙汰ではない。斯樣な事は、聽き違ひがあつては、一大事ぢや。兎に角、書面に致して、差出し吳れゝば、その取捨に就ては、予の才覺もある。左樣致し吳れい』

斯う言はれては、押切つて言ふ事もならず、治右衞門は、口を噤んでしまつた。山田も、治右衞門に次いで、言ふべき事もあつたが、終に何事も、いはずに居た。

齊彬の偉い所は、斯ういふ場合にも、現はれて居た。誰にしても、自分の可愛い子供が、惡い家來の爲に、祈られて居り、それが原因になつて、病氣が激くなつた、といふ事を、聽いた以上は、對手の者が言はぬまでも、此方から促して、其始末を言はせて見たい、といふ氣は起るものだ。それを強て、押付けた上に、書面にして出せ、と言ふたのは、齊彬のやうな、偉い人でなければ、忍び得ない事である。今、それを聽かせられても、どう處分を付ける、といふ事も出來ないのであるから、寧そ書面にして出させてから、果して、其言ふ所が本當であるならば、又それに就て、分別の仕樣もあるが、何れにしても、此場合に於いては、一味の者の名前を、明かに聽く事を、好まかつたのである。

兩人の訴を、聽く事になれば、お由良の名も出るに違ひない。左樣なつては、父の名も、出て來る事であるから、兎に角、是は今、聽かぬのが安全である、と、斯う考へて、書面にして出せ、と言ふたのであらう。兩人は、斯うした好機會は、多く無い、と思つて、そこで、一切の事を計いて、是非善惡を、此場で極めてしまはう、と掛かつたのであるが、斯うして抑へられて見れば、主從の相違で、自分の我意を、通す事は出來ないから、據所なく默つてしまつたのである。

一〇

食祿と役柄に、どれだけの相違があらうとも、齊彬の眼から見れば、等しく家來である。治右衞門に許せば、市郎右衞門にも許して、その言ひたい事を、言はせてしまはなければならぬ。それを聽いた所で、今直に、處分をすることも出來ないし、又聽けば聽くで、聽き腹も立つし、延いては、お由良の身にも及ぶ。その擲殺をしたならば、島津家に、面倒な紛爭が起つて、後の始末にも困る。之を要するに、自分だけが、忍んで居れば、無事に治まるのである。といふ考へから、齊彬は、治右衞門の述べんとしたのを、半途で遮つてしまつたのである。手持無沙汰にして、兩人が、控へて居る樣子を見ると、齊彬は、言とを軟げて、

『其方共が、今日までの忠節は、予に於ても、心密かに悅んで居るのぢや、此上ともに、寬之助の身の上に就ては、何分賴み入るぞ』

『恐れ入りましたる仰せ、有難く存じまする』

兩人が御挨拶を申上げた途端に、バタ〳〵といふ激しい、跫音が聞えた。

斯かる場合に、縱令、廊下の端と雖も、跫音暴く、駈けて歩く者の、あるべき筈は無い。それを、駈けて來る者があるのだから、齊彬も、振り返つた。所へ、廊下の障子を開いて、ピタリと兩手を突いた者がある。

『ハツ、唯今、若君の御容體に、御異變が御座りました故、取敢ず申上げまする』

『何と、寬之助の容體が、變つたと申すか』

『御意に、ござりまする』

『そりや、大事ぢや』

と、言ひ乍ら、立上つた齊彬、後から續く、山田に大久保、跫音暴く、病室へ入ると、若君の枕邊を取卷いた、侍女

や醫師は、迂路々々として、只泣くばかりであつたが、齊彬侯の姿が見えると、左右へ、パツと開いた。靜に席に着いた、齊彬は、凝然と、蒲團の上に、横はつて居る、寬之助を見れば、早や命は絕れて、此世の人ではなかつた。流石に、齊彬も、顏を反けて、忍泣きに泣くのであつた。

折柄、急報に依つて、奧方も、駈着けて來られた。是は又、寬之助君の有樣を見ると、抱き上げぬばかりにして、ワツと、聲を揚げて、俯伏した、周圍に居る者も、誰一人として、之を慰め得る者は無く、共に貰ひ泣きをして居る。斯くて、寬之助君は、此世を去られたのである。時に、嘉永元年の五月十日のこと。朝から曇つて居た空は益々雲が重なつて來て、霧のやうな雨が、風に送られて、廊下を濡す程であつた。檐深く出來て居る、奧御殿の一室は何となく薄闇いのであるが、今日は又一段と、陰慘の氣が充滿て、列居る人の心は、滅入るばかりであつた。

軈ては、斯うした悲しい事にもならうかと、早くから諦めて居た人達も、この通報を受けると、今更のやうに驚いて駈着ける。御殿の表裏には非常な混雜を極めた。

お由良の一味にも、此事は、忽ちに傳はつたので、表面には何處までも同じやうに、悲しいやうな顏はして居るが、心の中では、先づ仕濟したり、と、手を拍つて、喜んで居るのであつた。

調所笑左衞門は、三四日來、風邪の氣味で、引籠つて居た。漸く藥の力で、熱も冷め、氣分も、舊に復したから、今日は全快、屆を出さう、と思つて、居た矢先へ、一味の者から、寬之助君が、今亡くなられた、といふ報告があつたので、思はず莞爾と、笑を洩したのは、豫て計つた如く、若君の一人は、先づ斯うして亡ふたのであるから、此上は、まだ乳離れのせぬ、三男の盛之進さへ、亡ふてしまへば、大望の半分は成つた、といふものである。されば、寬之助君の、計音に接しては、笑を洩さずには居られなかつた。所へ、例の牧仲太郎が、訪ねて來た。小亭の一室へ通して、笑左衞門は、先づ牧の手を執つた。

『其許の御修法で、唯今、若君の御壽命も絕れた。先づ第一の希望は果せた、といふものぢやが、これから更に、盛

之進君がある。殊には、奥方が、今姙娠中で、今秋には御分娩にもならう。男子か女子かは判らぬが、若し男子であるならば、矢張り、其許の修法を、待つ外は無いのぢや』

如何に、自分が、權勢を得たいから、とはいへ、斯ういふ殘虐無道な事を、平氣で談合ふといふ、此一事を以つても、笑左衞門が、如何に惡性な奴であるか、といふ事は、思ひ遣られる。牧は、人を殺す爲に、呪詛をする位の奴であるから、笑左衞門が、若君の死を、事も無げに話し乍ら、尙引續いて、盛之進君の事まで、相談を掛けて居る、それを平氣で、聽いて居るのは、言語道斷の曲者である。

『其事に就ては、決して御心配なさるな、縱令、幾人の若君が出生やうとも、拙者が、一々お引受け申して、必ず御壽命は、縮め奉つて御覽に入れる、兵道の修法としての秘術は、其處にござるのぢや。ハツハ、、、、、』

笑左衞門は、之を聽き流すやうにして、自分の室へ入つて、小さい手文庫を、持つて來た。牧は、見るでもなし、見ぬでもなし、ヂロリ〳〵と、手文庫の方に眼を注ぐ。笑左衞門は、軈て、手文庫を開いて、五十兩包みを、二封出した。

『サア、兎に角、祝ひの酒一ぱいぢや、豈夫に、自邸で、飲む譯にも行くまいから、其許が、好きな所で飲んだらよからう。何れ御部屋樣にも申上げて、此度の御褒美は、充分に致す事にさせるが、拙者は、御悔みの爲に、出仕いたさねば相成らぬ、先づ今日は、是れで御免蒙る』

と、言ひ乍ら、立上つた。牧は、金さへ貰へば、用が無いのだから、同じやうに立上つて、

『然らば、これにて、御無禮いたす』

牧は笑左衞門の邸を出て、何處へ行つたか、姿を隱した。笑左衞門は、引續いて邸を出ると、直に御殿へ上り、空空しい御辭を言つて、出もせぬ涙を、紋つて居るのであつた。

一一

齡は、三歲に滿たぬ子供でも、齊彬が當主になれば、從づて、島津家の相續人たるべき、格式を有つて居る、若君の事であるから、その計音が傳はると、藩士の面々は、先を競ふて、御悔の爲に、御殿へ集まつて來た。門前の混雜は非常なものであるが、それに引替へて、城下の町人は、皆戸を閉し、稼業を廢めて、心からの弔意を表するので、その淋しさは一通りでなかつた。

齊興は、頗る强情で、氣の勝つた人ではあつたが、齡老つてから、可愛い孫を、是で二人まで亡くしたのであるから、非常に落膽して、却て齊彬の爲に、慰められるやうな譯で、奥御殿は、恰で火の消えたやうな狀況であつた。其代り、表御殿の方は、葬式の支度やら、通夜の混雜やらで、憂愁の中にも、又賑かであつた。幾ら悲しいから、といふて、朝から晩まで、オイ〳〵泣いて居る譯でもないのだから、それ〴〵の役目に就いて、手違ひも起れば、責任の塗合ひもする。銘々の考へから、詰らぬ事を爭ふて、喧嘩腰に、なる者もあつて、下廻りの役人程、その騷擾が甚いものであつた。

大久保と山田は、若君が、息を引取る間際まで、御側に居た、といふ關係もあり、且つ齊彬の御寵臣でもあつたから、連枝御一門の方々と、膝を交へて、話對手になれる、身分の人が爲すべき、重い役目を申付かつて、御殿の中を彼方此方と、指圖して歩く。それを見て居る、お由良一味の連中は、何となく苦々しく思つて、此兩人が、極めて來た事に就ては、動もすると故障を容れて爭ふ、といふやうな、譯で、何方にも關係のない、公平な藩士から見れば、怪しからぬ事だと、心密かに思ふやうな事も、少からず在つた。

大久保と山田は、負けぬ氣の、强腰の人ではあるが、場合が場合であるから、なるべく控目にして、大概な事は爭はずに、濟まさうとして居た。その穩健な、態度を見ては、誰しも同情をせずには、居られない。今までは、此の兩

人を、さまで重く見て居なかつた、老臣や重役でも、今更のやうに、兩人を信ずるやうになつて、兩人が、極めて來た事には、異存を言はぬやうに、なつてしまつたから、お由良一味の連中も、遂には匙を投げて、唯だ兩人の爲すが儘に、任せる外なかつた。

連枝御一門や、老臣重役が、ズラリと、席を連ねて居る所で、明日の葬儀に就いて、燒香の順序書を作らなければならぬ、といふので、大久保と山田は、自分等の、腹案に成つた、下書を持つて來て、一同の前へ差出して、其批評を求めたのである。亡くなられた、寛之助君の、すぐ次に、盛之進といふ、若君がある。まだ二歳にしか、なつて居なかつたが、兄君の亡くなられた後は、此の御方が、順に直つて、相續人となるべき筈である。兩人の作つた、燒香の順序には、無論のこと、盛之進が、第一の燒香を、勤める事になつて、居るのだ。

お由良一味の、代表とも言ふべき格で、此席へ連つて居るのが、調所笑左衞門であつた。昔を言へば、お茶坊主出身で、極く輕輩から、身を起したのではあるが、さしも紊亂して、手の着けやうの無かつた、島津家の財政を整理したのみならず、美事に、その難關を切拔けて、大殿齊興侯の御覺えが目出度く、家老格に取立てられて、居るのであるから、昔は昔、今は今、といふやうな譯で、譜代の家老も、笑左衞門の前には、幾分の遠慮をしなければならぬ、といふやうな事に、なつて居たのだ。

笑左衞門の手に、其順序書が廻つて來ると、瞥と見て、直に次へ、廻して了つた。上の方から、順に廻つて來た書付であるから、縱令、異存の有無に拘らず、もう少し、鄭寧に見ればよいものを、無造作に、次へ廻した。其の態度が、如何にも憎々しかつたので、遙かに下座で、之を見て居た、山田と大久保は、顏を見合はせて、苦笑ひをした。その順序書が、一順廻つて、一番上席の人の手に、戻つて來てから、此通り認めてよいか、惡いかといふ事になると、

『唯今、御燒香の順序書を、拜見いたしたる所、盛之進樣、第一の順位になつて居らるゝが、こりや、御血統から申せば、斯うならでは叶はぬが、年併、まだ當年二歳に、お成り遊ばしたばかりの御方を、斯樣な御役に當てる、といふのは、如何にも痛はしい儀と、考へるに依つて、御一門の周防樣を、第一位として、それより以下は、それに御認めに、なつた通り行はせられたら、如何でござる』

と、言葉巧みに、盛之進に、燒香させる事を避けて、島津周防に、その御役を當てようとしたのだ。

何故、斯ういふ事を、笑左衞門が、言ひ出したか、といふに、燒香の御役から、相續の事が決まる、といふ次第ではないけれど、此場合に、島津周防をして、燒香させて置けば、他日、相續爭ひをする時分の、口實にはなるのだ。

今、周防が、盛之進に、代つて燒香したから、それで直ぐに、相續の爭ひが出來る、といふ次第ではないが、先づ斯うして、他日の伏線を、張つて置けば、苦情を起す材料には、なるのである。此の周防といふ御方が、卽ち普之進のことで、後の島津久光侯である。

笑左衞門に、さうした計畫がある、といふ事には、氣の注かない連枝一門の方々は、成る程、考へて見れば、赤子も同樣な、盛之進をして、燒香をさせた所が、詮もない事であるから、是れは、叔父に當る、周防殿をして、燒香の代理を、させて置くのも、却て宜からう、といふやうな、考へになつて、左まで、笑左衞門の言ふ事には、疑ひも置かず、將に其事が決らう、とし掛けた。今まで、默つて聽いて居た、山田と大久保は、早くも、笑左衞門の胸中を見拔いて、こりや、此儘に棄てゝ置いては、他日の爲に宜しくない、と考へたから、そこで、グツと席を進んで、先づ大久保が、

『暫く御待ち下され。唯今の調所殿、御言葉に對して、拙者の意に落ちざる所もござりますれば、一應、愚存の在る所を、申述べたく心得ます』

平生は、身分の違ひはあつても、今日は、大久保も、此葬儀に就て、最も重い役をして居るのであるから、豈夫に笑左衞門が一喝して、その發言を止むる事も、ならなかつたので、凄い目を、ギヨロリと、させ乍ら、大久保の方を

凝と見詰めて居た。

一二

葬儀係の主任ともいふべき、治右衛門が發言するのだから、御一門と雖も、それはならぬ、とは言へないのだが、殊に、折角極めた燒香の順序書に、笑左衛門が、故障を入れたのであるから、之に對しては、係りの者として、一應の辯解は、是非なければならぬ筈である。そこで、治右衛門をして、その意見を述べさせる事になつた。

『唯今の調所殿の御意見に基けば、盛之進樣、御幼少に渡らせられる故、御一門の周防樣を以て、燥香御名代と仰せられましたが、それや少々、道違ひの仰せか、と心得まする。何故と申すに、元來、斯樣な事に就ては、昔からの習慣、といふものがございまする。若君御逝去の後は、順に直つて、御當主と相成るべき、御身柄の御方が先づ、第一に、御燒香を遊ばす、といふのが、諸家樣、何方に於いても、同じ事のやうに心得申す。成る程、盛之進樣、御幼少には相違なければ、お側に仕ふる者、若くは御一門中より、然るべき御方を選んで、御輔佐申上げますれば御燒香には、何の差支も無きやうに存じまする。周防樣が、盛之進樣の御輔佐として、御勤め遊ばすならば格別のこと、盛之進樣を、全く蔭にして、周防樣が、御燒香遊ばす、といふのでは、正しく違法と心得申す。此儀に就ては、我等兩名、御葬儀の御係を、申受けて居りまする以上、飽までも御拒み申す考へに、ござりまする』

と、確り言ふて、凝と、笑左衛門の方を睨んだ。何處までも、鐵面皮しく、出來上つて居る、笑左衛門は、空嘯いて一向に取合はうともしない。山田は、大久保に代つて、

『唯今、相役の治右衛門より、申述べました通り、拙者の考へも同樣にござりまするが、尙ほ調所殿に於かれましては、御異存のござりまするか、念の爲に、御伺ひ申す』

と、詰寄られて見れて、笑左衛門も、默つては居られない。

『御兩所の仰せは、一應御道理のやうにも存ずるが、盛之進樣、御幼少に渡らせられる故、周防樣が、是に代つて、御燒香を遊ばす、といふ事は、別に違法とも心得ぬ。殊には、盛之進樣には、叔父君に渡らせられるのみならず、亡き若君にも、亦叔父君であつて見れば、其處に、何の區別がござらう。唯一時の御都合上、左樣に致しても差支ない、と存じたればこそ、斯樣には申した次第ぢや』

『イヤ、其儀は相成りますまい。何故かと申しまするに、盛之進樣、御燒香の御役、勤まり兼ねる、といふ場合なれば、格別のこと、左右の者が、御輔佐申上ぐれば、別に差支もなきに、强ひて周防樣を、御燒香の御一位に、お進め申す、といふのは、他に深き御所存があれば格別、左樣でなき限りは、此順序書通り、御同意下されては、如何でござるか、それ共に、尙ほ其御考へを押し通さなければならぬ、といふ御意見もあらば、念の爲に、伺ひ置きませう』

山田も、流石に癪に觸つたものか、笑左衛門の急所を、ギユツと押へて、詰め寄つた。之には、笑左衛門も、强ひて爭ふ程の勇氣はなかつたものか、傍を向いて、默つて居た。如何に智慧があつて、辯才の利く人にもせよ、道理の無い事を、押し通さうとしても、對手が、然るべき人であつたならば、それは難しいのだ。最前から、双方の爭ひを、聞いて居た、御側役の伊集院平が、堪り兼ねて、

『アイヤ、山田氏、暫く御控へなさい。足下の申す所に、道理があるとしても、重役に對しては、相當の禮を盡すべきものでござるぞ。足下の考へを、申述ぶるは御隨意であるが、喧嘩腰の議論仕掛けは、重役に對して、御無禮でござらう』

頭から、押へ付けるやうに、伊集院が、ビシヤリ、一本參ると、山田は、稍や顏の色を變へて、

『こりや怪しからぬ。我等は、今日の葬儀に就て、御藩主よりの御沙汰を蒙り居れば、此御役目に就ての申開きは、縱令、御連枝御一門の御方々と雖も、決して御遠慮を、申す譯には相成らぬ。況して、調所氏は、我等が定めたる

御燒香の御順位を、理由なく繰變へよう、といふ、その疎漏の御訂正に對しては、飽迄も爭はなければならぬのでござる。改めて、伊集院殿に、御尋ね申すが、足下は、冠婚葬祭に就ての典禮、一と通りは御承知でござるか。若し御承知である、と仰せられるならば、些と御尋ね申して置く事もござるが、確と御返事を承はりたい』

平生から、大嫌ひな伊集院が、要らざる所に口出しをして、而も、齊興侯と、お由良の寵を恃んで、人も無げなる差出口には、餘り他と爭ふ事を好まぬ、山田も、腹に据ゑ兼ねたので、些と手嚴しかつたかも知れないが、冠婚葬祭の典禮を、心得て居るか、とまで、露骨に、突込んで行つたので、伊集院も、山田の爲人は、よく知つて居るから、迂濶り答辯すれば、失言を捉まつて、上げも下げも、ならなくなるまで、遣付けられる事は、判つて居るのであるから、唯だ逡巡して、明瞭りした答へをせずに居る。それを眺めて、他の連中が、先づ今日の事は山田と大久保の兩名が、御殿の御沙汰に依つて、當の御役に、なつて居るのだから、餘り他から、口出しを致しては宜しくあるまい、といふやうな事を、言ひ出す者もあつて、遂に燒香の順序は、兩人が、極めた通りで宜しい、といふ事になつた。折角計つた、計畫の裏を搔かれて、笑左衛門は、苦蟲を嚙み潰したやうな、顏をして居る。伊集院は、要らざる差出口に、恥を搔いて、屁古垂れてしまつた。

一三

善い事は、なか〳〵人に傳へられないが、惡い事は、直ぐ廣まるものである。燒香の順序に就ての爭論は、すぐに各部屋々々へ、知れ渡つた。相談が濟んで、山田や大久保が、控室へ、歸つて來た時には、もう知らぬ人は、無い位であつた。從つて、調所や、伊集院の顏を見て、輕蔑笑ひをする者もあつた位で、流石の調所も、何となく具合が惡いから、自分の控室へは着かずして、何處ともなく、姿を消してしまつた。

何事につけても、半間な癖に、口ぐしい伊集院は、今、自分の控席へ、入つて來て、一息吐いた所へ、相良市郎兵

衛と、同苗宗右衛門の兩人が、入つて來た。

『これは、伊集院。どうぢや、今日こそは、閉口したらうな』

と、唐突に言はれて、伊集院は、眼を圓くし乍ら、

『閉口したとは、何事か』

『惚けなさるな。今日は、燒香の順位爭ひで、足下が、山田の爲に、手痛く極付けられた、といふ事は、もう御殿一ぱいに、その評判が擴まつて、何處へ行つても、足下の惡評ばかりぢや。ハツハ、、、、、』

人の居ない所で、こつそり言ふのと違つて、大勢集まつて居る、控席で、大聲揚げて、斯う言はれては、伊集院も、默つて居られない。

『こりや、怪しからぬ。足下は、全體、どうして其事を、知つて居られるか。左樣な、大切な席へ、臨む事の出來ぬ身分で、豈夫に、立聞きをしたのでは、ござるまいな』

『足下は、妙な事をいはつしやるな。薩摩の武士に、評議の立聞きや、他の內秘事を訐いて、喜ぶ者がござるかな』

伊集院の語氣が、癪にさはつたから、市郎兵衛も、嘲弄半分に皮肉つたのだ。所が、伊集院も、なか〳〵負けてはゐない。

『其席へ、連なる事の出來ぬ者が、どうして、評議の模樣を御承知か。それが、第一に可怪しいではござらぬか。他の噂や、下司下郎の寢言を、眞に受けて、騷ぎ廻る者は、武士の風上にも、置けぬ人物ぢや。ハツハ、、、、、』

と、先に嗤はれたから、今度は、此方から嗤ひかへした。斯うなつては、市郎兵衛も、後へは退かぬ。

『こりや、面白いぞ。拙者が、武士の風上に、置けぬ代物なら、足下は、全體どうなるで、ござらうか。今改めて御尋ね申すが、足下は、冠婚葬祭の典禮を御承知か。それを御承知ならば、念の爲に、伺ひたい事が御座る。どうぢや。答が出來るか』

山田に極付けられた、文句を其儘、口調も違はず、市郎兵衛に繰返されたから、伊集院は、我慢が出來なくなつた。

『冠婚葬祭の典禮くらゐは、心得て居る』

『そりや、不思議ぢや。足下のやうに、唯だ上に詔ひ、下に驕る事のみ、心得て居る武士が、左樣な事を、心得て居やうとは思はなかつたが、それ程に、よく心得て居るならば、何故、あの際に於て、心得て居ると、明り御答はなかつたのか』

『さては、窃聞きをし居つたな』

『窃聞きとは何か。怪しからぬ事を、いはつしやる。市郎兵衛は、生來て、秘密事は嫌ひでござる。況して、素性も知れぬ女の、湯捲の蔭に隱れて、出世を計るやうな、卑しい者とは、大いに違ひ申す』

初めは、戯談半分の、冷評とばかり、思つて居た、伊集院も、是れまでに罵詈をされては、武士の面目が立たぬ。思はず拳を握つて、片膝を立て直した。

『何と、いはつしやる。女の湯捲の蔭に隱れて、とは、そりや、何事でござるか』

『愈々以て、面白くなつて來たな。言はれて居る、足下が、何の事か判らぬ、といふのは、餘りにお迂濶ことではござらぬか。些と、自分の今日までの事を、考へて見たら、直に判らう。全體、武士ともあるべき者が、何の必要あつて、態々、京都へ使者を立てゝ、同じ型の人形を、二個まで求められたか。而て、其人形の行先は、何處でござつた。明かに、此場に於いて、申開きをして見なさい』

と、膝を詰寄せて、詰問する。此一言には、伊集院も驚いて、顏の色は但蒼になり、身を慄はして、市郎兵衛に、飛掛からうとした。途端に、最前から、市郎兵衛と列んで、樣子を見て居た、宗右衛門が、突如立上ると、

『己れッ』

と、言ひ樣、今飛掛からうとした、伊集院の肩先に、手を掛けて、グツと押した。機を食つた、伊集院は、ドシンと

尻餅を搗いて、仰向に倒れた。

『こりや、怪しからぬ』

と、起上つて來るのを、市郎兵衛が乘掛かつて、ゴツン〳〵と、横面を打つた。ワツと聲を揚げて、一同が立上る。此無禮を加へられては、如何に伊集院でも、我慢は出來ぬ。血相變へて、身構へするのを、大勢が、寄つて集つて、マア〳〵と、左右へ引分けた。市郎兵衛と、宗右衛門は、他が仲裁するのを機會に、次の部屋へ退いた。

若君が亡くなられた、御葬儀の仕度をする最中に、斯ういふ騷動が起つて、無事に濟む、道理は無い。重役や老臣の、耳にもはひつたから、そこで、双方を呼付けて、段々調べに及ぶと、相良の方では、少しも隱さず、事の始末を申述べたが、流石に、伊集院の方では、何となく工合が、惡い事がある、と見えて、事を穏便に、濟まさうと計る。殿つた方は、何處までも威張つて居て、殿られた方は、事を穏便に濟まさう、といふのだから、餘程變なものだ。嘘香の順位の事といひ、又此の騷動といひ、御殿の中は、何處へ行つても、此二つの話で、其日は持ち切りであつた。

一四

相良兄弟が、何故、滿座の中で、伊集院を辱しめたか、といふに、之には別に、深い仔細も無いのだが、平生から伊集院のする事に、不快を感じて居た、兩人は、何時か機會があつたら、辱しめてやらう、と、實は、其機會を、待つて居たのだ。折柄、嘘香の順位爭ひより、山田に一喝されて、返す言葉も無く、屁古垂れたことを聞いたから、得たり賢しで、嘲弄半分に、皮肉な事を、言ふた。それに引掛かつて、伊集院が、喧嘩腰になつたから、そこで突倒して、張付けるまでの活劇を、演じたのであつた。

けれども、伊集院を、窘め付けた、言葉の中に、京都へ、同じ人形を、二個買ひにやつた、とか、其人形の處分は何うしたか、といふやうな事を、聞いて居た者は、左までに深い、仔細があるとも思はず、唯だ武士らしくもない、

殊更に、京都へ買ひにやつた、といふのは、つまり伊集院が、平生から、お由良の一味であるから、恐らく御部屋樣の御機嫌を取る爲に、した事に違ひないが、それまでにして詔はずとも、よからう位に、思つて居たのだ。所が、之を聞いた、山田と大久保は、どうしても、市郎兵衛の言ふた事を、聞き流しには出來なかつた。

葬儀の事は、滯りなく濟んで、初七日の御法事も、終つた。そこで、山田と大久保は、齊彬侯から、有難い御言葉が下り、三四日は、自邸へ、引籠つて靜養いたせ、と、優しい御沙汰まで受けたので、兩人は、武士の冥加、身に餘つて、御前を下り、幾分かの疲れはあるが、今、それを思ふて居る場合でなく、今日は、大久保の家に、山田が、連立つて來て、密々話の相談最中である。

『何うぢや、大久保、御葬式當日の伊集院と、相良兄弟の爭論は、足下は、何と聞いたか』

『ウム、市郎兵衛が、面白い事を、言ふた。あの人形二個の一條は、聞き棄てには、ならぬぞ』

『その事ぢや、拙者も、その人形にこそ不審がある、と思ふて、直にも市郎兵衛に、聽いて見たい、とは思ふたが、あの場所柄、遠慮して居たのぢやが、その道の事は深く知らねど、此頃も、或る書物を、讀み流した時に、確かに覺えて居る一節は、凡そ人を呪詛するには、その本人に、似通ふた人形を、床下に塡めて祈るものぢや、といふ事が、書いてあつた。態々、京都まで、人形を購求めに遣した、といふのが、伊集院であつて見れば、お由良一味の帷幄の一人、無論、其處には仔細もあらう。こりや、市郎兵衛を招いて、尙深く探つて見たら、どうぢやらうか』

『それが、專一ぢや』

是れから、すぐに書面を認めて、市郎兵衛方へ、使者を走らせた。暫時すると、使者は、歸つて來た。

『御返事は、どうぢやつた』

『相良藤方へ、參りましたる所、先刻、御殿より閉門の御沙汰が下つて、唯今では、內外の音信も、叶はぬとの事でござりました』

『エツ、何と申す。相良が、閉門ぢや』

『ヘイ』

『こりや驚いた。何うぢや、山田、お由良一味の奴輩が、疾くも手を廻して、秘密の漏れるを、防ぐ爲に、相良兄弟を讒訴して、遂々閉門とは、實に怪しからぬ事ぢや。折角聞き出した、秘密の一端を、是れから巧く繰つて、物にしようとした矢先に、相良兄弟の閉門、もう斯うなつては、それも、賴みにはならぬ』

と、兩人は落膽したが、乍併、市郎兵衛が、多くの人の居る所で言ふた、人形の一條は、如何に打消さうとしても、それは出來ない事である。さればとて、此儘打棄て置いたならば、相良兄弟の生命は危い。せめての事に、生命だけでも救つてやらなければならぬ、と、兩人は、又々相談に耽つたが、其日は、疲もあるから、骨休みをして、何事も、翌日の事にしよう、となつて、山田は、自邸へ歸つた。

谷山の烏帽子嶽へ、探偵に行つた、正助と吉之助が、歸つて來たのは、二三日前であつたが、治右衛門は、御葬儀の事で、御殿へ上つた切り、自邸へ歸らないから、書面を以て、概略の報告は、爲て置いたれど、外へ洩れる虞があるから、餘り詳しい事は書いてなかつた。そこで、山田の歸つた後へ、兩人を呼んで、治右衛門は、探つて來た大略を、聽く事になつた。

兩人は、治右衛門に申付けられて、烏帽子嶽の山奥、深く入つたけれど、何の手掛りもなく、空しく谷山へ、引返して來たが、如何にも、この探偵の役を、果さぬのは殘念だ、といふので、何か材料が、見付かりさうなものだ、と、尙ほ一兩日、谷山へ、滯留る事になつて、ひそかに、秘密を探つて居ると、計らずも、藩士の日高三郎といふ者に出會つた。今頃に、日高が、此の邊りを、彷徨いて居る筈はない。之には、何か仔細があらう、と、日高の方で、氣が付かずに、居たのを幸ひに、兩人は、見え隱れに、日高の跡を追ける事にした。日高は、某家に入つて、すつかり服

裝を改めて、足裝束も嚴重に、一本の息杖を突きながら、烏帽子嶽を、指して行くのであつた。その樣子が、如何も不思議である、と思つたから、兩人も、充分に身仕度をして、跡を追けた。

日高といふ奴は、牧仲太郎の同類で、兵道の修法に就ては、相當に覺えのある所から、牧に說かれて、仲間に入り、若君を呪詛する、手傳ひをして居たのであつた。吉之助と正助が、それに就て、秘密を探る爲に、谷山へ來て居る、といふ事は、神ならぬ身の、少しも知らずに、迂濶りやつて來たのであるが、これから兩人は、日高を見遁さぬやうに、遠見隱れに追いて、烏帽子嶽の山深く、入つて來た。

一五

烏帽子嶽は、里に近く、餘り奧深い山ではないが、存外に、樹木が生茂つて居て、山奧へ深く入ると、全く人跡の途絕えて、晝尙ほ物凄いところから、誰一人として、其の奧を、究めた者はなかつた。何を祀つたものか判らないが、俗にいふ、山神の祠が一つあつて、年に一度の山開きには、里の人も、大勢の仲間をたよりに、其處までは行く事はあるが、それから奧へ、踏込んで行く者は、絕えて無かつたのである。

牧の一味が、特に此山を選んだのも、さういふ事情が、あつた爲で、萬一、里の人が、紛れ込んで來ても、大概は山神の祠まで位であるから、更に奧深く入つて、其處に、形式ばかりの祭壇を設けて、呪詛を掛けて居たのだ。それが幸ひに適中して、若君の命は、旦夕に迫つて來た。茲に於いて、牧は、日高に命じて、更に最後の呪詛を、させる爲に、山入をさせたのであるが計らずも、正助と吉之助に、其姿を見付けられたのは、これが世に謂ふ、天網恢々疎にして洩さずで、惡い事は、何程秘密にしても、何時か見付け出されるやうに、なつて居るのだ。

朝から、曇つて居た天は、正午頃から、一層に雲が重つて來て、恰で黑い幕を、おろしたやうに、眞暗になつて來た。烈しく吹き出した風は、梢を搖ふて、其音は物凄いまでに、轟々と鳴り出した。その內に、ポツリ〳〵と、降出

した雨は、忽ちに車軸を流すばかりの、大降りになつて、雨の用意をして來なかつた兩人は、非常に難儀を極めたが嚴格な武門に人と成つて、幼い時から、父や師匠の仕込みが嚴しかつたので、かゝる場合にも、更に怯まず、益々勇氣を出して、日高の跡を、追けて行く。

追けられて居る、日高は、そんな事とは知らず、平氣で、山を登つて行くのだ。度々來て、路も、よく判つて居るし、足場の惡い所も、充分に呑込んで居るから、縱令、周圍は暗くなつて、雨に難儀はしても、路を誤るやうな事はない。跡から追いて行く、兩人は、初めて登る山の、狀況も判らず、前に兩人で、來た時は、何處といふ目的も無く自分の思ふに任せて、歩き廻つたのであるから、左までに苦勞とも思はなかつたが、今度は、目的にして居る、日高を見遁すまい、としての事であるから、却て疲れも甚く、殊には、天氣の工合で、周圍が暗くなつてしまつたから、餘り遠く離れゝば、其姿を見失つてしまふ。それを見失ふまいと、思ふて近付けば、日高に悟られると、いふ虞がある。その氣苦勞をし乍ら、雨を冒して、追いて行く、嶮阻な山路に、兩人の苦勞は、一通りでなかつた。彼れ是れするうちに、到頭、日高の姿を、見失つてしまつた。

固より見分けの付く路がある、といふのでなく、日高は、目覺えのある、立木や、岩角の間を、這ふやうにして行く。それを追けて來て、見失ふたのであるから、何處を、どうして搜したら、よいか。兩人には、その見當が、定かなくなつた。

『吉つアん』

『ウム』

『殘念ぢやのう。遂々、見失ふてしまつたわい』

『左樣ぢやのう。彼奴の足の疾い事は、實に非常かもんぢや』

『折角、此處まで來て、見遁してしまふては、自邸へ歸つて、話も出來ぬ。今一層、勇氣を振ふて、搜して見ようで

は、ないか』

『そりや、固よりぢや。サア行かう』

それから、兩人は、一層の勇を、振ひ起して、一生懸命になつて、搜し廻つたけれど、遂に見失つたばかりでなく自分が、歸る路すらも、判らなくなつてしまつた。

日は、全く暮れて、雨は、愈々激しく、降り出して來た。一寸先は暗の、文目も分かぬ山の中、流石に、氣も根も盡き果てた。兩人は落膽して、大きな松の樹の根方に、ドツカと腰を下して、暫時は無言で、太い息を、吐いて居たが、

『正助どん、困つた事に、なり居つたのう』

『ウーム』

と、言つた切り、正助は、何の答もない。吉之助は、

『是れまでにして、見失ふたのぢやから、致方は無い。此上は、懲じひ歩き出して、路に迷ふて苦しむよりは、寧そ夜の明けるまで、此處に息んで居る事にしたら、どうぢや』

『それも、左樣ぢやのう』

大膽な兩人は、遂々捨鉢になつて、雨に濡れ乍ら、此淋しい山の中に、一夜を明す事になつた。

拂曉近くなると、雨は止み、雲も切れて、東の方は、明るくなつて來た。斯ういふ場合の野宿であるから、無論の こと、樂々、眠る事は出來ず、疲勞が、出て來たので、兩人は思はず、トロ〳〵と寢入つた。そのうちに、正助が、不圖、目を醒して、周圍を見廻して居ると、人の來る氣配がするから、密と、吉之助を、搖り起した。

『オー、正助どんか』

『ソツ、誰か來るやうぢやから、靜かにせい』

『フ、ム、例の奴では、ないか』

『左樣かも知れぬ』

兩人は暫時、無言で、息を殺し乍ら、ぢつと、聽き耳を引立てると、成る程、正助の言ふ通り、誰か來るやうな、物音がする。そこで、兩人は、大地にピツタリ俯伏して、その跫音の近付くのを、窮つて居た。兩人の一心が、天に通じたものか、今、此處へやつて來たのは、昨夜見遁した、日高三郎であつた。

大雨を冒して、物凄い山中に、呪詛の祈禱をして、一夜を明かした、日高は、夜明けを待つて、下山する途中である。豈夫に、正助と吉之助が、途中で待伏をして居るとは、思はなかつた。昨夜から、跡を追けられて居た事も、無論、知らないのであるから、それに就ての警戒は、爲て居なかつた。路なき所に、路を求めて、樹木の枝を拂ひ、丈と繁れる草を踏拉いて、漸く此處まで、やつて來たが、日高は、ひどく疲れたので、ホツと一息入れて、休息をする所存で、周圍を見廻した。途端に、兩人は、不意に立上つて、ガサ〳〵と、木や草を、押除け乍ら、日高の後へ進んだ。

物音に驚いて、日高が振返ると、兩人の青年が、立つて居る。而も、見覺えのある、正助と吉之助であるから、之れには流石の、日高も吃驚仰天、さては陰謀露顯かと、敏くも察して、刀の柄には、手を掛けたが、今此處で爭ふて萬一捉はれるやうな事があつては、却て一大事と、流石に、悧巧な奴で、疾くも身を開いて、逃走した。今更に、これを取逃しては、是れまでの苦心が、水の泡になるのであるから、兩人も、一生懸命に追掛けた。けれども、日高は屢々の山入りに、路は、心得て居る上に、平生から健脚を、自慢の男とて、その疾い事は、恰で猿が跳廻るやうで、遂々兩人は、離れ〳〵になつて、一生懸命に、日高の跡を、追ふことになつた。

一六

平地ならば無論のこと、是れまでに覗つた以上は、取逃す譯もないが、何分にも足許の悪い、勝手の判らぬ、山の中の追ひ廻しであるから、遂に吉之助は、正助に逸れ、正助は唯一人で、日高を追掛けて來た。辛うじて追付いた、正助は、有無を言はせず、日高に組付いた。其手を執つて、拂退けた日高は、グルリと、體の向を變へた。

『何をするか、小僧奴が』

と、一喝を加へた。正助も身構へて、

『貴樣は、俺どんの顏に、見覺えがあらう』

『ウム、治右衞門の伜正助か、豫て見知つて居る』

『最早や遁れぬ所ぢや。悪事の露顯と覺悟して、尋常に繩に就け』

日高は、眼を瞋らして、

『何を、生意氣な事を吐すか。淸淨無垢の武士に對して、繩に就けとは、何事か』

『貴樣は、たとへ何程に强辯しても、既に貴樣等の一味徒黨が、爲して居る悪事は、我父を首め、正義の武士は、總て知つて居るのぢや。さればこそ、我等に命じて、貴樣の跡を追はせる事にした位で、今更に、知るも知らぬもない。若し强て、自分の潔白を申立てよう、といふならば、我等と共に、城下へ來てからにせい』

『默れ、貴樣如き、小僧が知る事ではない。路を開いて通せ』

『イヤ、ならぬ。縱令、何と言ふても、此場は一寸も通す事はならぬ。それとも、我等の前で、明かに今までの罪狀を申すか。彼れ是れ、强辯するに於いては、遠慮はないぞ』

と、言ひ乍ら、ヂリツと詰寄る。日高も、今更に遁れる途は、無いものと見て、腰の一刀を、スラリと拔いた。正助も、同じく拔き合はせて、是れから斬合ひになつたのだが、何分にも、樹木の生茂つた所とて、長い刀の、振り廻しやうはない。そこで、兩人とも、刀を投棄てゝ、これから組打になつた。正助は、漸く二十歲に、なるかならぬかの

靑年であるが、非常に膂力の强かつた人で、殊に組打は、得意として居たのである。けれども、日高は、もう立派に武道の修業も積んで、武術にも、優れて居た男である。兩人は、頻りに引つ組んで居たが、木の根や、岩角の爲に、足場も定まらず、果ては、兩人とも、引つ組んだ儘、上になり下になり、力の限り、毆り合ひを始めた。

正助に逸れた吉之助は、息急切つて、此處へ駈付けた。兩人が、力聲を出して、爭ふて居るので、靜寂な山の中には、少しくらゐ離れて居ても、手に取るやうに、それが判つた。その力聲を聞付けて、吉之助は、駈付けたのだ。兩人が、上になり下になり、組打をして居るのを見ると、

『正助どんか、十分やり居れ、俺どんも、加勢をするぞ』

と、叫び乍ら、駈付けた。默つて進んで、側へ寄つてから、密と、手なり足なり押へて、力を貸せば宜かつたのだが、まだ若い時分の事とて、氣も逸く、遠くに居る時に、聲を掛けたから、日高の耳にも入つた。一人でも、持て餘して居る所へ、又一人加はつては、迚も敵はぬ、と思つたから、そこで、日高は、一生懸命の力を出して、正助の胸先を力任せに突いた。引外さうと思つたけれど、足場が悪いので、その隙は無く、强に胸先を突かれた。正助は、息がつまるやうになつて、思はずたじ〳〵と、二歩三歩後へ下つた。正助の手が離れたので、日高は、踵を返して、山奥へ逃込んだ。今度は、吉之助が、跡を追掛けた。胸の痛みを押へ乍ら、正助も、其跡を追掛けたのであるが、遂々、日高の姿は、木や草の蔭に隱れて、何處へ行つたか、更に判らなく、なつてしまつた。

是れまでにして、取逃がしたのでは、自邸へ歸つても、申譯が無い、といふので、兩人は、一層奮發して搜し廻つたけれど、遂に日高の影さへも、見ることは出來なかつた。

『失敗つた。正助どん、何うしたもんか』

『ウム、弱つたのう。これまでにして、逃げられてしまつたのは、如何にも殘念ぢやが、止むを得ぬ。併し、もう是れで日高の罪狀は明かぢやから、兎に角、城下へ引返して、父にも一應、此旨を知らせて、日高を搜すのは、是れ

から後の事にしても、宜からう』

『それぢや、左樣しようか』

兩人は、力なくなく山を下る。谷山の町へ出てから、身仕度をあらためて、鹿兒島指して、歸つて來た。

相良兄弟の事件に就いて、市郎右衞門は、治右衞門に、別れて歸つた。其後で、正助と吉之助が、治右衞門の前へ出て、

『父上、殘念な事をし申した』

『ウム、御殿に居つて、お前等の書面は讀んだが、それまでに、跡を追けて取逃がしたとは、實に殘念な事ぢや、併し、大概は、想像も出來る。逃げた者は致方が無い、として、是れから後の始末ぢや』

吉之助も、顏を赤らめ乍ら、

『叔父樣、何とも申譯のない事をし申した。どうか、免して下さい』

『何の、詫をいふ事はない。是れまで、汝等が、骨を折つて吳れたのは、俺どんも、深く喜んで居るのぢや。尙ほ此上とも、俺どん等の爲に、盡力して吳れい』

『それや、仰せまでもごわへん』

『汝等が、俺どん等の爲に、盡して吳れるのは、つまり、島津家の御爲になるのぢやから、矢張り忠義に就ての勤めぢや、と思ふて、懸命に、やつて吳れ』

『ハイ』

そこで、尙ほ詳しく兩人から、日高の樣子を聽いて、直に治右衞門は、市郎右衞門を訪ねて、顚末を語り、これから、日高の樣へ、樣子を見にやると、この間出た切り、歸つて來ない、といふ。惡事露顯と心得て、何方へか、身を

恐ばせたものに、違ひない。いづれ時機を待つて、此顚末は、其筋へ屆けて出よう、といふ事は、先づ極つたが、差當つて兩人が、一骨折らなければならないのは、相良兄弟の身の上であつた。

相良兄弟が、伊集院平を辱しめたのは、私の爭ひとして濟ませば、何でもない事であるが、乍併、其當日が、御葬儀の準備最中であつた、といふ處に、兩人の不謹愼の點はあるので、之を申立ての箇條にされた事が、兄弟の身の上には、一大事となるのである。けれども、それは、辯護の仕樣に依つて、又何とでもなるであらうから、兎に角、先鞭を着けて、兄弟を救ひ出すのが、第一であると考へたから、そこで、市郎右衞門は、唯一人、齊彬侯の御前に、出る事になつた。

一七

齊彬は、愛子を失ふた、悲哀のまだ去らずして、奧御殿に、深く閉籠つて居るばかりだ。一人ならず二人までも、僅かの間に引續いて、愛子を失ふた、といふ事は、普通の人にしても、その悲哀の深いは固よりであるが、殊に、其裏面には、多少の秘密のあるらしい事も、薄々は聞いて居る。旁々、此の先の愛子の事も考へて、何となく氣が、結ぼれ勝ちになつて、鬱々として、引籠つて居るのであつた。所へ、市郎右衞門が、拜謁を願出たので、直に許して、面會する事になつた。

『オー、市郎右衞門か』

『ハツ』

『頃日中は御苦勞であつた、其方が、此度の立働きは、予も、深く喜んで居るのぢや』

『御言葉にて、恐れ入りまする。數ならぬ私風情に、斯かる大役を仰せ付け下されましたのみならず、左までの働きも無きに拘らず、その御言葉では、却て恐れ入りまする。重ねゝの御悲哀、何とも申し上げやうは、ござりま

せぬ』

流石に、齊彬も、言葉は無かつた。市郎右衞門も、一向、齊彬の胸中を察して、默つて居た。暫時あつて齊彬は、

『今日の用向は、何事か』

『斯かる場合に、不時の拜謁願出でまして、恐れ入りまするが、事、急に迫りましたる故、止む事を得ず、斯かる仕儀、偏に御許容を願上げまする』

『その申譯には及ばぬ。用事の趣き、遠慮なく申述べて宜からう』

『ハヽツ、御言葉に甘えまして、申述べまする。餘の儀でもござりませぬが、相良市郎兵衞兄弟儀、先般、若君御葬儀の御支度の最中、不謹愼にも、大殿樣御側役の伊東院平と、私の爭ひより、打合ひを致しましたる事は、何と申しても其罪輕からず、とは存じますれど、當人等は、他に申し難き事情のござりまして、あのやうな粗暴の振舞を致しましたること故、深く罪情を御賀しなく、當人等へ對しまして、寬大の御沙汰、偏に願上げたく、强て拜謁を願出でましたる次第で、ござりまする』

『ウム、其儀に就ては、予も、些と聞込んだ筋もある。乍去、場合が場合だけに、父上の御怒りは、激しい樣子ぢや。それに、伊集院は、平生より心善からぬ者とは、承知して居るが、何分にも、父上の御寵愛深き者故、之に就ては予も、立入つて取捌きも出來まい、と思ふて居るのぢや。が、併し、相良の忠節は、平常より能う存じて居るに依つて、成るべくは、父上の御怒りを軟げ、寬大の御處置相成るやう、予も、一應は願ふて見る所存ぢや。其方も、其心得を以て、表方諸役人へ、然るべく申し談じたら、どうぢや』

『何時に變らぬ、お情深き御言葉、縱令、本人等は、如何樣の御罪科に行はれませうとも、此の御言葉を承はりましたならば、敢て悔ひ所も、ござりますまい。兎に角、私は、是れより表方黨役へも、それ〴〵申し談ずる事に致しますれば、何卒、大殿樣、御前體は、宜しきやう、お取成しの程、偏に願上げまする』

『承知いたした。心配いたすな』

『ハヽツ、有難く存じます。然らば是れにて、退出仕りまする』

斯ういふ次第で、市郎右衞門は、齊彬の御前を下ると、すぐに表方の、黨役に面會して、それ〴〵に、交渉は付けたが、何分にも、お由良の一味中でも、最も勢力ある、調所笑左衞門が、贔屓にして居る、伊集院を打懲した事であるから、相良兄弟を、其儘にして置かぬ事は、極つて居るのだ。一通りの運動は、爲て見たけれど、其效は無ささうであるから、市郎右衞門も落膽して、一時、自邸へ引揚げて來たが、唯一の賴みは、齊彬侯の御力であつた。非常に仁心の深く、斯樣な事に就ても、あれ迄に仰せられたのは、實に有難い限りであると同時に、此御方の取計ひに依つて、寬大の御處置はあらうと、それを賴みに、御沙汰の下るのを、待つ外は無かつた。

齊彬から、齊興へ、一應の內談は、あつたらしいが、齊興の怒憤は、一通りでなく、自分の寵臣である、伊集院の頭に、手を加へた事は、甚だ怪しからぬ。殊に、場所柄をも辨へず、あのやうな不埒を働いたものを、その儘に、濟まして置いては、是れから先き、家來の敎示もつかぬ、といふので、非常に怒つて居るから、どうも手のつけやうは、なかつた。

重役の過半は、お由良の鼻息を、窺ふて居る、といふやうな關係から、相良兄弟の處分は、存外に、重くなりさうだ、といふ評判が、一時に、パツと立つたので、山田と大久保は、頻に苦心して、奔走する。尤も、伊集院の、平生が善くないのであるから、たとへ、相良兄弟の振舞が、怪しからぬ事である、にしても、內心では『伊集院の奴も、時々は、那アいふ目に遇つた方が、却て面白い』と、いふやうな、感じを有つて居る、重役もあつたので、相良兄弟の處分について、評議が、始つた時分にも、寬嚴の二派に分れて、多少の論爭はあつたのだが、其結論は、流罪といふ事に、決したのであつた。

お由良一味のものからすれば、無論、切腹には致したかつたのであらうが、左樣もならぬ事情があつて、重役の極めた流罪で、結局は、定ける事になつた。

かうした紛擾の、續いて居るうちに、今度は又、盛之進が、病みついたので、忠義に凝つた、正義の武士は、皆なに、お由良派の、呪詛の利き目が、現はれて來たのか、と思つて、頻に心配はして居るが、その効もなく、盛之進の病氣は、日に益々、重くなるばかりであつた。そのうちに、齊興は、參覲交代の時が來て、いよ〳〵江戸へ、出る事になつた。

然るに、お由良派の爲めに取つて、此の上もない、一大事が起つた。

例の調所笑左衞門が、薩藩の財政回復の、一策として、支那との密貿易を行つた事は、前に述べたが、それに金儲けの味を占めた、笑左衞門は、其後も、藩の權勢を握るにつけて、一層立入つて、密貿易をつゞけて居たのであるが、それが、端なくも發覺して、遂に笑左衞門の一身に、容易ならぬ問題が、起りかけたのであつた。

密貿易の發覺

一

若君の寛之助が、怪い死を遂げた後に、第三子の盛之進が死ぬ。引續いて、第四子の篤之助が死んだ。斯ういふ具合に、齊彬の實子は、不思議にも死ぬのであるが、その代りに、姫君の方は、皆無事に育つて行くのだ。これは、お由良の一派が、呪詛をする爲にさうなつたのか、何うかは、判然分らないけれども、兎に角、齊彬の若君は、悉く呪詛の法に依つて、亡き者にしよう、といふ、計畫をして居たのは事實であるから、齊彬の爲に、忠義を盡す側の、武士から見れば、呪詛の爲に、若君は、皆夭死をせられるのである、といふやうに、思ひ詰めるのは、當然の事であつた。是は、後の話ではあるが、第五子の虎壽丸、第六子の哲丸といふ、二人の若君も、矢張り夭死をして了つた、といふやうな譯で、齊彬の若君は、好い具合に育たない、といふやうになつて居たのだ。自然の成行が、さうなつて居たのだらうが、何しろ、若君の夭死といふ事が、お家騷動の一原因には、なつて居たのである。

齊彬を、亡き者にして、普之進の久光を、之に代らせる、といふ事は、その計畫が大袈裟になつて、自然と、世間の物議が、起るのを惧れて、それが爲に、齊彬の若君を夭死させて、その相續者が無い、といふ所へ附込んで、久光を准養子にしよう、と企てたのが、お由良一味の考であつた。それが巧く、思ふ壺に篏まつて行くのであるから、齊彬派の方から見れば、矢張り、お由良派が、兵道の修法に依つて、呪詛をする、それの効驗があつて、若君の生命を

續めるのである、と解釋するのは、當然の次第で、止むことを得ない。

從つて、齊彬を、何處までも、擁立てゝ行かうとする、連中から見れば、お由良が、憎くなるのは勿論のことである。殊に、齊彬は、前にも屢々いふた通り、普通の若殿と違つて、非常な名君であつたのみならず、齡も三十を越えて居るのであるから、外の藩にして見れば、既に當主になつて居る齡であるのに、大殿の齊興が、頑固な人で、藩政に離れるのが、厭である爲に、代を讓らないといふのが、因で、此齡になつても、まだ若殿として、部屋住の身の上である事が、島津家を思ふ、忠義の武士からすれば、殘念で堪らないのだ。其處へ附込んで、お由良の一派が、色々な小刀細工をするのだから、兩派の軋轢が、段々、激くなつて來て、血を見るやうな、騷動が起つたのも、つまりは齊興の惡かつた爲であると、云ふても、差支あるまい。

長い間、兩派の暗鬪が、續いて來たのであるから、今では、藩士の、重立ちたる者の間には、齊彬派と、久光派が判然區別されるやうになつて、兩派の結束は、益々、固くなるばかりであつた。その結束が、固くなるほど、暗鬪も激しくなる。お由良派の重立ちたる者の氏名は、前に掲げたから、此處には略すが、齊彬派の重立ちたる者を、擧げて見れば、町奉行兼物頭の近藤隆左衞門と山田市郎右衞門といふ、三人が、先づ齊彬派の幹部ともいふべき格で、これに續いては、家老の二階堂主計、島津壹岐、物頭の赤山靱負、大目附兼物頭の名越左源太、屋久島奉行の吉井七郎右衞門、裁許係の中村嘉右衞門、同見習の近藤七郎衞門、山口久右衞門、島津濤太夫、新納彌太右衞門、馬頭の仙波小太郎、御藏方目附の吉井七之丞、奥小姓の村野傳之丞、兵具方目附の土持岱助、道方目附の村田平内左衞門、宗門方書役の土岡五郎太、御廣敷横目の野村喜八郎、郡方見廻の山田作次郎、地方檢見の松本市左衞門、製藥係兼御庭方の田垣市助、郡奉行の大山格右衞門、御廣敷書役の八田喜左衞門、琉球館係の大久保治右衞門、其他、諏訪神社の宮司井上出雲守、秩父崩れの時に、役を退いた、有馬一郎等を首め、何れも忠義に凝つた人達は、生命に賭けて、齊彬を擁立てなければならぬ、と、その熱心は、一通りでなかつた。

今の時代と違ふて、その時分の御家騷動は、血性ある武士が、みな關係して居るのであるから、動もすれば腰間の秋水に訴へて、その決着をつけようとする。町人や神官のやうな者でも、すぐに生命の遣取で、事を決めよう、とするのであるから、長く捨てゝ置けば、取返のつかぬ事になるのは、知れてゐる。これに、就ての苦心は、誰よりも齊彬が、一番に深かつたのであるから、どうかして、大きな騷ぎにしないで、事を輕く治めたいといふ、考から、自分が、江戸詰になつたのを幸ひに、齊彬は、自ら此事について、動きはじめたのである。

伊豫宇和島の城主、伊達宗城は、當時の諸侯の中で、最も賢明なる御方として、諸藩の間にも聞え、公儀の氣受も頗る良かつたのである。奥州の伊達家の分家で、而も、德川家に、血緣の關係がある所から、宗城が、普通の人物であつても、相當に公儀の信用は、あるべき筈であるのに、その爲人が、三百諸侯の中に於て、一段と優れて居たのだから、公儀の方では、殊に、厚い信用を以て、宗城の一言一行には、重きを置いたのである。その宗城と、齊彬は、非常に深く交つて居たのだ。

宗城は、既に宇和島藩の當主として、世に時めいて居るのだが、齊彬はまだ、部屋住の身の上で、表向には、島津家の當主として、對等の交際は出來ないのだけれど、宗城は、齊彬に對して、充分の敬意を以て、何處までも、島津家の當主と、同樣の、取扱ひをして交際ふ、といふ位に、二人の仲は、極めて深かつたのである。そこで、齊彬が、宗城に、藩の內情を打明けて、公儀の方の斡旋を、然るべきやうに頼むのが、一番の捷徑である、といふやうに考へて、或日のこと、宗城へ、面會を申込むと、すぐに返事があつて、お待受をして居るから來てくれ、といふ事であつたから、早速、支度を整へて、これから宗城へ、面會の爲に、出掛けることになつた。

二

自分の好きな齊彬が、お客として來る、といふのであるから、宗城の方では、それ〴〵に、御馳走の準備も整へて

待受けた。齊彬は、僅かの供廻りで、乘込んで來た。實を言へば、宗城も、齊彬の身の上に就て、密に心配して居たのだ。幾ら秘密にして居ても、薩藩の內情位は、手に取るやうに判るのは、當然である。而も、齊興が六十歲以上になつて、その相續人たる齊彬が、三十歲を越えて居る、といふのに、家の相續をさせずに、老人の齊興が、自ら藩政を執つて居る、といふのは、何か、是れに就ては、秘密が無ければならぬ、といふ考は、どんな人にでも、起るのは當然であつて、殊に齊彬に對して、深い同情を持つて居る、宗城としては、其處に、注意を拂ふのは、當然のことであつた。齊彬の方でも、深く信じて居る宗城であるから、時折は、嘆聲を洩して、藩の內情の少し位は、話合ふて居たのだらう。今、齊彬が、改めてやつて來る、といふのも、恐らく其邊のことであらうと、宗城は、敏くも推量して、待受けて居たのである。

先づ、寒暑の挨拶も濟んでから、宗城は、極めて打解けた態度で、

『今日は、態々のお使ひで、お待受をして居た次第でござるが、どういふ御用筋か、先づ、それを承知いたしたい』と、話の、端緒を切られたから、そこで齊彬は、膝を進めた。

『實は、貴殿も薄々は御承知でござらうが、我藩の內情に就て、お力を拜借いたしたい、と思ふて、參つたのぢや』

『成る程、而て、それは、何ういふ次第か、一應、お伺ひ致さう』

齊彬は、段々と、今迄の行掛りを話して、更に言葉を低めて、

『斯樣な次第で、自分も、昨今では、何と致してよいか、思案に盡き果て、苦しんで居るので御座るが、何分にも、父の心一つで、我藩は、起さうと倒さうと、自由になるので、如何に、自分が焦つて、父に迫ればとて、父の考が變つて吳れぬ以上は、如何とも手の下しやうも、無いので御座る。强ひて表沙汰にして爭へば、父に背く、不孝の罪を犯す事に相成り、家名に瑕もつく道理で、それはならず、さればとて、此儘に打棄て置けば、今後、如何なる樣事が出來いたすか、測り知れぬ、といふ次第で、實以て、困却いたして居るので御座るが、之に就て、何か、

好い分別は無いものか、と、貴殿の、お智慧を借りたく、今日は、改めて、お伺ひ致して御座る』

と、何も彼も打明けての、秘密の相談であつた。宗城の身に取つては、或は有難迷惑で、あつたかも知れないが、島津家の當主になるべき齊彬から、斯ういふ風に、內情を打明けての相談をされて、見れば、宗城にしても、不快の情を、持つべき筈はない。つく〳〵考へて見るのに、齊彬は、如何にも不幸な人である、と、坐に同情の念も起つて來た。

『その御相談はなくとも、頃日來、御藩の內情に就ては、二三聞き込んだ筋もあつて、其度毎に、心配はして居つたので御座る。それまでに、內情を打明けての御相談は、拙者にしても一肌脫がずには居られませぬ。然し乍ら、他の事柄と違ふて、うつかり拙者が、手を出した爲に、却て騷動を、大きくするやうな事があつては、一大事である。此處は暫く、拙者も、熟考の上、然るべき策を考へて、更に貴殿のお耳に入れた上で、良き取計ひも致さう、と考へますれば、餘り御心配なさらずとも、拙者にお任せなされては、どうか』

『御親切のお言葉で、痛み入る。自分の分別に、餘つての御相談であれば、何事も、貴殿任せぢや。たゞ父上の御名も汚さず、家にも瑕のつかぬやう、吳々も、お願ひ致す』

『委細、承知仕つた』

『尙此上に、お願ひ致したきは、家來の者共が、双方に立分れて、爭ふて居る。いづれを、善とも惡とも、區別はつけたく御座らねば、其邊も、確とお呑込みの上、御盡力を煩はしたいのぢや』

何處までも行屆いた、齊彬の賴みには、流石の宗城も、感心した。實を言へば、自分が排斥されやう、として居るのだ。現に、此歲になつて、まだ相續が出來ないといふのは、父の齊興が、强情なばかりでなく、其間には、いふに言はれぬ事情が、含まれて居るのである。それを何處までも押包んで、自分に背く家來にも、瑕をつけずに、安穩に

濟ませたい、といふ、その穩かな相談には、宗城も、只管感服して、齊彬の爲人に、服せざるを得なかつた。

二侯の相談は、これで濟んだ。それから、山海の珍味を、所狹きまでに並べて、大層な歓待があつた。氣性の合つて居る、二侯のことであるから夜遲くなるまで、遠慮なく御馳走になり、又話し合ふて、興は盡きねど、餘りの長座に、齊彬は、一先づ邸へ、引取ることになつた。

縱令、齊彬の境遇に同情して、早く薩の內訌を鎭めてやりたい、と、如何に焦つて考へた所で、宇和島の城主たる伊達宗城が、薩藩の內訌にまで、手を着ける、といふ事は出來ないのだ。然し乍ら、その內訌が、激しくなつて來てそれが、公儀の耳に入れば、所謂お手入れと、いふ事になつて、島津家へ、瑕のつく事になるのだから、齊彬が、自分の思案に餘つて、斯ういふ風に、打明けて相談のあつた上は、一日も早く、その始末は、つけてやらなければならない、といふのが、宗城の考で、色々に、智慧を絞つた末、不圖、思ひ付いたのが、老中を勸めて居る、備後福山の城主阿部伊勢守の事であつた。此人と宗城が、殊の外、親意にして居たので、先づ受敢ず、伊勢守に、相談の上で、何事も、都合よく計らうて貰はう、といふ考になつたのである。

三

幕末の政治家で、阿部伊勢守は、最も優れたる人物であつた、といふ事は、當時の記錄に就て、調べて見ても、又幕末の事情に通じた、老人に就て、聽いて見ても、異口同音に、伊勢守は、幕末の歷史を、飾るに足るだけの、立派な老中であつた、といふ事は、等しく答へるのであつた。伊勢守が、政治家としての人物は、立派なものであつた、といふ事だけは、確かに違ひない。けれども、惜いことには、長生が出來なくて、漸く三十を超えたばかりで、若死をしたのである。

所が、茲に面白い逸話が、殘つて居る。それは何ういふ事か、といふに、伊勢守は、老中としても、立派な人物で

あつたには違ひないが、第一に、その男振が好かつた、といふ事が、老中として成功した、一大原因である、といふ事が、傳へられて居るのだ。政治家と、男振の好いのとが、果して、どれ程の關係があるか、理窟から考へたら、甚だ信じられない事である。が然し、多くの人に歡ばれるやうな、美しい容貌を、持つて居る者は、女でなくとも、それだけの德は、あるに違ひない。護摩壇の不動のやうな、面をした奴が、文部大臣になつて、學校の校堂で、どんな面白い話をして、聞かせた所で、生徒の喜ぶ筈はない。一國の總理大臣ともあらうものが、人三化七の、不思議な面をして居たら、如何に其手腕が、優れて居ても、國民が、其顏を見て、崇敬の念は、決して起すものではない。色の生白い、何處となくにやけた、色男のやうな容貌では、幾ら綺麗でも、感心は出來ないが、所謂、男らしい立派な顏付や、態度の調ふて居る人物で、而も、其手腕が、政治家として適當である、となつたら、鬼に金棒で、國民の衆望は、それに集まつて行くに、違ひない。

要するに、容貌の美醜は、矢張り政治家の資格の、一つと見て、差支なからう。伊勢守は、非常に美い容貌で、あつた爲に、大奧の氣受が、頗る好かつた。德川幕府の政權を司る、老中が、大奧の氣受が好い、といふ事に、何の關係があるかと、今の時代に生れた人は、疑ふかも知れないが、舊幕時代の、江戸城の大奧の勢力は、實に素晴らしいもので、どんな偉い諸侯が、老中になつても、迚も一年と、御役が續くものではないのだ。大奧の氣受が惡かつたら、男の臭でも、嗅ぐことが出來ないで、一生を、奧勤めに送る、といふ女や、縱令、一生奉公はしないのでも、女に一番大切な、前半生を、奧勤めに送る、といふやうな女が、男の臭を、嗅ぐことも出來ないで、大勢一つ所に集まつてガヤ〳〵騷いで居る所へ、表方の役人が、公用の都合で、やつて來ると、物珍らしさうに、皆隙見する。或は、その歡待の相手に、選ばれる者がある。そんな時に、同じ表方から來る、役人でも、男振りの好い者が來れば、奧女中共が、大喜びで、之を歡迎したものだ。況して、老中といふ、大役になつて居る人が、偶ま、大奧へ、やつて來ることがあれば、どんな騷振りであらうかと、隙見をしては品定めをする。その場合に、伊勢守のやうな、美い男が、やつ

て來た日には、それこそ、大變な騷ぎで、どの部屋の障子も、指の孔に、眼玉の鈴生が、出來る、といふやうな譯であるから、どうしても、伊勢守は、御立派な御方ちや、とか、阿部樣は、御老中としての、御威光の高いお方である、とか、一寸見た男振から、割出して來て、大奥の評判は、どうしても良くなる。それが自然と、將軍の御臺所へ、良い噂をして聽かせる事になるのだから、自然と響いて、將軍の氣受も、好くなるやうな譯になるのだ。こんな事は、誠につまらない事の樣ではあるけれど、矢張り其時代としては、見遁すことの出來ない、江戸城内の半面で、あつたのだ。

人物が、立派であつたのみならず、男振までも、美かつた、といふやうな事を、二つ合せれば、どうしても、老中としての御役も、無事に勤まる事になるのは、當然な譯だ。けれども、惜い哉、その男振の美いのが、禍を爲して、伊勢守も、相當に女狂ひをやつた。例へば、向島の木母寺の中にある、有名な櫻餅屋の娘が、當時、一枚繪に出る程の美人であつた。或年の花見に、伊勢守が、之を見染めて、邸へ引取らう、といふ使ひを差向けた。所が、其娘も、伊勢守の、美しい殿樣振に、惚込んで、二つ返事で承知した。如何に江戸名物の一つに數へられて居る、とは言ひ乍ら、たかが、櫻餅屋くらゐのものであるから、娘に、異存の無い限り、喜んで、御殿奉公にやる、といふことになつて、此娘が、阿部の邸へ入ると、軈て愛妾と、いふことになつて、その寵愛は一通りでなかつた。是は一例に過ぎないのだが、伊勢守の一生の中には、斯うした事が澤山あつて、それが爲に、遂に健康を害して、早死をしたのである、といふ事も傳へられて居るのだ。

此一事は、或は俗說であるかも知れないが、兎に角、是だけの事を傳へるだけでも、伊勢守は、どれ程の美男子で又、その美男子であつた事が害をなして、どれ程に、女狂ひをしたか、といふやうな事も、想像されるのである。然し、是は、其品行上の事であつて、それが爲に、伊勢守が、老中としての人物の上には、少しの關係も無いのだ。即ち例の伊藤博文が、あれだけに、性の惡い女狂ひはしても、矢張り、明治年代の、第一流の大政治家である、といふ

事は、後の世にまでも、傳へられるのであつて、僕等、伊藤を嫉ひな人でも、其點だけは、首肯かなければならぬ、といふやうな實例も、明治時代にある位で、伊勢守の女色に耽つたといふのは、事實であつても、人物の偉かつた、といふ事迄も、打消すのは無理であらう。

伊達宗城は、伊勢守の力を借りて、齊彬の相續を、早く極めてやらう、といふ事に氣のついたのは、全く眼の着け所が善かつた。

四

今の琉球は、明治になつてから、我國の領土の中へ、加へられてしまつたのであるが、舊幕時代には、未だ、淸國の領土の如く、なつて居たのである。けれども、薩摩へ近い、海中の群島であつた爲に、何時も、薩摩へ對しては、頭が上らず、薩藩の方からも、亦常に手入れをして、琉球諸島の物產を引取つては、自國の產物と、同じやうな扱ひをして居た。幕府から許されて、薩藩の領土から、上つて來る收入の外、所謂、帳面へ書上げずともよい事になつて居た、祕密の收入に屬して居たのである。

然るに、此琉球へ對して、英佛の二國が、關係を付けて來た爲に、薩藩に於ては、それに對して、何とか處置をつけなければならぬ事になつた。是が有名な、薩藩の琉球事件であるが、圖らずも、此事件が、起きた爲に、却て幸ひとなつて、齊彬の相續を、速める事に、なつたのだから面白い。

弘化元年の三月中旬に、佛蘭西の軍艦が一隻、琉球の那覇港へ、入つて來て、國王に面會を求めた。斯ういふ事には、初めて出遭ふた、琉球人であるから、その騷ぎは一通りでなかつた。國王は、努めて面會を避けるやうにして、相當の役人を差向けて、艦長に面會させると『今後は、佛蘭西と琉球の間に、貿易を自由にさせてくれ』といふのが、第一の請求で、第二が『天主敎を、國内へ弘めたい、と思ふから、之を認めてくれろ』といふのであつた。これには、

國王も弱り果て、色々と、口實を設けて斷つたが、艦長は、容易に承知せず、此二つだけは、是非許してくれろ、と、いふので、談判は段々、難しくなつて來た。そこで、國王の方からは、

『貿易は、我國に於ても、固より望む所であるが、御覽の通り、土地は瘦て居るし、物産といふた所で、知れたものであるから、貿易を許した所で、貿易すべき品物は無いのだ。殊に、長い間の習慣で、他國の人を、忌み嫌ふ氣風があるから、却て、それが爲に、貴國の人に、害を及ぼすやうな事があつてはならぬから、寧そ、思ひ諦めて貰ひたい。

又、天主教を弘める、といふ事に就ても、我國は、長く支那の儒教を奉じて、所謂、孔孟の教を以て、國民に傳へて居たのであるから、今俄に、異つた宗門を開かうとしても、その甲斐はあるまいし、儒教と天主教と、信仰上の爭から、意外の變を釀さない、といふ限りもない故、お互に平和を望むならば、さういふ事はせずに、置いて貰ひたい』

といふやうな事を、頻に唱へたのだが、艦長の方では、

『貿易をすべき品物が、有るか無いかは、愈々實行して見なければ、判らぬことであるから、兎に角、貿易は許す、といふ事にして吳れ。又、天主教と儒教の爭ひが起きても、それは別に、巧く治めて行く手加減があるから、取敢ず許す、といふ事だけは、決めて貰ひたい』

といふて、なか〳〵立去らうとしなかつたので、國王も、匙を投げて、自然の成行に任さう、としたのであるが、何しろ、佛蘭西人の方では、遠く本國を、離れて居る事であるから、此儘に、何時までも留まつて居る事は出來ないのだ。そこで、伴れて來た、宣教師のカシユンといふ者と、通辯の支那人を、一人殘して、

『いづれ、明年また來て、更に掛合ふ事にするから、それまでに、はつきり決めて置いて吳れ。其際になつて、彼是れ故障を言ふても、此上は、兵力に訴へて、必ず此要求は、通させて貰ふから、そのつもりで居て吳れ』

と、言ひ置いて、軍艦は、佛蘭西へ歸つてしまつた。

そこで、琉球國王も、大に屁古垂れて、到底、自國の力を以て、之を拒む事は出來ないのみならず、艦長が、立去る時に、來年また來る、と言ふて行つたのだから、若し、今度來られた時には、それこそ、何んな騷ぎになるかも知れない、といふ所から、薩藩へ對して、此事を急報して、今日までの關係上、何とかして此國患を、除いて貰ひたい、といふ事を、訴へて來た。

所が、薩藩の方にしても、斯ういふ事には、まだ一度も、出遭ふた事がないのだから、何と處分をしてよいか、手の着けやうがなかつた。世間知らずの藩士達は、刀の柄を叩いて『若し再び、外夷が渡來したならば、我々が、琉球國へ渡つて、大に外夷と戰つて、日本刀の切味を、示す外はない』と、悲憤慷慨するものはあつても、どうして、此談判に應ずるか、といふやうな、考を持つて居る者は無く、空しく其年が過ぎて、翌年五月になると、又々、英吉利の艦が一隻、入つて來て、佛蘭西人と、同じやうな事を、請求して行く。引續いて、翌年も、英吉利の艦が來る。その後から、佛蘭西の軍艦が、三隻揃つて、那覇港へ、乘込んで來て、前年の請求に對する確答を求めるといふやうな次第で、琉球國は、上を下への騷ぎになつた。

急使は、櫛の齒を、挽くが如く、鹿兒島へ、その知らせがあつたので、薩藩も、之を打棄てゝ置くことは出來ないとなつたが、さればとて、薩藩だけで取仕切つて、戰爭を開いてしまふ事にもならず、幕府の命に、待つの外はないといふ事に決して、今日までの始末を書面にして、幕府へ、その取扱方の、指圖を請ふ事になつた。

齊興は、非常に剛愎な人であつて、どんな事があつても、餘り動ずる事は無かつたのだが、此時の國元からの、注進に就ては、稍や困つた、といふのは、つまり相手が、英吉利や佛蘭西であるから、自分が、思つた通りの取扱ひをして、それが爲に、國難を釀すやうな事があつたら、それこそ一大事であるから、どうしても、幕府の指揮を仰ぐ外はたかつたのだ。

はじめ、調所笑左衞門を招いて、此事を、相談に及んだが、如何に才物の、笑左衞門でも、此處置は、自分の一存を以て、決める事は出來ないから、『兎に角、幕府の御沙汰を待つ外は、御座りますまい』と、答へた。誰が考へても此外に方法はないのだから、齊興も、止む事を得ず、往生する外はなかつた。兎に角、琉球へは、二箇國の艦が來て居て、早く言へば、居催促同樣な掛合ひを、爲して居るのだから、一日も早く其方針を決めなければ、琉球が、何ういふ事に、なつて了ふか判らない。玆に於て、齊興は、更に笑左衞門に命じて、阿部伊勢守を訪ねて、此處分方を、急がせる事にした。

丁度、此時分に、伊達宗城から、伊勢守が、齊彬相續の一條について、相談を受けて居たのだ。智慧のある伊勢守は、薩藩の申出を聞いて、膝を打つて喜んだのは、此事件を利用して、齊彬の相續を、速める事にしようと、腹の緒を固めて、待つて居る所へ、笑左衞門が、面會を願つて來たから、すぐに許して、會ふ事にしたのである。

五

舊幕時代の老中を、今日の役人に比較すれば、先づ大臣といふ所へ當るのだ。然し、今の大臣は、幾ら威張つても人民の權利が、充分に伸張されて居るから、少し變な事をすれば、揚足を取られて、ギユーといふ目に遭りつけられる。議會なぞでは、屁ツ鉾議員から、馬鹿呼はりをされても、どうする事も、出來ない位に、有難味が、薄くなつて居るのだが、舊幕の老中は、なか〳〵偉い權力を持つて居たもので、町人や百姓は言ふまでもなく、相當の格式を、持つて居る武士でも、老中の前には、絶對に、頭が上らなかつた。下々の方では『老中』の上に、御の字を附けて、『御老中』と言つた位である。二萬五千石以上の、藩の中から、然るべき人を選んで、此役に當てる、といふのが、德川の內規に、なつて居たのだ。老中の首席になる人が、卽ち大老で、今の總理大臣といふ所に、比較が取れるのである。

今日は、調所笑左衞門が、島津齊興の使者として、來ることになつて居るので、阿部伊勢守は、その役宅に於て、面會する事になつた。

豫て、笑左衞門が、腹黑い奴である、といふ事も、薄々は聞いて居るし、又善い方の智慧も優れて、薩藩の爲には功勞のあつた者だ、といふ事も、心得て居るのだが、然し、齊興の寵を恃んで、愛妾お由良の爲に、齊彬の相續を遲らせるやうに、巧く齊興を、操縱して居るのも、笑左衞門である、といふ事は、伊勢守は、よく知つて居たのだ。差向ひになつて、充分に話合つた事が無いから、果して人が噂をするほどに、優れた才智を、持つて居る者であるか、何うか、まだ判らないのだが、兎に角、他から聞いた笑左衞門を、相當な才物として、伊勢守は、待構へて居たのである。

笑左衞門の方でも、今、幕政に携はつて居る、老中のうちでは、伊勢守が、最も卓出した人物である、といふ事はよく承知して居るのであるから、琉球事件に就て、今日の對面は、相應に腹案を、持つて來たのだ。さて、愈々手續を經て、伊勢守に、對面して見ると、豫て他から聞いたよりは、遙に立優つた人物で、流石の笑左衞門も、何となく氣後れがして、平生は、極めて剛愎な奴であつたが、今日は、猫のやうになつて、頻に下手から出て、伊勢守を、巧く取込まう、として、努めて居るのであつた。

話は進んで、どういふ方針で、此事件を治めたらよいか、といふ事に、なつて來ると、笑左衞門は、頻に、幕府の力を藉りて、異人へ對する、處置を決めたい、といふ事を唱へた。

『其儀に就ては、此頃も、殿中に於て、大隅殿に對面の節、自分の所存は、詳く申述べて置いたが、琉球國に對しての事は、今日まで、公儀に於ては、一切お手入れをせずに、其藩へ、御一任してあつた事ぢやから、今俄かに、異人が襲ひ來たとて、今更に、公儀の御力を頼む、といふ事も、其藩の榮辱に拘はる事と心得るが、左樣にせずとも何とかして、良き分別もあらうから、尙十分に考へて見たら、何うぢや』

『お言葉は、至極と考へまするが、然し、弊藩に於て、思ひの儘に、異人と折衝いたしましたる末、萬一にも、和談が調はず、事を干戈に、訴へるやう相成りましては、自然、國難を釀す儀にも相成らうか、と心得まして、一應は公儀の思召も、伺ひましたる上、相當の處置を、決けたき考に御座りまする』

『それも、一應は道理であるが、其藩に於て、充分に手を盡して、尙ほ異人共が、我命ずる所に從はぬ、といふ場合は格別、今日までの屈出に依れば、それまでに深入りして、其藩が、談判を運んでは、居らぬやうに心得る。平生に於て、事なき時は、其藩が、隨意に振舞ひ、偶ま、異人共が來襲したればとて、直に公儀の御力を、願ひ出づるは、ちと其藩の平生にも、似合ぬやうに心得るが、どうぢや』

言葉靜かに、ぢり〳〵、と責付ける。伊勢守の言ふ所には、一々道理が含まれて居る。平生、事のない時は、琉球の物産を、一切取捌いて、薩藩では、是が爲に、少からぬ利得を、見て居るのに、今、異人が來て、騷ぎが大きくなつたから、といふて、すぐに幕府へ、助勢を賴んで出る、といふやうな事は、如何にも卑怯の至りである。その意味を以て、皮肉に詰られるのであるから、笑左衞門も、聊か閉口の體であつた。

『お諭しの儀は、一々了解いたしました。此上は、主人齊興にも、然るべく申傳へまして、公儀の御力を賴まず、事の落着は、決けるつもりで御座りまするが、萬一にも、左樣相成りませぬ時分には、然るべく御指揮の程を、仰ぎたう存じまする』

『宜い、其儀に就ては、含み置く』

これで、一應の話合ひは濟んだのだが、愈よ笑左衞門が立辭らうとして、挨拶を始めると、

『これは、其方にまで、申聞けて置くが、其藩には、賢明の聞えある、若殿も居らるゝ事である故、大隅殿、自ら手を下すまでもなく、若殿をして、此件の取捌きを、おさせ申しては、どうであるか』

『ハツ、恐れ入りましたる御言葉、若殿儀は、まだ部屋住の身分で御座りまするし、勞々、お歳もお若く、有體に申しますれば、世故にも慣れず、萬事は、大殿樣、思召を以ちまして、大小となく藩政の事は取捌いて居るので御座りまするから……』

と、頻に笑左衞門は、辯解を始めた。言葉の終らざる中に、伊勢守は、膝を乘出して、

『お待ちなさい』

『ハツ』

『その辯解を聞くまでもなく、若殿ならば、部屋住である位の事は、心得て居る。さり乍ら、同じ部屋住の若殿に致しても、齊彬殿の爲人は、並優れて在らせらるゝ事も、承知いたして居る。お年若とは申せど、實は拙者より年長に渡らせらるゝ筈ぢやが、其藩の慣例は、何歳までを若殿と稱へるのであるか、ちと解せぬ事ぢやか、其儀は何うぢや』

笑左衞門の失言を捉へて、伊勢守が、巧みに切込んだ。

六

若殿といへば、十九か二十の、小僧のやうにも聞えるが、齊彬は、もう四十に近いのだ。伊勢守に比べれば、年上なのであつた。それを言はれて見れば、笑左衞門も、何と答への仕樣がなかつた。自分ながら、拙い事を言ふた、とは思ふたが、もう取返しはつかない。伊勢守は、苦笑ひをしながら、

『大隅殿の御健康が、優れてあらせられる爲に、齊彬殿は、今日までも、御部屋住で居られるが、若し是が、他藩の事であつたならば、疾のむかしに、相續は、相濟んで居る筈ぢや。殊に、齊彬殿は、才智に優れたる御方なれば、此度の事變に就ても、大隅殿を、煩はす迄もなく、齊彬殿に、萬事の裁斷をお任せあつても、別に差支はあるまいと心得て、唯今のやうな事も申したのぢやが、立入つて、お指圖をする、といふのではない。たゞ拙者が、お役を

離れて、斯樣考へて居る、と、ふ事を、打明けた迄の事ぢやから、薩邸へ歸られたならば、大隅殿へも、それとなく、お話を致してはどうぢや』

『ハ、ツ、お言葉に從ひまして、正に相傳へるで御座りませう』

『いづれ、上樣へも此儀に就ては、申上げる所存ぢやから、其藩に於ても、尙充分に考へ置くやう、確と、申渡したぞ』

『委細、心得まして御座ります』

これで、話は濟んで、笑左衞門は、藩邸へ歸つて來た。

伊勢守の言葉について、つら〳〵考へて見るのに、齊興が、何時までも隱居をせずに、齊彬を、部屋住にして置く事は、公儀に於ても、內々眼をつけて居るのだな、といふ事は、伊勢守の口振りに依つて、充分に想像はされる。斯樣な事に就ては、幕府から、公然、指圖がましい事は、無い筈であるけれども、若し藩內の、紛紜が知れゝば、必ず何とか、干涉されて來るに違ひない。さうなつた日には、自分等が、今日まで爲して居た事が露顯して、どんな事になるかも知れないのであるから、流石の笑左衞門も、今日の伊勢守との對面について、頗る心配は深くなつて來た。

伊勢守の考では、これだけに、笑左衞門へ申聞けたならば、必ず齊興へも、通ずるに違ひない。さうなつて見れば、公儀の方から干涉は、せずとも齊興が、自ら顧みて、齊彬に相續させることを、幾分か早めるに違ひない。又、愛妾お由良の一味に、なつて居る者の中では、笑左衞門が首領であるから、其者に是だけの事を、言ふて聞かせれば少しは效目もあるだらう、と、心密かに、期待して居たのであつた。

翌日は、登城して、將軍の御前へ出た。其折に、伊勢守から、將軍家慶へ、琉球事件に就て、梗概を申し上げて、尙その上に、齊興父子を招いて、然るべく其處分方を、お命じになつたら宜からう、といふ事まで、入れ智慧をした。家慶は、實をいふと、餘り偉い人ではなく、唯だ俗に謂ふ、好人物といふ方で、極めて溫順に生れた、飾付けの人形

にも、等しい、將軍であつた。他迄も、信用して居る、伊勢守から、此入れ智慧をされたから、そこで、島津家へ、沈が下つて、齊興父子に、登城を命ずる事になつた。

齊興へは、笑左衞門が、歸つて來て、伊勢守と、對面の顚末を物語つた。將軍家とは、深い緣續きに、なつて居る島津家の事であるから、今度の事件で、これ程苦しんで居る事を、上申したならば、一も二もなく採用されて、何事も、幕府の方から、便宜の取計ひをして呉れるものとばかり信じて居た所が、意外にも、老中の伊勢守から、皮肉の限りを盡されて、殊に、齊彬の相續が遲れて居る事は怪しからぬ、と言はぬばかりの口調で、笑左衞門も、痛み入つて、歸つて來た事を、聞いて見ると、流石の齊興も、心中甚だ平かでなかつた。所へ、改めて將軍家から、明日の登城を、促されて來たのであるから、これには、益々、恐縮して、翌日は、齊彬を同道で、愈よ登城をする事になつた。

諸侯の控席には、それ〴〵區別があつて、身分や役柄、又は知行高に依つて、その控席は、各々相違があるやうになつて居たので、齊興父子は、同じ控席に入つて居ると、伊勢守から、使ひが來て、齊彬だけを、御用部屋に呼入れたから、跡に取殘された、齊興は、不快の感を持つたが、さればとて、故障を言ふ事も出來ないから、唯だ空しく、齊彬は案內されて、老中の御用部屋へ入ると、伊勢守は、輕く會釋して、

『お呼立て致して、甚だ御無禮で御座つた。サア此方へ……』

と言つて、席を讓る。普通の大名の若殿ならば、老中が、自ら席を讓つて、叮嚀な會釋は無いのだが、伊勢守は、齊彬の爲人を信じて、今日の境遇を、氣の毒に思つて居るのであるから、極めて叮嚀な取扱ひをするのは、今に始まつた事ではなかつた。齊彬も、極めて慇懃に會釋して、

『此度の事に就ては、段々の御配慮、有難く存じまする』

『何の、是しきのこと、今日は、上樣へ拜謁の上、何かとお尋ねの儀も御座らうから、前以て、尊公の結局の思召を伺ふて置きたいのぢや』

『成る程、そりや、何ういふ事で、御座るか』

『此度の件に就て、尊公の思召は何うであるか、先づ、それを尋ねて置きたい』

『別に是と申して、考もありませぬが、今日の事態、最早止む事を得ませぬ故、貿易の儀は、琉球國王の名を以ちまして異人に許させる事に致し、唯だ天主教を弘める、といふ事だけは、飽迄も拒ませる外に、良策はあるまいかと心得まする。異人の方に致しても、貿易は許されたが、布教は許されぬ、とあれば、幾分の故障は申出づるでもあらうが、既に是までの讓歩を致した以上は、結局、その纏まりは判つて居りまする故、是非、此見込を以て、談判を進ませ度く、存じ申す』

伊勢守は、ハタと、膝を打つて、

『如何にも御名案、それならば、無事に納まりも付きませう。宜しい、其儀は然るべく、上樣へ、申上げて置かう』

唯だ是だけの事を聞く爲に、齊彬を呼んだのだ。これから、伊勢守は、將軍へ、齊興父子が來た事を報ずる。そこで、愈よ將軍は、兩人を引見する事になつた。

七

薩藩が、琉球へ手入れをしてからは、長い年月も、經つて居て、殆んど琉球は、薩藩の領土の如き、形になつて居たのである。本來から言へば、幕府が、直接に手を入れて世話を燒く筈であるが、これをせずに、薩藩の意の如く、爲せて置いた、といふ點から考へても、一旦、琉球に、事が起きた時は、幕府の力を借らずして、薩藩が、自ら、之を治めて行くといふのが、道理である。然し、琉球の內部を、治めて行くだけならば、薩藩の力だけでも出來やうが、

英吉利や佛蘭西が、乘込んで來て、琉球を荒すとなつて、見ると、之を抑へて行くのには、薩藩の力だけでは、六ケ敷いのだ。幕府の方にして見ても、琉球の支配は、薩藩へ、任せて置いたにしろ、愈よ異國と、事端を開く事になれば、結局の責任は、矢張り、幕府へ被さつて來るのであるから、全然、そんな事は知らぬと、言ふて、脇を向いて居る事も出來ないのである。どうせ、幕府が、力を貸して、專ら薩藩をして、その處置を盡させる、といふ樣にして、行かなければならないのだ。

然るに、齊彬相續の事が、長い間、行惱んで居て、それが爲に、伊達宗城からも相談があり、殊には、自分が、齊彬を、信ずること深く、從つて、其交際も尋常でなかつたから、何かの機會を以て、齊彬相續の運びをつけてやらうと、密に考へて居た所へ、琉球事件が持上つたのであるから、之を幸ひに、伊勢守は遠廻しに、齊彬の相續を早めようと、考へたのである。今日の將軍謁見の手續をつけたのも、矢張り眞意は、其處に在つたので、表面は何處までも琉球事件の爲と、いふ事にしてあつたのだ。

齊興父子は、將軍家慶への謁見も、首尾好く濟んで、更に別室へ移つてから、伊勢守より、上意のある處を聞かされた。それに依つて見れば、世嗣の齊彬をして、此件を取扱はせる、といふの意味であつた。斯うなつて見ると、今更に齊興は、之を拒む事も出來ず、すぐに其手續を、履まなければならぬのである。將軍から、指圖に依つて、齊彬が、此事件の裁斷を爲る事になれば、どうしても、齊彬の相續は、動かす事は出來なくなるのであるから、笑左衞門はじめ、お由良の一味は、此一件から、ひどく力を落してしまつた。尤も、齊彬の相續は、止むを得ぬとしても、なるべくは、齊彬の養子として、久光を、擁立てたいの考はあつたのだから、落膽はしたやうなものゝ幾分の望みはまだつながれて居たのだ。

齊興父子が、愈よ拜謁の式が濟んで、城を下る時分に、將軍から改めて、齊彬へ、名馬一頭を、下し賜つた。他から物を貰つて、偉くなるといふのも可怪な譯だが、其時分の習慣から言へば、將軍に拜謁した、諸侯の世嗣が、馬を

貫つて來る、なぞといふ事は、餘り例の無い事で、是に依つて見ても、齊彬が、島津家の當主になるのは、當然である、といふ事は、將軍が、既に認められて居るといふ、理窟になるので、益々、齊彬の位地は、安全になつて來たのである。

斯うした事情から、愈よ齊彬が、歸國をする事になつて、支度も忽々に、江戸を出發する。道中は、大急ぎに急がせたけれど、其時分の事であるから、存外に、日子が取れて、十八日餘り掛かつて、漸くに鹿兒島へ歸つて來た。

そこで、直に琉球へは、然るべき役人を、使者として送り、貿易は、許してやつてもよいが、布敎は固く拒絶しろといふ事を命じて、同時に、山川港を、琉球と、薩摩の中繼の港として、此處に、一隊の兵を備へ、更に海岸通りには、砲臺を修築し、それ〴〵に兵備を整へて、齊彬は、國老を引連れて、自ら沿岸の巡視を始める、といふやうな譯で、此時に鹿兒島へ、大砲の鑄造所を、設けたのである。

此機會を利用して、齊彬は、藩の軍制上に、一大改革を行つて、今まで、異國方と、稱へて居た役を、軍役方と改め、從來の習慣に依つて、爲し來つた、舊式の軍制は、總て破壞して了つて、其方の監督には、久光を用ゐた。又、和蘭の兵書を飜譯させ、それを手本として、新式の軍制に依つて、募つた兵士を、吉野原に集めて、大砲小銃の發射演習を行ひ、日ならず出來上つた、五十斤砲の、實地試驗を、行るといふやうな譯で、恐らく此位の大砲の、發射演習を行つたのは、日本に於ては、初めての事であらう。

今までは、本當の部屋住で、自分の考へた事も、公然、行ふ事が出來なかつたが、將軍と、阿部老中の口添に依つて、初めて藩政に對する、實權に與かる事が出來たのであるから、今まで考へて居た理想を、遠慮なく行つたのである。

かくて、英佛の二國へ對しては、琉球國王が、改めて條約を結んで、貿易は許した。けれども、布敎の一條だけは其條文から、削つてしまつた。是に就ては、薩藩の後押があつたから、さうなつたのであるが、若し、琉球國だけの

談判であるならば、迚も、さういふ事は、出來なかつたであらう。其間に於ける、齊彬の活動は、非常なものであつて、在國、一年半に及んで、薩藩の面目は、全く一變する事になつた。

琉球事件の、大體が片付いて、幕府の方へ、其報告に及んだ。そのうちに齊興も、參覲の期限が滿ちて、歸國する。幕府の內命とあつて、齊彬は、父に代つて、江戸へ出る事になつた。齊興の歸國に從いて、笑左衞門は、お供をして來たのであるが、愈よ齊彬が出府する、となると、更に自分から、願つて出て、齊彬のお附になつた。その上に、二階堂志津馬も、亦齊彬御附といふので、笑左衞門と共に、相携へて出府したのは、片時も、齊彬の擧動に就て、注意を怠らぬ爲で、その用意に油斷のないのは、流石であつた。

八

幕府の方では、琉球事件の處置について、何處までも、薩藩へ、一任して置いたのだが、それでも、幾分の心配はあつたのだから、幕府は、また幕府として、相當の手入れは、試みたのであつた。此事は、薩藩も、承知の上であつたが、今日までの薩藩と、琉球との關係を、調べて行くうちに、何時か知らず、薩藩が、琉球を利用して、淸國と、密貿易をして居た事實が、現れて來たので、是には、幕府の役方も、聊か驚いて、段々、調査をして見ると、愈よ事實である、といふ事が判つた。而も、數年來の密貿易は、金高にして見ても、實に夥しいもので、當時の國法としては、斯樣な事を、見遁すべき譯はなく、是は一大事である、といふ所から、島津家の老臣、一二を呼んで、訊問に及んだ。

從來、薩藩に於ても、その方の事は、一切、調所笑左衞門が、引受けて居たのだが、老臣も、多少は、その事實を知らぬ筈はなかつた。それが發覺して、嚴重な取調べを受けたのだから、老臣の驚きは一通りでなかつた。密に、齊興へ、其旨を通ずると、是も亦驚いた。實は、笑左衞門の發意から、行つた事には違ひないが、自分が、其獻策を容

れたのが原因になつて、長い間の密貿易、それが今、發覺したとあつては、島津家の興廢にも關する、問題になつて來たのであるから、齊興の心配は、老臣の眼にも、見える位であつた、といふ。幕府の役方は、嚴重なる取調べをして、その證據を握つたから、晝夜兼行で、江戸へ引上げて來た。

琉球處分に就て、齊彬は、十二分の働きをして、幕府の方にも、その手腕の、凡ならざるを認められ、將軍へ推薦した、伊勢守としても、亦面目を施した次第であるが、齊彬の評判は、內外に段々、高くなるばかりであつた。

或日、三田の藩邸に在つた、齊彬は、琉球處分の書類を、家來に命じて、整理させて居た所へ、國元から、急飛脚が到着して、色々な書面が、齊彬の前に、積上げられた。其中に、山田市郎右衞門からの、書面が一通、是は餘程、秘密なものと見えて、特別の狀挾みに、嚴封されてあつた。左右の者を遠ざけて、密に齊彬が、披いて見ると、意外千萬にも、密貿易發覺の事に就ての、注進であつた。

『幕府役方の取調べ嚴重にして、老臣共も、其辯疏に苦んで、事實の一部は、既に認める事になつた。役方の手に、調査された密貿易の事實は、確實に、證據が擧つて居るやうで、既に役方の者は、いづれも、江戸へ急いで、引揚げた』といふ事が、詳しく報じてあつて、『それに就ては、自分も、是より發足して、委細は、拜謁の上申述べるが、兎に角、此事は、琉球事件よりも、重大事であつて、一歩を誤れば、島津家の興廢に關する、面倒な問題であるに依つて、充分に御考慮を、煩はし度く存じ奉る』との文面であつた。流石の齊彬も、顏の色が、變るまでに驚いて、唯だ太い息を吐いて、事の成行を、悲觀するばかりであつた。此事は、笑左衞門の方へも、既に一味の者から、急使を以て、知らせて來たので、笑左衞門も、一時は、ギョッとしたが、そこは仲々、膽玉のある男であつたから、自分の決心だけは、既に決つたもの、と見えて、其後は至極安靜にして、後の便りを、待つて居た。

『ハツ、申上げます』

『何事ぢや』

『唯今、お國元より、山田市郎右衞門到着いたしまして、至急、拜謁を願出でまして、御座りまする』

『ウム、左樣か、待兼ねて居つたのぢや、疾く、これへ通せ』

平生は、なか〳〵落付いて居る、齊彬も、此時は、大分焦り氣味で、待兼ねて居たのだ。軈て、案內されて、市郎右衞門は、御前へ罷出た。

『オー、市郎右衞門か、遠路大儀であつた』

『ハ、ツ』

『其方が、逸早く知らせて來た一條は、予も、深く苦心して居る所ぢや』

『此儀に就きましては、老臣の方々とも、一通りならぬ苦心は致しましたが、既に公儀の御役方が、一切の證據を、握り居りまする爲に、如何とも辯疏の途はなく、唯だ今後の成行のみ、心配して居る次第に、御座りまする』

『父上思召は、如何ありしか。其方、承り參つたか』

『其儀は、頓と相判りませぬ。御承知置かせられまする通り、私共は、大殿樣、御前の首尾惡く、なか〳〵に、斯樣な秘密の事に立入つて、思召を承る程の力も、御座りませぬ』

『ウム、それは然うであらう。何に致せ、此一事は、藩の浮沈に掛かる事で、予も、樣々に苦心はして居るが、何と致して、公儀の方を取繕ふてよいか、其邊に就ては、まだ何等の考案も浮ばぬのぢや。其方は、何事に就ても、心利きたる者なれば、充分の考案を、立てゝ貰ひたい』

『お言葉にて恐入りまする。愚鈍の生れにして、公儀御役方へ對する、辯疏の分別等は付きませぬが、如何樣の事を致しましても、此一事は、無事に納まりを付けませねば、ならぬので御座りまするから、篤と熟考の上、更に愚存の程を、申上げまする』

『何分共に、頼み入るぞ』

『ハツ』

市郎右衛門は、一時、御前を下つて、自分の控席で、また思案に暮れた。

九

幕府が、鎖國令を布いて、長い間、交通貿易を、禁じて居たにも拘らず、薩藩が、密貿易を行つて、少からぬ利得を、毎年、擧げて居た事は、幕府の方から見れば、容易ならぬ事件で、薩藩へ對して、嚴重な處分を加へるのは、固より當然の事である。今日の時勢に比べると、實に馬鹿らしい事ではあるが、兎に角、外國と、秘密に貿易をして居た、といふ事は、其時代から考へたら、由々しき大事であつたには、違ひない。島津家と、德川家とは、姻戚の關係があるとか、又は同じ諸侯の中でも、島津家は、九州に於ける大藩で、何時も、德川家は、一目置いて、取扱つて居るとか、斯ういつた風の事情に囚はれて、若し、此處分を忽諸にしたならば、これから將來、各藩へ對する、取締が行屆かぬ事になる。斯ういふ立場からすれば、幕府は、どれ程、取扱ひ難くとも、此事件に就て、薩藩に對する處分は、嚴重に執行しなければ、ならぬ筈である。

事の露顯した以上は、薩藩に於ても、亦それだけの覺悟は、あるべき筈であるが、さればとて、之を明白に、薩藩の責任として、その處分を、受ける事になれば、或は島津家に、大きい瑕が附いて、薩藩の浮沈にも、關する事であるから、まさかに、密貿易をして國の禁制を破つたのは、誠に申譯がありませぬと、表面から謝つてしまふ譯にもいかぬ。何とか口實を設けて、事を、小さく纏める、必要はあつたのだ。殊に、大殿の齊興は國詰で、若殿の齊彬が、江戸在府の時に、斯うした難件が起きたとして、見れば、齊彬の身に取つては、父の心配を、深くしない内に、事の始末を、つけて了ひたい、といふのは、無理もないことである。

幸ひに、山田市郎右衛門が出府したので、齊彬にも、幾分の安心はあつた。全體、市郎右衛門が、齊彬の爲に、今まで苦心して居た事は、一通りでない。その事情の一斑は、既に、述べて置いたが、思慮もあれば、膽力もあり、事に臨んで、存外に深い才覺もある。何れの點から見ても、多く得難き名臣であつた。されば、齊彬が、山田を信ずる事は、頗る深かつたのである。此人に就て次のやうな、面白い逸話がある。

島津家十八代の當主、家久は、非常な名君で、中納言にまで、進んで死なれたのであるが、此御方の木像が、紀州の高野山に、安置されてある爲に、島津家から、年々の奉納金は、夥しいものであつた。

全體、日本人が、先祖を祀る習慣は、長い間の事であつて、迚も、西洋の人なぞが、窮び知る事の出來ぬ程にまで此一事は、上下を通じて、行はれて居たのである。苟も、一家を成して居る者として、祖先の靈を祀る事に就ては、我れ劣らじと、金を掛ける。敢て好んで、金を掛ける譯でもなからうが、兎に角、その祭祀を、立派にしようとすれば、自然と、金が掛かるのだから、致方がない。餘計な貯へのある人は、どうしても、その祭祀に就て、澤山の金を掛けるやうになる。況して、諸侯の家に於ては、無駄をも厭はず、澤山の金を、掛けたものであつた。

今でも、各地の郷會へ、行つて見ると、昔の藩政時代に、土地の領主が、建立した寺院が、澤山遺つて居るが、今日のやうな時世になると、何れも、その維持費に逐はれて、殆んど廢寺同樣に、なつて居るものも、少くはないのだ。漸く世間が開けて、西洋の氣風が、段々と泌込んで來るに從つて、先祖を祀る事を忘れる、といふ譯でもなからうが、自然と、その習慣が、廢れて來て、昔のやうに、さういふ事に就ての浪費が、少くなつて來る。その結果が、大きな寺院の維持に困る、といふやうな事にも、なつて來るのだ。現に、三河の岡崎へ行つて見ると、有名な大樹寺といふ、由緒のある寺が、今日では、德川家からの保護が、少しもないといふので、その維持に困つて、立腐れになるのを待つ、といふ狀態になつて居る。こんな事は、到る所で、見聞するのであるが、善い事か、惡い事かは判らな

いが、兎に角、先祖の祭祀が、だん〳〵衰微して來る事を考へると、何となく心細いやうな、感じもする。

尤も、之に就ては、寺を預かつて居る、坊主の惡い點もあるのだ。檀家の者が、先祖の位牌を預けて置く、といふので、大概な無理は聽いて、金を出すのを好い事にして、矢鱈無性に、金を集めては、無駄遣ひをする。坊主の亂行から、檀家が迷惑を蒙る事は、一通りでない。先年來、いくたびか騷ぎを、くり返して居る、本願寺の事といひ、或は、其他の宗門に起る、醜怪な事件といひ、何れも檀家から、乞食が物を貰ふやうにして、集めて來た金を、坊主が妾狂ひや、勝手な事に向つて、濫費した結果が何時も騷動の因になつて、居るのであるから、檀家や信徒が、厭氣が差して來る所へ、一般の氣風が、昔のやうに、先祖の祭祀に就て、無限に金を掛ける、といふ事が、無くなつて來たから、そこで、到る處に、寺院の維持が出來ない、といふやうな事にも、なつて來たのであらう。

よく考へて見れば、先祖を祀るのに、金を澤山使ふから、先祖の恩を忘れないのだ、といふ理窟も、ないのであるから、唯だ心ばかりの祭祀をしても、その志が、先祖を思ふ、といふ一點にあるならば、強ひて澤山の金を、使ふにも及ばないのだ。坊主の贅澤をする、無駄な金を、注ぎ込んで、それが、先祖へ對する、孝道になる、といふのも變な譯であるから、唯だ譯も分らずに、坊主を拜んで居る、時代が去つた、今日となつては、右樣の事になるのも、當然なことだ、と思ふ。

島津家が、中興の先祖たる、家久の木像を、預けて置くのを幸ひとして、高野山の坊主が、種々の名義を設けて、島津家から、金を絞り取る事が夥しいので、遂には島津家でも、さう〳〵は、金が出せない、といふ所から、自然とその要求に應ずる事が少くなる、といふのは、島津家が、惡いとのみはいへない。高野山の坊主が、自らを制する事の力が少いから、そんな事になつて、來たので、是が爲に、高野山と、島津家の間に、面倒な鬪爭が、持上る一條は、續いて述べることにしよう。

一〇

家久の木像を、預つて居るのを幸ひに、高野山からは、年々、金の無心を、言ふて來る。それが無くとも、島津家では、相當の附け屆けは、爲て居るのであるが、貪つて飽く事を知らぬ、坊主等は、或は、本堂の修繕だ、とか、或は、御山の手入れだ、とか、樣々の口實を設けては、島津家へ、出金を迫つて來るのが、一年の中に、仲々の額に上る。島津家では、家久の木像を、大切にして貰ひたい、と思ふ一念から、二つ返辭で、何時も、金は出して居たのである。

重豪が隱居して、齊興が、當主になつた時、薩藩の財政整理が始まつた。卽ち、調所笑左衞門が、腕を振つて、整理を遂げた時代の事であるが、一方では、收入を殖す、と同時に、他の一方に於ては、出費を節約しなければならぬといふ、大體の方針から、高野山へ納める、金の額が少くない、といふ事に氣が付いて、つまりは、家久の木像が、預けてあるから、斯ういふ無駄な、費用も掛かる、依つて、其木像を取戻して、藩邸の中へ祀るか、城下へ奉祀して了へば、自然と、費用も、少くて濟むのであるから、木像は、取戻した方が可からう、といふ事に、重役や老臣の意見が一致して、改めて高野山へ、家久の木像取戻の、懸合ひに及んだのである。

所が、高野山の方では、そんな事をされては、大切な弗箱を、失ふやうなものであつて、餘計なものは貰はぬとしても、木像のある爲に、年々、定つて送られる金だけでも、少くないのであるから、今之を持つて行かれては、それだけ、寺の收入が、減ずる事にもなる、といふ算盤勘定から、どうしても、之を引渡さう、としなかつた。追々の談判があつた末、島津家の方でも、行掛りの理窟を捏ねて、何でも持つて歸る、と言ひ出した。

茲に於て、坊主等が、集會をした末、その木像を隱してしまつて、島津家へは、新たに使僧を立て、木像は、紛失してしまつた、といふ事を申出た。かうなつて見ると、島津家でも、打棄て置く事が出來ず、すぐに然るべき人を選

んで、高野山へ遣つて、調べて見ると、成る程、今まで安置してあつた、木像は、影も止めず、坊主の言ふ通りに、無くなつて居るのだ。段々、聞いて見ると、泥棒の入つたやうな形跡もなく、また泥棒が入つたにしても、島津家に取つてこそ、大切な木像であるが、泥棒が、持つて行つた日には、三文にもならぬもので、寺へ忍び入つたにしても外に盗んで行くものは、澤山にあるのだ、それ等の物には、手も附けずして、此木像だけを持つて行く、といふのはどう考へても、不思議である。兎に角、島津家の使者は、鹿兒島へ歸つて來て、此旨を上申した。

他のものと違ふて、先祖の木像が無くなつた、といふのは、仲々の大事件であるから、老臣や一門の方々も集まつて、相談して見たが、これは、高野山の坊主が、巧みに木像を隱して、島津家への引渡を、拒む方便としたに、違ひない。然る以上は、どんな事をしても、木像を搜し出して、坊主共に、鼻を明せてやらなければならぬ、といふ事に相談が纏まつて、さて誰を、その役にしたら、宜いかとなると、山田市郎右衛門が、自ら願つて出て、是非、自分が其任に當りたい、といふのであつた。

山田は、藩中に於ても、評判の良い人で、殊には、京都在勤の者で、偶々、鹿兒島へ歸つて居たのであるから、これは、山田に、此役目を申付けるのが、最も好都合である、といふ事に、評議は一決して、山田は、此大役を擔ふ事になつたのである。

どうせ、坊主等が、押隱して居るものには違ひないが、それを搜し出す、といふのは、容易な事でないと、初めから覺悟して居た、山田は、此大任を、自ら進んで引受ける、と同時に、大小を棄て、町人姿になり、高野山へ乘込んで來て、探つて見ると、どうしても、盗まれた形跡は無い。そこで、當分は、足を止めて、各寺院へ、それとなく出入して、内情を探らう、といふ決心にはなつたが、唯だ寺へ出入したのみでは、迚も判る譯はない。

高野山全體の、寺院の數は、頗る多く、集まつて居る坊主の數も、少くないのであるから、毎日のやうに、買入れる食料品も、夥しい事である。其中でも、三度の食事に、必ず一度は、缺く事の出來ないのが、豆腐であるから、

豆腐を賣込んで、臺所から、其秘密を探り出さう、といふ事を案出して、山田は、豆腐屋にならうと、深く覺悟は極めたが、自分は、薩摩に生れて、武士となるべき修業はしたけれど、豆腐を賣る事は、全く勝手違ひの事であるから、兎に角、身を落して、一先づ、豆腐屋へ入り込んでからの、事でなければ、之を試みる事も出來ないのである。幸ひ、自分が、泊つて居た、宿屋の主人が、存外に飄輕な、面白い男であつたから、此者を取込んで、うまく周旋させよう、と、定て、これから主人に、相談する事になつたのである。

一一

初め、山田が、此宿屋へ、泊つた時から、自分は、九州の生れで、長く京都に來て居たのであるが、弘法大師を、信仰する者で、長い間、心掛けて居た、高野山詣りが、漸く出來るやうになつて、やつて來たのだ、といふやうな事を、言葉巧みに、宿の誰彼れにも聞かせて、毎日のやうに、各寺院を廻るにしても、無論、その信仰心を滿す爲めに參拜するやうに、見せ掛けて居たのであるから、宿の主人も、山田に對しては、感心な信心家である、といふ考は、持つて居たのである。その信用を利用して、巧く主人を、說付けて見ようと、玆に思案をきめて、或日のこと、主人に面談を求めたのであつた。

『時に、御主人、ちと折入つて御願ひしたい事があるが、お聽き下さらぬか』

『ヘイ、どういふ御用でございますか、お伺ひ致しませう』

『他の事でもないが、私は、當分の間、御山に足を止めて居たい、と思ふが、それに就て、お前さんのお骨折を、願ひたい事がある』

『ハ、ア、御山に、暫くお在でになりたい、と仰言るのですか』

『左樣』

『そりや、全體、どういふ譯でございますか。旦那が、私の所へ、お泊りになつてから、大分日數も經ちますが、毎日のやうに、御山を廻つては、お歸りになる。お見受け申す所では、まだそれ程の御年配でもなし、神信心に、其日を送るといふのは、如何にも感心なお方と、實は家内とも、申合つて居た位で、ございますが、何か御心願の次第でもあつて、さういふ事になさらう、といふので、御座いますか』

『實は、私も、長い間、心掛けて居て、漸くの思ひで、御山へ來ることが出來て、毎日、信心廻りはして居るが、生れてから今日まで、これ程、快い氣分で、日を送つた事はない。これといふのも、世間の厭な事を忘れて、神詣りをするお蔭である、と思ふ。お前さんが、今言はれた通り、私には、少し心願の筋があつて、斯うして居るのだが、尙此上にも、信心を續けたいと、發心したのだ。宿屋泊りをして、贅澤な信心では、神樣も、願ひを叶へて下さるまい。是非、當分は、御山の人になつてしまひたい、と思ふて、それで、些とお賴みをしたいのです』

『へ、ー、それは結構な、お心掛けでございます。併し、旦那は、どう見ても、普通の町人とは思へませぬ。家内と話合つた事ですが、姿形や、言葉つきは、何處までも町人と、いふ御樣子ですが、時々、お武家ではないか、と思ふやうな節もあつて、何か仔細のあるお方ではないか、と思つて居た譯ですが、なアに、そんな事は、深くお尋ねをする迄もなく、又旦那も、お秘しなさるには及ばないのです。此御山には、お武家が、自分の失策から、一時、身を隱す爲に、參つて居る、といふやうな御方も、澤山あるので御座いますから、別段、旦那が、さういふ御身分のお方である、と致しましても、私の方では、旦那のお心を疑つて、信心の邪魔をする、といふやうな事は、決して致しません。却て、打明けてお話し下されば、一層力の入れやうもあるので御座いますから、寧そ、今日までの御身の上を打明けて、お話し下さる事は出來ませぬか』

斯う言はれて見ると、山田も、實は薄氣味が、惡くなつて來たが、然し、自分の來て居る用件を、知つて居る譯ではなく、唯だ自分が、巧く町人に化けたつもりであるが、生れ落ちてから、長い間の武家生活に、すつかり泌み込んで居る、武士氣質の拔けない所を、流石に客商賣をして、多くの人を、扱ひつけて居る眼から見て、武士が町人に成り下つたものと、思ふたにすぎないのであるから、別に心配するほどの事ではなく、寧そのこと、眞事僞事打混ぜて、此主人を、巧く抱き込んだ方が宜からうと、山田は、敏くも覺悟を決めた。

『流石に御稼業柄、その見極めには感心いたした。實を申せば、近い頃まで、大小差した身の上であつたのだが、それと打明けて、言はれぬ仔細があつて、國元を出奔して、色々と苦心した末、此御山へ登つて、一心に神信心をしたならば、今までの苦艱を、免れることも出來やうかと、斯うして毎日のやうに、お山廻りをして居るのであるがさういふ秘密のある者でも、お前さんは、世話をして下さるか』

『何の、その心配には及びませぬ。此御山は、どんな惡い事をした者でも、一旦、逃込んで來たならば、公儀の力でも、手をつける事は、出來ない事に、なつて居て、兎に角、御山へ來た者は、皆今までの惡い事を後悔して、神樣に仕へる、お方となつて居るのですから、旦那が、そのお心でさへあれば、一向差支はないので御座います。どんなお世話も致しませう』

『それを聞いて安心いたしたが、別に惡い事をした、といふのではないので、唯だ他人に打明けられない事が、身に降り掛かつて、どうしても、神信心の功德で、今までの苦悶を遁れたい、と思つて來て居るのであるから、他日、お前さんに、御迷惑を掛けるやうな事はないのだ』

『宜しう御座いますとも、さういふお話なら、尙更の事ですから、どんな事でもして、お世話を致しませうが、全體、お賴みといふのは、どんな事なんですか』

と言はれて、山田は、懷中を、モヂ〳〵やつて居たが、軈て取出したのが、胴卷であつた。蛇が蛙を呑んで居るやうに、膨れて居る。胴卷の片端を執つて、少し振るやうにして引立てると、づる〳〵ツと、出て來たのは金の包みだ。宿の主人は、之を見て、眼を圓くして居る。

『實の所を打明ければ、貯へも此通りあるから、宿屋住ひをして、お山廻りをするのに、一年位は何でもないのだが、それでは、自分の信心にならぬ。そこで、御山の御用を達すやうな、商賣に從事いて、自分の身を苦しめて御奉公しなければ信心の甲斐もない、といふ考になつて、色々考へた末、豆腐屋へ、奉公住みをしたい、と思ひ付いたのだが、今日は改めて、その御周旋を願ひたい、と思つて、相談する譯なのです』

之を聽いた、宿の主人は、意外な思ひをしたのは、どんな事を頼まれるか、と聽いて居ると、豆腐屋へ奉公したいといふのだから、餘りに自分が、想像して居る所とは違つたので、

『それは妙な事を、お考へになつたものですが、どういふ譯で、豆腐屋へ奉公したい、といふやうな、變な事を考へたんで御座いますか』

『別に深い仔細はないのだが、お山の寺々で、毎日のやうにお入用の豆腐、それを臺所へでも、運ぶ役でもしながら、坊さん達にも懇意になり、誠實に働いて見たならば、つまり、お山の御奉公になる、と思つて、斯ういふ事を、考へ付いたのです』

『成る程、それは、良いお考です。今まで此御山へ、來た人も澤山あるが、こんなに澤山、お金を持つて居ながら、わざ〳〵豆腐屋へ奉公して、信心をしようといふやうな、結構な心掛けを持つた御方は、たんとありません。實に旦那は、見上げたお方ぢや。私も、感心いたしましたよ』

『さういふ風に、御同意下されば、此上もないことであるから、兎に角、私の身元も極めず、御世話をして下さる、お前さんの、御親切に對しては、何處までも、反く事は出來ぬ。若し私の身に、不都合な事があつたならば、其時の處置は、お前さんに、定けて貰はなければならぬのだから、此金は全部、お前さんに、預けて置く、どうか、それを私の身元保證金として、預つて置いて下さるまいか』

主人は、手を振つて、

『飛んでもないことを、仰言る。こんな大金を、お預かり申して、他人樣の世話をするといふやうな心掛けでは、此御山へ信心に來る方々の、お宿はして居られません』

『イヤ、さうした正直な考を、持つて居ればこそ。お前さんの家も繁昌するのだ。その正直なお心を、見込んだ以上は、尙更ら之を預つて置いて、貰はなければならぬ』

と、押問答をして居る最中へ、襖を開けて、次の部屋から、入つて來たのは、此家の女房さんである。

一二

世に、似た者夫婦と、いふ諺がある。宿の主人が、飛んだ世話好で、人から頼まれたら、否と言ふ事の出來ない、氣象を持つて居る所へ、其妻が、また此上もない世話燒で、少し出過ぎて、亭主を、尻り敷く氣味はあるが、人の世話をするのが、道樂のやうになつて居て、何時も、人の噂に上る位の女であつた。日本全國から、高野詣に行く人の數は、一年に積れば、隨分澤山ある。その人達が、大概は、此宿屋へ泊つて、夫婦の厄介になるのだ。一度泊れば、その親切に世話をして呉れた事を忘れず、皆が段々と吹聽して、それからそれへと、客は殖えるばかりである。中には、御山へ信心して來る、といふよりは、此宿を、信仰する人もある位で、家業の繁昌は、他の羨む程であつた。

丁度、懇意な所へ、用事で、出掛けて行つて、今歸つて來たら、自分の亭主と、逗留客が、頻に話込んで居るから次の座敷で、今までの話を、すつかり聞いて居たのだ。元來が、世話好の上に、此お客を、日頃信じて居る。それさへあるに、胴卷の金を並べて、此押問答であるから、親切と慾と、二つが手傳つて、お女房さんは、堪らなくなつて、出て來たのだ。

『オヤツ、お前さん、お客樣と、話をして居たんですか』

主人は、振向きながら、

『ウム、何時歸つたんだ』
『唯今、歸つて來て、話聲が聞えるから、覗いて見たら、お客樣とのお話ですから、遠慮して居たんですが……』
と、言ひ乍ら、山田の方へ向直つて、鄭寧に會釋して、
『どうも、永々御逗留下さいまして、有難う存じます。亭主は此通りで、ちつとも行屆かないので御座いますから、何事につけても、御不自由勝ちで御座いませう。どうか、御勘辨下さいませ』
今度は、亭主の方へ向つて、
『お前さんは、何故、そんなに氣が付かないんでせう。お客樣と、お話をするにしても、何か一口差上げたら、宜いぢやありませんか』
『そりや、已だつて、氣が付いて居たんだが、お前が居なかつたから、マア歸つてからにしよう、と思つて、旦那のお相手をして居たんだ』
『それぢや、何か淡泊したものを、言ひ付けて、御酒でも燗けませう』
と、立上らうとするから、山田は、之を抑へて、
『イヤ、その御心配は、御無用ぢや。どうか、此儘にして置いて貰ひたい』
『それでも旦那、一ぱいやり乍らでなければ、話がはづみませんからね、オホ、、、、、』
『折角のお心入れだが、まだ飲みたくないから、それは却て御遠慮申す。兎に角、御主人、唯今、お願ひ申した事は、是非御承知を願ひたいが、どうだらうか』
『それは、否も應もないのです。初めから私は、請合つて居るぢやありませんか』
『それに就ては、此金子を、身元引受の代りとして、預つて置いて貰ひたいのであるが、是はどういふ事にして下さる』

『そんな物は、お預かり申すことは出來ません。私は、隨分他人樣のお世話はしますが、お金の爲にどうした、といふやうな事を言はれると、家の名前にも障りますから、心苦しう御座います。是は强つて、御辭退申します』
『然し、此金を、お前さんに進ぜよう、といふのでは無い。たゞ一時の身元保證代りとして、お預かり置きを願ひたい、といふのだから、別に仔細はなからう、と思ふが……』
山田は、女房さんの方を向きながら、
『どうです。別に差支はないでせうと、思ふが、お前さんはどう考へますか』
女房さんは、眼を細くして、
『えゝ、さうですとも、そんな事は構ひやしません。何も、此お金を戴く、といふ譯ぢやない。ほんの一時の所、お預り申す、といふのに誰が何といふものですか。お前さん、折角、旦那も斯う仰言るのですから、お預かり申して上げたら、宜いぢやありませんか』
主人は、頭を搔いて、
『さうかな。何だか、心苦しいやうな氣はするが、さういふ譯なら、お預かり申して置からうか』
『さうおしなさいよ。差支ありやしませんやね』
山田は、茲ぞと、膝を進めて、
『どうか、さうして下さい。若しお役に立つならば、融通して下すつても差支ないのだから、其邊の事は心配なく、預かつて置いて下されば、私も、滿足が出來るのです』
そこで、宿の主人も、此金を預かつて、山田の世話を、爲す事になつた。
幸ひ、此宿屋へ、出入をして居る、豆腐屋が、矢張りお山の出入であるから、山田を、其家へ世話をしよう、といふ事が、略決つた。初め此家へ泊つた時から、市兵衞と、名乘つて居たから其儘、市兵衞といふ名で、宿の夫婦が、

保證人になつて、豆腐屋へ住込む事になつた。

山田の考では、出來上つた豆腐を、寺の臺所へ、運び込むだけを引受けたい、といふ希望であつたが、さて住込んで見ると、そんな勝手な事も言へず、豆腐屋の方にして見れば、使ひ頃の雇人を、置き當てた、といふ考で、遠慮なしに用事を、言ひ付ける。夜明け前から起されて、水を汲むやら、豆を洗ふやら、一通りの苦しい勤めが濟めば、それから臼を廻して、豆を挽く、何から何まで、人間の勤まる事ならば、遠慮なく使ひ廻す、といふ遣方であるから、その當座は、山田も、聊か閉口したけれど、ぢつと辛抱して、斯ういふ辛い奉公をするのも、御家への御奉公であり、家久侯の木像を、搜し出す手段である、と思ひ諦めれば、どんな苦しい事も、辛抱は出來る筈だ、と、自分で、自分を勵まし乍ら、一心に働いて居た。

今日は、豆腐の運び方を、言ひ付けられるか、明日は、愈々其方の役目に當るか、と、それを樂みに、せつせと働いて居たが、一向にそんな事は、言ひ付けないで、相變らず豆腐を作る方の、手傳ひばかりさせて居る。その前から、來て居る奉公人が、萬事に慣れて居て、寺の方の氣受けも好い、といふので、豆腐の運び方は、其男が、やつて居るのだ。此樣子では、なか〳〵山田の番に、廻つて來さうもない。市兵衞々々と呼付けては、追ひ廻しに使ふ。その人使ひの荒い事は、實に恐ろしい程だ。彼是れする中に、半年餘りを過ごしてしまつた。

昔の人は、實に氣も長ければ、辛抱も強く、如何に、大切な役目を、引受けて居るからとて、こんな事までして、時の來るのを、待つて居る、といふのだから、唯だ感心するの外はない。時代違ひの、舊幕の昔には、こんな話は澤山にあつたのだが、今日のやうな時世に育つた、若い人には、とても、こんな辛抱は出來まい。殊に、藩藩の武士と生れて、京都の藩邸を、預かる程の身分の者が、主人へ對する、忠勤の爲には、此苦勞を忍んで居る、といふ、其處に、昔の武士の、辛抱強い所はあつたのだ。

一二

豆腐の持込みを、やつて居たのが、久作といふ男で、大阪生れで、極く身分の低い、行儀作法も知らなければ、口の利き方も粗雜な、つまらない奴ではあつたが、なか〳〵人を逸さぬ、好い調子があつたので、其處に、寺の臺所を、預つて居る者が信用して、久作々々と言つては、豆腐の御用の外に、色々な走り使ひを、言ひ付ける。此奴が、また精勤な奴で、どんな事でも賴まれゝば、へい〳〵と言つて、能く用を達す。存外に、便利な男だ、といふので、益々信用も厚くなり、お寺の人氣が好いから、豆腐運びは、市兵衞の番に、廻つて來ないのは、當然であつた。

或晩の事であつたが、豆腐屋の夫婦が、眼の色を變へて、大騷ぎを始めた。それは、夫婦が汗水流して、稼ぎ貯めた、少しばかりの貯金が、どうして無くなつたか、何時の間にか、紛失して居たのを發見して、是は大變だといふので、家中大掃除を、するやうな騷ぎで、搜し始めた。初めの中は、手傳つて搜して居た、久作が、何時の間にか、姿を隱して、それ切り、歸つて來ない。

『市兵衞や』

『へイ、何か御用事ですか』

『久作が、其處らに居たが、何處へ行つたか、一寸見てお呉れ』

と言はれて、市兵衞の山田は、戸外へ飛出した。暫く經つと、歸つて來て、

『どうしても、判りません』

『えツ、判らぬ』

『へイ』

『彼奴に違ひないぞ。サア大變だ、それだから俺が、言はねえこつちやねえ。お前が全體、彼奴の事を、餘りチヤホ

ヤするから、こんな事に、なつてしまつたんだ』

『そんな事を、今になつて言つたつて、仕樣がないぢやないか。それに、まだ、久作が盜んだのか、盜まないのか、愈々出ないと、決つて見なきや、人を疑ぐる事は、出來ないよ』

『そりや、それに違えねえが、これ位搜して無けりや、もう彼奴に間違ひはねえ。それに仕舞つて置いた處は、お前も俺も、チヤンと見覺えをして置いたのだから、それが自然に、無くなつて了へば、誰か盜んだに違えねえ。此處へ、金を仕舞つてある、といふ事を、知つて居る者は、久作の外にや無えんだ。市兵衞は、此頃來た者で、下の方の仕事ばかり、させて居るから、座敷の方の勝手は、ちつとも知りやしねえ。無論、久作が、持つて逃げたに違えねえんだ』

『さうだね。さう言はれて見りや、さうかも知れないよ』

『そんな、微溫い事を言つて居ちや、仕樣がねえぢやねえか』

『仕樣がねえぢやねえか、と言つたつて、仕樣がないやね』

『オヤ、手前は、金を盜まれた上に、俺の口眞似までして、平然して居るな。ハゝアン、久作と、可怪しかつたんだな』

『戲談言つちや困るよ。幾らお金を盜まれたからつて、そんな馬鹿な事を言はれちや、私だつて、承知は出來ない。あんな小僧ツ子を、どうなるものかね。私を責めるよりは、お前さんは男だから、早く久作の跡を追掛けて、捉へたら宜いぢやないか』

『そんな事を言つたつて、俺にや、追掛ける事は出來ねえ。此通り脚が惡いんだから、仕樣が無えぢやねえか』

豆腐屋の爺は、跛者である。この夫婦喧嘩を、聞いて居た、市兵衞は、氣の毒なやうな氣もして、

『内儀さん、お金を盜まれたんですか』

『ハア、さうだよ。あの久作の奴が、盜んで行つたんだらう、と思ふが、困つちやつたね』

『そりや、飛んだ事で御座いましたね。全體、お金といふなア幾らばかり有つたんですか』

『それがお前、大金なんだよ。私達が、夜の目も合せず、稼いで貯めたのだから、是からまたそれだけ貯めよう、としたつて、仲々容易な事ぢやないんだよ』

『へゝえ、大金といふと、どの位なんですか』

『どの位なんですなんて、五兩幾らか、あつたんだよ』

山田は、心の中で可笑しくは思つたが、笑ふ譯には行かない。

『へえ、五兩なんですか』

その口吻が、如何にも蔑んだやうな、言ひ方であつたから、勝氣の嬶は、面を膨らして、

『五兩といやア、私達の身分にしちや大金なんだから、豆腐屋くらゐをして居て、それだけ儲け出すなア、容易のこツちやない。お前は、變な顏をして、五兩位と言はないばかりに、人を馬鹿にして居るが、全體、豆腐を一つ賣つて幾ら儲かる、と思つて居るのか、知つてるかい』

此最中に、豆腐問答は、恐入つた。山田は苦笑ひして、

『別に、お金高が、少いの多いのと、思つて言つたのぢやないのです。マア、私にお任せなさいまし、久作だつて、今日までお世話になつて居るから、そんな不都合を、働く奴とも思ひません。今に仕事の暇を見て、私も搜しに出かけますから……』

『そんな、暢氣な事を、言つちや困るよ。お金が無くなつて、本人が居なくなつたんだから、直ぐ搜しに行く、といふなら判つてるが、用が濟んだら搜しに行かうなんて、それまで久作の奴が、途中で待つてるものかね』

亭主との爭論は、何時か、山田との爭論に、なつてしまつた。

『宜しう御座います。それぢや、是から久作を、捉へに行つて來ませう』

『どうか、さうしてお呉れ。主人が、こんなに脚が惡いんだから、駈出す事が出來ない。お前、氣の毒だが、大急ぎで駈けて行つて、久作を、捉へて來てお呉れ』

『ヘイ、承知いたしました』

これから、山田は、戸外へ駈出したが、今更に、久作の跡を、追ふなぞといふ、そんな考はないので、すぐに、其足で、宿屋へ、やつて來て、主人を訪ねた。

『オヤ、市兵衞さんか、大層辛抱するんで、此間も、豆腐屋の內儀さんが來て、喜んで居たよ』

『私も、一生懸命に、なつてやつてゐるんですから——時に、旦那、濟みませんが、此間、預けた金の中から、五兩丈け下さいませんか』

『お前さんから、預かつた金を出すのに、不思議はない。今出して上げるから、待つてお在でなさい』

これから、主人は立つて、座敷へ入つた。間もなく、持つて來たのが、紙に包んだ五兩だ。

『サア、持つて行つたら宜いでせう。けれども、市兵衞さん、何に使ふのだね』

『此金の使ひ途は、晩に來て、緩り話します。大笑ひの事が、あるんです』

『さうかい。それぢや、まア、晩に待つて居るから、緩りお出でなさい』

『ハア、さうします』

と、これから山田は、その五兩を掴んで、豆腐屋へ、歸つて來た。

一四

市兵衞が、出た跡で、豆腐屋の夫婦はまた、一仕切り喧嘩をして、散々、揉合つた末が、双方共に疲れて、睨み合ひの姿で居た所へ、市兵衞が、歸つて來た。

『オヤ、歸つて來たね。大層早かつたやうだが、久作は、どうした』

『ヘイ、漸く捉へました』

『えツ、捉へたつて、そりや、マア、よく捉へたね。お金は、持つて居たかい』

『左樣です、金も持つて居りました。本人も捉へたのです』

『本人なざア、どうなつたつて構はないが、お金がありや、宜いよ』

之を聞いて、亭主も、漸く安心の胸を撫でた。

『本當に、お前は、働き者だ。あの久作の野郎が持逃げをしたのは、どう考へても、癪に觸つて堪らねえ。さうして久作はどうしかね』

『久作は捉へたけれど、可哀さうですから、逃がしてやりました』

夫婦は、眼を圓くして、

『何だつて、折角、捉へた久作を、逃がしてしまつたつて、そりや、飛んでもねえ事をしてしまつた。逃がしちや、仕樣がねえぢやねえか』

『けれども、久作を捉へて、訴へて出た所が、つまり罪人が、一人出るだけのことです。外から逃込んで來た、罪人でも、此御山へ入れば、お手入れが無い、といふ位に、貴い所になつて居るのに、其處から罪人を出しちや、御山へ對したつて、濟まないぢやありませんか』

『成る程、それも、さうだな』

理の當然に詰められて、夫婦は、默つてしまつたが、流石に、女房は女氣の、慾の皮は、何處までも突張つて居る。

『お前の言ふのは無茶のやうだけれど、お金の方は、どうなつたかい』

『金は、此通り持つて來ました』

例の、宿屋から、受取つて來た、紙に包んだ五兩を、前に投出すやうにして見せた。

『オヤ〳〵、まア、本當に、お前は、偉いね』

と言ひ乍ら、すぐに手を出して、取上げて見れば、紛ふ方なき、五兩の金子である。たゞ不思議なのは、小判や、銀や、銅錢が、取混ぜて五兩ばかりであつたのが、今度は、揃つた金で、五兩になつて居るのだから、少し變だとは思つたけれど、つまり、無くなつた五兩が、戻つて來たのだから、夫婦は、顏を見合せながら、默つてしまつた。

此事があつてから、市兵衞が、夫婦に信用される事は、一通りでなかつた。外に二人ばかり、歳の極く若い者が、使はれて居たけれど、寺の方の豆腐の御用は、一切、市兵衞に任せることになつた。

そこで、長い間の心願が屆いて、自分の思ふ役を、爲るやうになつたのだから、市兵衞の山田は大喜びで、毎日のやうに、御山廻りに忙しいのも厭はず、一生懸命になつて、木像の所在を、聞き出さうと努めたが、何分にも此事は上の方に居る役僧が、相談の上で、行つた事だから、下廻りの臺所邊りに、彷徨いて居る坊主なぞが、知つて居る譯もなく、況して、寺男なぞが、關係した事でないのだから、折角に苦心して、這入り込んだ、臺所では、どうしても肝腎の事は、聞き出す事が出來なかつた。

それでも根氣よく、毎日のやうに通つては、段々、上の役僧にも取入つて、時折は、手土産なぞを、持つて行つて、機嫌を取り乍ら、世間話に裝へて、それとなく、聞き出さう、とするけれど、容易に、その端緒をさへ、手繰出し得なかつた。

かくて、月日は、矢の如く、何時か知らず、二年餘り過した。國元の重役や老臣からは、屢々の音信があつて、まだか〳〵といふ催促はあつても、取止めた返事を、爲す事の出來ないのは、洵に心苦しくは思ふけれど、仕方がなか

つた。そこで、つく〳〵考へて見るに、どうも臺所へ、出入をする位の事では、此秘密を、聞き出す事は出來まいから、寧そ夜遲くまで、どんな奥の方へでも、入れる事を、やつて見たい、と思つて、色々考へた末が、不圖氣の付いたのは、糞便を汲んで歩く、役であつた。

人間の住む家は、どんな綺麗な、構造になつて居ても、必ず便所が、附いて居る。便所は、汚い所であるから、といふて、綺麗な座敷には、附けて置かぬ、といふ事も出來ず、地面を、廣く取つて、建物が立派なら、たゞ座敷へ直附に、出來て居ないだけの事で、矢張り其近邊に、便所はあるのだ。その糞便を、汲んで廻る、といふのは、斯ういふ事を、探り出すには、最も好い役廻りであると、斯う考へ付いたから、市兵衞は、更に宿屋の主人に、相談の上、どうか斯うか、寺附の糞便汲に、なつてしまつた。

一山の寺院は、なか〳〵に、棟數も多く、本堂から客間、さては庫裏に至るまで、澤山の人が、住んで居る上に參詣人の引きも切らぬ、といふやうな譯であるから、便所の數も、なか〳〵に澤山ある。斯ういふ所で、何時も苦しむのは、糞便の處分である。されば寺附の糞尿汲があつて、それに汲取らせて、處分をするやうに、なつて居たのだ。そこへ氣の付いたのは流石で、市兵衞は、毎日のやうに、此汚い事を厭はずに、努めて居たのである。

漸くにして、寺院の勝手が、悉皆判つて來た。そこで、夜中になると、寢床を、這ひ出しては、各寺院の床下に入つて、詮索を始めたのである。これだけの苦心と誠意を、神も憐んだものか、或夜のこと、本堂の緣下へ、潛り込んで、段々、這ひ廻つて、歩く中に、一つの函を搜し出した。幸ひに、錠前も締りて居ず、普通の白木の函が、長い月日を、床下へ入れて置かれたのだから、黝んで汚くはなつて居るが、頑丈に出來た函である。そつと、其蓋を開けて見ると、意外にも、其中には、綺麗に眞綿で包んで、大切に藏つてあつたのが、紛ふ方なき、家久侯の木像であつたから、流石の市兵衞も、雀躍をするばかりに喜んで、一度は此儘、持つて歸らう、といふ考へにはなつたけれど、その焦る心を、ぢつと抑へて、思案に沈んだ末、獨り首肯いて、そつと床下を潛り出て、自分の寢床へ、入つて寢て